

90-6P

88-361


 旅
 順攻略戰史

大本營參謀總長元帥侯爵山縣有朋閣下題字
 前農商務大臣男爵平田東助閣下序文
 大本營兵站監參謀長陸軍砲兵大佐大島健一殿序文
 東亞歷史地理研究會會長酒井才二郎氏編著

發行所
 合資
 會社 吉川弘文館

明治
 38 4 13
 内交

吳昌碩印

采

氣

積

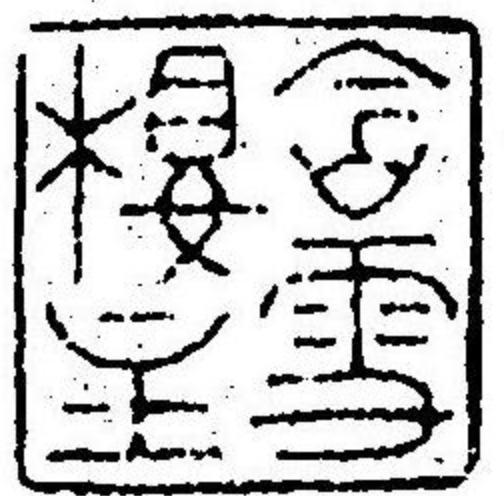
力

序

修史之難、古人已言之、修通常史尚然、況於戰史乎、夫戰者
 尚機變、千態萬狀、轉化無窮、用兵之緩急、攻略之遲速、未可
 以言其得失、能知其得失、獨有主將而已、又兵事尚機密、戰
 報公世者、皆係機密以外、如作戰方略、非水落之後、不可望
 石出、故修戰史者、縱擁千百資料、若不知當時主將之方略、
 則其制勝之蹊徑、漠如捕影、況在戰局未央、戰報未悉之際、
 以叙戰況委曲、其事之難可知也、頃者酒井君、編旅順攻略
 史、跡予索序、今也軍務倥傯、不遑繙閱、叙述精粗不能知之、
 雖然方干戈未戢之日、能蒐輯公私零碎書信、補葺其首尾、

乙正吉題

有雨



欲使人一讀之下瞭然于攻守之情況、拮据經營可謂勤矣、
予多其志也、因書此爲序云

明治三十八年二月

陸軍砲兵大佐 大 島 健 一

平田男爵の序文

氣有り大和魂と曰ふ天孫降臨以來旁礴として我か大八洲の中に浮動す利刃斫る能はず烈火
燬く能はず磨して礪せず涅して緇せず凜乎として秋霜の如く濫乎として春櫻の如し古今を
通し萬世を涉り我か大和民族と與に昇降始終す人或は大和魂を以て武士道と爲し其の封建
の世に在て専ら武士の化育に成ると謂ふと雖武士道は固と國民に固有する大和魂にして武
士に因て始て生せしに非ざるなり但中古封建の世に在て忠臣烈士の龜鑑を後昆に垂れ名將
勇士の譽を竹帛に遺す有り齊く武士の欽仰する所と爲り漸く不文の規律と爲り所謂る武士
道を形成するに至り大和魂は益々涵養啓發せられたるのみ夫れ忠と孝とは人の至情なり義
と勇とは人の至性なり地の東西を問はず色の黃白を論せず何の處か之なからん若し之なけ
れば國因て以て立つなく家因て以て保つなし唯我か大和魂に至ては民族の天性に基し山河
の精華に感し歴史の妙化に育し粲然として光輝を絶東の孤島に放てり宇内高山多しと雖我
か富嶽の靈なるに若かす五洲奇花に富むと雖我か櫻花の清きに若かす建國二千五百有餘年
金甌無缺の 皇室を戴き君は民を子とし民は君を父とし國家を舉て恰も一家の如く其の祖
先を重するの教は延て氏と爲り族と爲り門葉相依り本末共に助け全國を舉て綱目相羅綴す
其の忠孝の情に厚き豈に之を偶然と謂んや建國以來英主雄將の出る有り屢々武を海外に輝
し曾て一回も外國の侵略を受けず中世以降武門權を執るに及て武士は他の三民の標準と爲

り其の勇武と義侠とに成る美談善行は之を口碑に傳へ史説に稱し益々國民固有の性情を鍛治して民を擧て皆武士たらしむるに至れり其の君國の難に當て匹夫匹婦も死を見る歸するか如き者有るは誰か之を素養に非すと云はんや曩に露國の暴戾なる我が鄰國を蠶食し我が國安を脅すを以て屢々協商を試みたるも到底樽俎の能する所に非ざるを認め國家の自衛上遂に干戈に訴るの已むなきに至れり開戦以來海に陸に戦て勝るはなく先づ敵艦を撃破して東西兩海の制海權を收め又滿洲南部の地を掃蕩して敵を沙河の北に壓し金城湯地を以て自ら誇れる旅順の要塞も亦我れの銳鋒を支ふるに足らず夫れ露の強大なる歐洲列國の畏る所なり其の邦土の大なる人口の衆多なる固より我れの比すへきに非ず然も仍ほ戦ふ毎に克く彼を制し遼陽沙河の役の如き常に寡を以て衆に勝ち世界をして歎賞措さらしむる者は我か 皇上聖徳の致す所なりと雖亦我か將卒の忠勇絶倫なるに非ずんば焉そ能く斯の如くなるを得んや嗚呼我か祖先の大和魂は櫻花と與に芬芳を傳へ今や方に發揚して爛漫陸離世界の人目に炫耀せり幾萬の將卒は死して還らざるも忠魂義魄は長く國家と其榮名を傳ふへきなり若し國民たる者後來或は其の培養に怠り名芳をして漸く凋瘵せしむる如きあらば夫れ將た忠死の士に對して何の辭かあらんや項者酒井才二郎君日露戰史を著し之を世に公にせんとし來て予に序を求む予其の擧を嘉し聊か所感を記して以て序に代ゆと云爾

明治三十八年二月

平田東助

旅順攻略戦史目録

- 六月廿六日 攻圍軍編制と敵の動作
前進攻撃盤道占領
劍山占領、安子山亂泥橋、釜頭山、双頂山線占領
- 七月三日 劍山敵逆襲撃退(此日より六日に亘る)
- 廿五日 岔溝西方占領
- 廿六日 總攻撃開始、營城子、老座山、偏石柳子占領
- 廿七日 總攻撃繼續、敵艦隊龍王塘より我左翼砲撃
- 廿九日 總攻撃繼續、双臺溝、安子嶺凹字形山、大白山附近陣地長嶺子英各石線占領
- 卅日 干大山鳳凰山大孤山東方高地占領
- 八月七日 大孤山攻撃開始
- 八日 敵艦我を砲撃々退、大孤山占領
- 九日 小孤山占領、敵來襲艦隊砲撃々退
- 十四日 小東溝隋家屯線占領
- 十五日 礮盤溝南方小東溝東北占領
- 十六日 要塞内非戦闘員避難聖旨及勸降書傳達
- 十七日 右拒絶し來る
- 十九日 第一回本線總攻撃開始
- 廿日 石板橋北方占領
- 廿一日 大平溝東南高地より刺兔溝北方高地占領、東鷄冠山北砲壘中間砲壘奪取後棄
- 廿二日 盤龍山東西砲壘占領、盤龍山逆襲撃退
- 廿三日 寺兒溝西北高地占領
- 九月一日 正攻法開始
- 六日 盤龍山逆襲々退
- 十九日 第二回本線總攻撃開始
- 二十日 クロバトキン砲壘占領、水師營南方堡壘占領、ナマコ山占領
- 廿二日 二〇三西北部占領後引上
- 廿五日 山本少將戦死
- 廿八日 此日より海軍砲の港内砲撃
- 十月二日 東鷄冠山前敵逆襲撃退
- 四日 敵南方高地奇襲敵砲破壊
- 十一日 敵艦出港海戦撃退、龍眼南方鐵道橋附近占領
- 十三日 水源杜塞
- 十六日 鉢卷山占領
- 十七日 二龍山二〇三前敵及鉢卷山逆襲撃退
- 廿四日 旅順大火
- 廿五日 敵船一隻撃沈
- 廿六日 敵砲壘港内大砲撃二龍山鉢卷山南部壘壕占領
- 廿九日 連日特に昨日より港内大砲撃敵艦大破壊二龍山攻路頭逆襲撃退、松樹山攻路頭逆襲撃退一部退却東鷄冠山北砲壘外岸穹窿破壊
- 三十日 第三回本線總攻撃開始、松樹山二龍山東鷄

冠山北砲臺外岸斜頂迄占領、P砲臺占領、
 コブ山占領
 十一月六日 松樹山二龍山火藥庫爆發
 十九日 機器局火藥庫爆發
 廿一日 東鷄冠山北砲臺前敵逆襲擊退
 廿二日 港内器機局大火
 廿六日 第四回本線總攻撃、松樹山強襲不成功、總
 夜襲松、二、鷄北斜頂面占領
 廿八日 二〇三東五〇高地占領奪還
 廿九日 五〇高地占領設看的二〇三高地占領奪還さ
 る
 卅日 二〇三高地占領敵夜襲擊退續て退却
 十二月一日 港内汽船二隻撃沈二日更に一隻撃沈
 二日 左翼方面一部休戦
 三日 赤阪山大部占領、H砲臺破壊東鷄冠山北砲
 臺破壊港内砲撃「ポーヘダ」レトツイザンに
 命中
 五日 二〇三高地占領、白玉山南方火藥庫爆發
 六日 ボルタワ沈没レトツイザン傾(此日迄命中
 彈ポーヘダ卅四レトツイザン又バルラダ卅
 二ボルタワ十一其他五十發)武庫火災
 同日 赤阪山占領、松樹山舊砲臺火藥庫爆發、一
 部休戦死傷收容、寺兒溝及三里橋北方高地
 占領
 七日以降十四日迄の間に於て敗殘敵艦を殲滅す

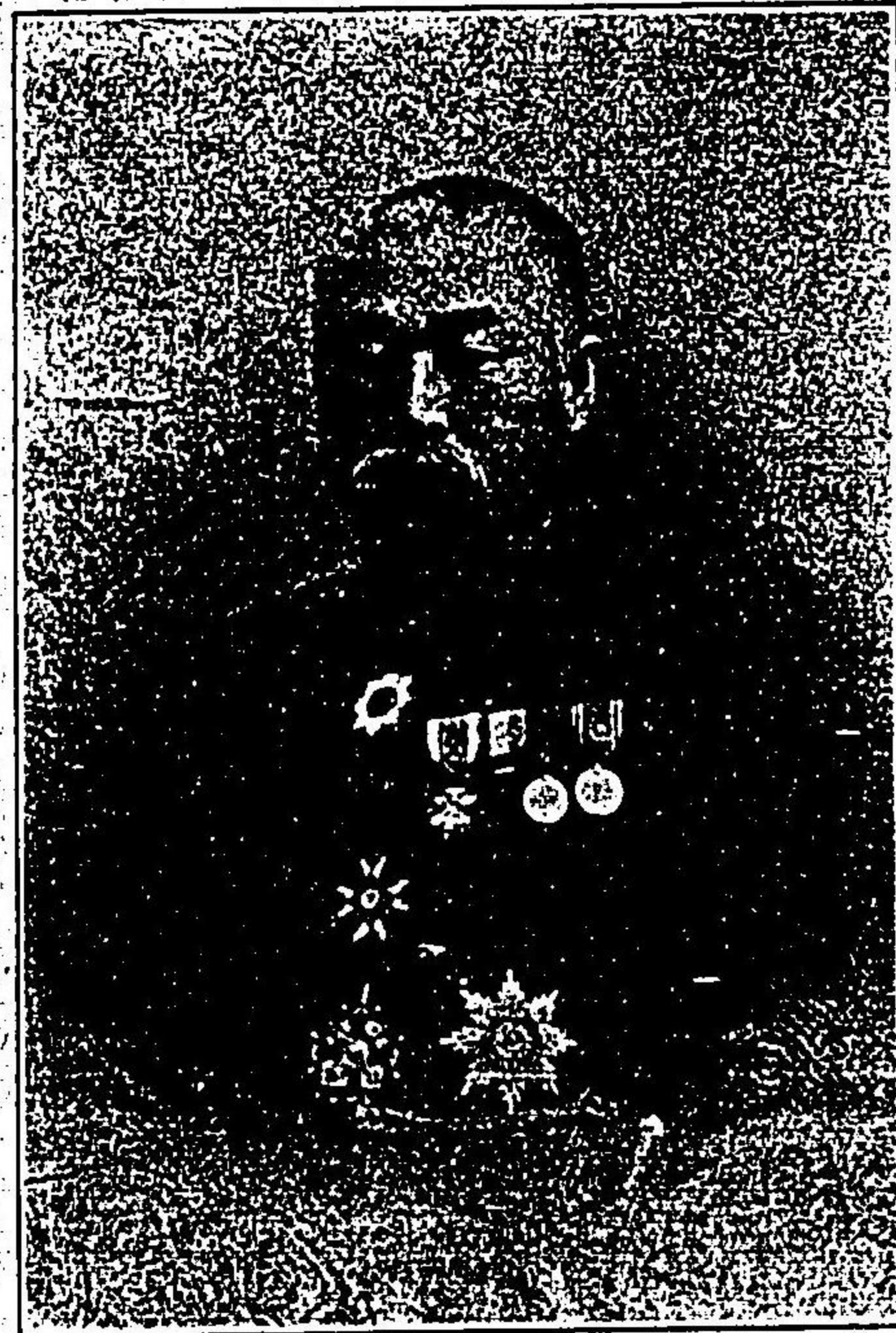
十六日 ステツセル將軍より來書
 十八日 東鷄冠山北砲臺占領
 廿二日 後三羊頭村北西半島占領、後楊樹溝東方高
 地占領、西太陽溝砲臺火災
 廿四日 前三羊頭村小房村大劉家屯占領、右翼方面
 敵前進陣地全占領
 廿八日 二龍山占領
 卅一日 松樹山占領
 明治三十八年
 一月一日 盤龍山舊圍廓一部破壊、H堡壘占領、望臺
 占領、要塞守將ステツセル降書提出
 二日 聖上旅順敵將の名譽降伏勅許
 午後一時水師營にて彼我會見降伏條件談判
 東鷄冠山及Q砲臺M、N砲臺占領



百彈海雷天正響
合國年歲萬歲
橫精神到處
堅於鐵一基終
屠旅頭城
昨有夢臨所
有心遠寄乃未
將軍

為何武運祈長久短急
木末適武人武運於吾
宜短急奉祈八百萬軍
神
癸丑春日
石林繼
堀内賢兄一囑





氏春光屋土將中軍陸長團師一十第前



氏直久島大爵男將中軍陸長團師九第



氏雄重島駿將中軍陸長團師一十第



氏本務村松將中軍陸長團師一第故



氏藏陽島豐將少軍陸長團兵砲軍圍攻



氏敏尙道大將中軍陸長團師七第



氏一健島大佐大兵砲軍陸長謀參部站兵營本大

旅順攻略戦史

酒井才二郎編著

攻圍軍の部

緒言

藩國が難攻不拔と稱したる旅順の金湯は、忠勇絶倫なる我日本帝國軍に依りて攻略せしむるは、旅順の要塞戦は戦史ありて以來未曾有の激戦闘にして、世界戦史に一大異彩を印象せしと共に、世界列國の要塞戦術と戦略とに一大革新を促したり、抑も旅順の要塞は露國が天然の險要を利用し、之に最新の科學的築城術を應用して、七年餘の歲月と巨額の經費とを投じて經營し東洋に對する兵略の策源地と爲したる堅城たり、彼が難攻不落と稱したるは決して誇言にあらず、然れども我軍敢勁剛の日本軍は之を攻陥したり、

我軍が旅順の堅城を包圍してより茲に七閱月、其日子を偸ふれば二百又餘日、此半歳餘の久しき間我軍は智術を盡し、精力を盡し、奇襲に繼くに強襲を以てし、陽攻に繼くに正攻を以てし、肉弾を以て鐵火に當り、肉塊を以て堅壁に通り、寸進尺歩皆な肉塊と碧血とを以てし、而して遂に此天險の金城を攻略し、驍勇無雙の敵師をして我軍門に面縛せしむるに至らしめたり、我軍の忠烈勇武は形容するに辭なし、嗚呼我皇師の嚮ふ所、抜けざるの堡壘なく、略せざるの城塞なし、

征露の軍旅起るや、我帝國は先づ海上権の制握に力め、客年二月八日海軍は仁川港に旅順口外に敵艦を撃破し、同時に陸軍の一部隊は韓國に上陸して、其北韓に横行せし敵兵を掃蕩し、爾來海に陸に連戦大捷を博し、五月三日を以て行ひたる第三次の壯烈なる閉塞に依り、旅順口の封鎖完成す、於此五月五日の端午の佳辰を以て、與將軍の統帥する第二軍の一梯團は遼東半島に上陸し、後續部隊亦た十九日に上陸せり、其廿六日を期し金州半島の咽喉部たる金州城及南山の堅壁を抜き、此半島の敵軍をして全く孤立無援の否境に沈淪せしめ、翌二十七日南關嶺の要害を陥れたり、因て六月六日乃木將軍統帥の下に、第一、第九、第十一の三個師團を以て、第三軍即ち旅順攻圍軍は編成せられたり、爾來旅順の要塞攻撃準備戦は開始され、常に我攻圍軍の勝利に歸し、越へて七月三十日土城子南方一帶の高地脈を経て、大孤山の東方に連亘する高地線を占領し、八月八日大孤山の砲壘を攻略し、翌九日小孤山の砲壘を奪ひて、敵軍を旅順の本防禦線内に驅逐壓迫したり、於此攻圍作業に着手し、同十六日軍使をして敵の本防禦線内に在る非戦闘員等救助の慈悲なる聖旨を傳ふると共に勸降書を致さしめたるも、敵師之を拒絶したるを以て、同十八日より本防禦線外部數個の補備砲壘を攻略し、直ちに本防禦線砲壘に突撃して同廿二日盤龍山東北砲壘を略取し、爾來二ヶ月間數十回の惡戦猛闘を経て、同一砲壘即ち一ノ戸砲壘を占領し、次で東鷄冠山北砲壘を攻略し、十一月三十日二百三高地を攻陥して、敵に致命傷を與へ、尋て敗殘敵艦の殲滅となり、

更に次て二龍山、松樹山、望雲の各砲臺を爆破攻陥して敵の咽喉を刺し、彼をして面縛降伏せしむるに至らしめたり、噫々盛なる哉我皇師の威武、噫々快なる哉旅順の攻陥、因て左に序を追ひ節を分ちて、攻圍軍の激戦猛闘、困苦艱難の實況を記述し、以て我新占領地たる旅順全景の模倣と共に、我大日本帝國の光榮ある要塞戦捷の紀念に資せんとす、然れども豫め讀者諸君に謝すべきは、可及的其戦闘の詳況を記述せんとするも軍機秘密は固より之を保持せざる可らざるを以て、或は履を隔て、痒を搔くの嘆あるならんと信す、請ふ之を恕せられよ、

攻圍軍の編制と敗敵の動作

金州南山の攻略、南關嶺、青泥窪、柳樹屯等の占領には、奥將軍の統率する第二軍即ち第一第三第四の三個師團之に當りたるも、戦局發展の爲め、旅順攻圍軍は乃木將軍統帥の下に第一、第九、第十一、の三個師團を以て編成せられたり、而して第一師團は伏見大將宮に代て松村中將之が師團長たり、第九師團長は大島中將(久直)第十一師團長は土屋中將にして、攻圍軍參謀長は伊知地少將(幸介)なり、青泥窪、柳樹屯は南山險要の占領と共に我有に歸し、大連灣の掃海事業は、六月中旬を以て達成し、因て新銳第十一師團幾萬の壯獅は、意氣軒昂陸續金州半島に上陸したり、攻圍軍中の第一第十一兩師團は茲に集中したるを以て第一師團を右縦隊とし第十一師團を左縦隊と爲したり、是より先き第二軍金州南山及び南關嶺の敵を撃攘するや、

敵は旅順方面に敗退せしも尙ほ双臺溝分水嶺子附近に停止し、其斥候は絶へず我第二軍の前面に近接徘徊し、時々我哨兵線に向て狙撃し、六月一日の狀況は彼我監視部隊は僅に一千米突の距離を保ちて相對峙したるを以て、敵は我兵の視線を避くる爲め往々支那服を着して我に近接し、突然哨兵を撃射せり、敵か旅順方面に退却せしめて此附近に停止する目的は、彼のクロバトキンの率ゆる遼陽方面の敵軍南下の報に接したる爲め、之れと策應して我軍を夾撃せん計畫なり、故に敗敵は六月六日より石山溝東側の標高百八十七高地の東北麓に數多の防禦工事を始めたり、六月十三日に至り敵の有力なる偵察隊は案子山、臺子山の線に占據する我陣地に來襲し、射撃を交換して薄暮其停止地に退却したり、翌十四日に至り敵の砲艦二隻戰艦一隻黒石礁附近に遊弋し來りて、我軍の陣地に向ひ數發の砲撃を試みたるも照準定まらず、爲めに、我軍には一の損害なし、敵艦は約四十分にして旅順港方面に向ひて去りたり、此日清國人百餘名營城子方面より逃れ來りて、我右縦隊に投ず、我軍之を愛撫し其希望の地に送還したり、彼等の中には敵の砲弾に中りて負傷し居りし者數名ありたり、當日我右縦隊左翼より出したる、偵察隊は五營營子附近に於て敵の偵察兵と衝突し、其乘馬歩兵三、徒歩兵若干を斃し乘馬一頭を鹵獲し、且つ其偵察の結果案子嶺及び其南方高地には敵の防禦若干あるも、黃泥川犬上下屯西方高地には一の工事なきを認め、又敵の偵察兵の死體に依り營溝附近の敵は狙撃歩兵第五聯隊にして、猪圈子溝附近の敵は同

第二十八聯隊なるを確め得たり、六月十六日此日侍從武官伊藤瀨平東宮武官尾藤知勝の兩氏は聖旨と令旨を奉して軍司令部に着し左の聖旨并に令旨を傳へらる、

第二軍は出征以來海軍と協同し、諸般の困難に堪へ安全に敵前上陸を遂行し、殊に今回には非常の決心と精力とを以て、激戦の後南山一帯の要地を占領し將來に於ける全軍行動の利便を得せしめたるは、是れ全く軍司令官以下將校下士卒忠勇の致す所にして天皇陛下并に皇太子殿下深く御満足に在らせらるゝと、同時に死傷者に對しては厚く愍然に思召され、且つ各自自重自愛以て最終の成功を望ませ給ふ、

更に伊藤侍從武官は、皇后陛下よりも親しく右同様の思召を傳ふべき旨御沙汰あらせられたりと傳へらる、將士感奮必す此優渥なる聖旨令旨に副ひ奉らんと盟ふ、

當日我左縦隊の斥候は案子嶺子の前面に於て、敵の斥候二名を捕虜す、其一名は低頭救命を乞ふて、曰く我家族は皆な我れに依て生活す、我死せば家眷悉く活路を失すと、而して我軍の糾問に對し委さに敵情を語りしも、他の一名は放言壯語して速に死に就かんと望みたり、六月十八日午後四時五十分に至り敵の軍艦三隻驅逐艦八隻小平島附近に現

出し、我陣地の左翼に向て僅かに一發の砲弾を送るや、我艦艇の爲め追撃せられ約三十分砲戦の後敵艦は損害を被ふりて旅順港内に逃走したり、雙臺溝附近に於ける敵の防禦工事は益々増加し、且つ探海燈を設置し其近海及我陸上の陣地を探照したり、

六月廿五日の偵察に依れば、敵は我右縦隊前面の對面溝南方約二千米突の高地にも防禦工事を施し、盤道附近にも、前夜より工事を始めたり、金龍寺溝東南方高地の工事は其南方の基脚より双臺溝の南端を経て旅順街道に連亘して築造したり、又双臺溝西南辛臺子北方高地には砲臺を構築し砲十門を配備し、其西方の高地脈に壘壕を設け、更に其東南の高地には數多の幕營を張りあり、双臺溝、案子嶺子、大石洞一帶の線に備ふる敵の總豫備隊は土城子の東南約一里の周家屯、東房身、王家屯の各地に位置し、其兵力は歩兵約三千砲三十二門なるか如し、此日午後三時我右縦隊の前面に於て俄然盛んに銃砲聲起る、之れ我軍の前進を阻止せん計畫の威嚇砲撃なるも其照準定まらず、皆な我軍の前方遠隔の地に落下し、我れに一の損傷なく、只た地上幾多の凹地を作成したるに過ぎざりき、

双臺溝附近敵の防禦線

敵は遼陽方面より友軍の南下し來るを空想して旅順の本防禦線に退却せず、依然双臺溝附近に停止して防禦工事を施せり、其配備線は双臺溝を中心として、西南の高地脈に連亘して砲臺掩堡を構築し、金龍寺溝東南の高地を前進陣地と爲して營城子對面溝一帶の線にも防禦工事を施して監視

線と爲し、左方老座山の線に前衛を置き、右方黃龍尾半島に歩哨線を張り、更に双頂山、歪頭山、大白山及び中央峯子嶺、凹字形山一帯の高地線にも堅固なる工事を施し、其前方岔溝備、石柵子、五岔營子、亂泥橋、南岔溝等一帯の高地に連亘して砲壘を築き多数の火炮を備へ、其附近の敵開せる地區の後方に點々機關砲を配備し、之に連繫して掩蓋ある塹壕を築き、其前面一帯に鐵條網、狼狽及地雷等の副防禦を設け、約一個師團半の歩兵と六個中隊の砲兵を配置し、我軍の進入を拒止し以て南下の友軍と夾撃せん計畫とこそ知られたり、

我軍の前進攻撃（歪頭山、劍山等の占領）

六月廿六日我軍は左右兩縱隊に分れ其右縱隊の左翼隊は盤道方面に向ひ、左縱隊亦中央左右の三隊に區分し、其右翼隊は亂泥橋東方高地に、中央隊は其南方標高三百六十八米突の劍山及び黃泥川大上下屯北方高地に向ひ、左翼隊は双頂山に向ひ、午前五時頃軍容肅々として陣地を發し、右縱隊の左翼隊は午前十一時早くも盤道の西方及南方の敵陣に達せり、敵は頑強の抵抗を爲すならんと豫期したるに意外にも、微弱なる抵抗を爲したる而已にて退却したるを以て直に之を占領し、亂泥橋東方に向ひたる左縱隊の右翼隊も亦十一時頃敵陣に進前したるに之れ亦大なる抵抗なくして同地を占領したり、

劍山雙頂山の占領

亂泥橋南方劍山（標高三百六十八米突）及黃泥川大上下屯北方の高地に向ひたる、左縱隊の中央隊は途上幾多の敵を撃退したる後、午後一時頃劍山の峻嶮に據れる敵壘に向て先づ砲火を開きしに、敵兵直ちに應射し激烈なる砲戰約二時間にして、敵砲漸く衰退の形勢あるや、我歩兵は驀然敵壘に肉薄し、苦戰激闘の後午後五時之を占領したり、此敵兵は歩兵約一個大隊速射砲及機關砲數門を有し、歪頭、中腹及基脚の各線に堅固なる防禦工事を施し、猛烈に我兵の攀登を瞰射したるも我兵毫も屈せず最後の突撃にて之を占領すると共に六珊速射砲二門砲彈二百發を鹵獲したり、此戰闘に於て我兵の死傷は百三十名なりき、此中央隊の占領したる標高三百六十八米突の高地は無名山にして、岩石突立山容嵯峨たる峻峰、加ふるに今や我か忠勇幾多の碧血を流して占領し得たるを以て之を劍山と命名し紀念の一と爲したるものなり、劍山を占領するや歪頭山、小平島の敵は殆んど抵抗を爲し得ずして潰走したり、

劍山は此附近の最高標にして、四圍の群山皆其脚下にあり、歪頭より前方を展望すれば旅順背面の防禦の形勢より黃金、老鐵の諸山一眸の中に集まる、小平島は黃海に瀕する一の良港なり、我軍が此山此半島を占領したるは大に、大連灣の掩護を確實ならしむると同時に、敵の陣地及び旅順背面の状態を知り、將來の作戰に大利益を獲得したり、即ち此占領の爲め彼從來の位置全く轉倒したるものなり、

に大白山方向に潰亂したり、

二回の逆襲

敵は我軍の突撃の爲め潰敗したるも、逆襲は敵の長技再び逆襲し來らんと豫期せしに果せる哉、同夜八時三十分敵兵約一大隊軍樂を奏し大白山方向より攻進し來る、我第一線は僅かに陣地兩翼の守備兵を残し、其他を以て逆襲に轉せしに敵は我喊聲に恐怖狼狽して退却したり、

此日我中央隊に來襲せし敵は歩兵約二個大隊、砲約十二門、機關砲三門にして、敵は退却して同夜は大白山東方一帯の高地線より王家店東北方高地に亘る線に停止したり、

左翼隊方面の戦況

六月三十日午前五時三十分老座山北方一帯の高地に在りし、我前哨は敵兵前進し來るの徴あるを認めしに、果して同六時に至り敵兵約二個小隊は標高百九十五米突の無名高地に同一個中隊は標高百二十七米突の高地附近に現出し來たり、我兵と射撃を交換し午後一時に至り敵兵漸次増加せしを以て、我前哨部隊は衆寡敵せざれば不利の戰闘を避けて本陣地に歸還せしに、午後三時過敵兵約二個中隊密集隊形を以て老座山北方の鞍部を下り前進し來りしを以て、我砲兵之を急撃せしに敵は驚愕狼狽して敗走したり、然るに午後六時三十分頃敵兵一個大隊老座山南方高地に散開し、我に向て射撃を開始し間もなく同山北方の鞍部に砲四門を有する砲兵現出し我左翼隊を猛射す、於此我砲兵之に應射急撃せしに敵砲は沈黙したるも依然其陣地を固守して夜を徹したり、

双頂山に向ひたる左縱隊の左翼隊は此高地の敵を撃退し直ちに之を占領したり、於此我全軍の第一線は右翼は案子山西麓より、盤道西方約一吉羅米突に在る高地、亂泥橋東方及南方の高地を経て双頂山に亘る線に進前位置したり、依て更に六月三十日雙臺溝案子嶺方面を偵察せしに、雙臺溝方面の敵情は別に異狀なきも、案子嶺高地の南方一帯の稜線より其東南約三吉羅米突の山嶺附近に亘りて敵は防禦工事を施し、又老座山方面にては其西方王家店の南北に防禦工事あるを認知したり、

劍山の逆襲

七月三日午後一時に至り我左縱隊の中央隊が占據する劍山に向て、敵の歩兵約二個中隊砲兵一個中隊（砲八門）逆襲し來る、我れは豫て期したることなれば些しも騒かず、其一隊を豫備と爲し散兵線の後方鞍部に埋伏せしめ、前進隊は散兵線の防禦工事に據り邀撃し、銃砲戰を爲す約三時間午後四時三十分頃敵は歩兵約一個大隊砲十六門の増援を得て、疾風の勢を以て我第一線に向て突進し來る、我歩兵は砲兵機關砲兵と協力して銃砲彈を雨下し、猛烈に射撃したれば、敵は之に堪へ得ずして多数の死體を遺棄して潰走したるも、午後五時二十分に至り敵は砲四門を大石洞西方高地附近に布陣して、同中央隊の第一線に向て射撃を雨下したる後、午後七時逐次大白山方向に退却の色あるや、我隊之を追撃せしに流石は露兵多大の損害にも屈せず、我れの追撃を知るや戰友の死屍を掩護と爲して應戰一時間餘突貫の機は熟せり、我軍は狂瀾怒濤の勢を以て突貫せしに敵は遂

右翼隊方面の戦況

七月四日午前七時三十分敵の歩兵一中隊南谷溝東方高地に、他の一中隊は同地の東南約一千五百米突の高地に現出して防禦工事を始めたり、依て我砲兵大隊之を砲撃せしに敵は狼狽して高地稜線の後方に隠匿せり、之と同時に案子嶺附近に在る敵砲約四門は我砲兵に向けて放火を開始せしを以て、我砲兵は遮蔽地點に位置を轉換し主として敵の歩兵を目標として砲火を注ぎたり、爾後情況に變化なくして夜に入り、我に對せし敵は歩兵約一大隊案子嶺に在りし敵の砲兵は新式速射砲四門舊式砲六門なりしが如し、

中央隊の苦戦

七月四日午前一時より二時に亘り、敵の歩兵約二中隊劍山の我陣地に向ひ兩回突撃し來りしも我兵悉く之を撃退せしに、午前六時に至り敵の歩兵一個大隊半、更に劍山及其東南約三千米突の高地に在る我陣地の左翼に向けて逆襲し來りしを以て我歩砲兵は急撃射して之を阻礙す、已にして王家店西方の鞍部に在る敵の砲兵約八門我に向けて砲火を開き、午前七時頃に至り敵は歩兵約三個大隊に増加し、我防禦線の前方八百乃至一千米突の地點に散開し來り其砲兵は劍山及び我歩兵陣地を猛射す、同三十分に至り敵の歩兵約二個中隊更に大石洞方面より前進し來る、依て我豫備隊は午前八時西部猪園子溝に向けて前進せり、此間敵は屢々突進を企圖せしも我兵の猛烈なる射撃の爲め其目的を達する能はざりし、正午に至り我隊の前面に現出せし敵は約七個大隊半以上にして、劍山の西方には更に敵の歩兵一聯隊ありし、

午後一時三十分劍山の東麓に在りし我砲兵二個中隊は西部猪園子溝の西南約一千五百米突の高地に陣地を變換し敵の歩兵火を避けたり、午後三時五十分頃に至り敵の砲兵再び劍山の我が陣地を猛射し、其歩兵は屢々前進を企てしも我守備兵の強硬なる抵抗に遇ひ其目的を達する能はざりし、然れども王家店西南方及毛道溝東方高地并に案子嶺南側に在りし敵砲は其射撃六千米突の遠きに達し、其曳火射撃の威力と精度とは猛烈を極め、我砲兵は甚だしく苦戦し、又同高地上に在る我散兵も其位置を保守すること困難なるに至れり、加之ならず中央隊前面の敵は歩兵約十個大隊に増加し、加ふるに敵の艦隊老座山の海岸に接近し來りて我左翼に向けて砲撃を爲し、我軍頗る苦戦し劍山の陣地を敵に奪還せんとするの苦境に陥りしも、劍山は前述の如く我軍將來の作戰上最も緊要の地點なれば我兵は殲滅を期し死守苦戦し居りしに、午後六時豫備隊は鐘家屯附近に、重砲隊三中隊は盤道附近に、同二中隊は黃泥川大上下屯東方に前進し來りて中央隊の此苦戦を援助し、海軍陸戰重砲隊亦た南沙河附近に陣地を占領して戰勢を張りたり、然れども敵は頑強にして尙ほ退却せざるのみならず午後十一時頃に至り復た劍山に逆襲し來れり、之れ戰闘を終る敵の手段なるを知りしかば、待ち設けたる我軍は遊撃奮進多數の損害を與へて撃退したる爲め、敵は數十の死體を遺棄して退却したり、敵か必成を期し多大の兵力を以て奪還せんと企圖せし劍山は我兵の勇敢剛氣なる爲め、遂に其目的を達し得ず、反て幾多の損害を被りて撃退されたり、劍山が如何

に敵の爲めにも必要な陣地なるかは推知し得べし、

左翼隊方面の戦況

此日午前六時左翼隊の砲兵は、老座山北方鞍部なる敵の砲兵陣地に向けて砲火を開きしに、敵砲は微弱なる應射を爲して沈黙したりと雖も其歩兵は同山北方一帯の高地の稜線に散開して我を猛射せしのみならず、午前十一時過に至り敵の歩兵約一個大隊西方より更に老座山に向けて前進し來る、仍て我れは豫備隊を第一線に増加せしに、午後三時頃敵兵逐次増加し戰勢稍活氣を呈し來り、五時頃老座山北側に在る砲兵も亦た射撃を始め我の銃聲砲音甚熾なり、午後六時に至り前記の如く敵艦數隻老座山の近海に現出して、我陣地を砲撃せし爲め我兵頗る苦戦したるも、機を見るに鈍なる敵の歩兵は敢て前進し來らざりし爲め戰闘は夜に入りて停止し我兵は其陣地を確守したり、

右縦隊方面

此日午前五時敵の歩兵約一個中隊南谷溝の北方約一千米突の高地に現出し、五岔營子及び其北方に在る我監視部隊に向けて射撃す、我兵之に應射し午前九時に至る此時敵兵約二個中隊南谷溝村内より前進して、其南方約二千米突の高地を占領し我陣地の左翼に向けて射撃すると同時に、同村北方高地に在りし敵の歩兵約一個中隊も亦盤道西方高地の我陣地を急射し、我兵之に應じ銃戰最も熾なり、九時四十分我左縦隊の右翼隊に屬する砲兵南谷溝村南方の敵を砲撃せしに敵は高地稜線の後方に隠匿したり、午後十一時半敵の小部隊

收城驛南方より盤道西方の我陣地に向ひ夜襲し來りしも直ちに之を撃退したり、

左縦隊中央方面の戦況

七月五日午前二時半敵の歩兵大部隊我劍山守備兵に向ひ正面及側面より突撃し來り我兵格闘して之を撃退せしに、同六時三十分より敵は退却を始め午前十時に至り一部隊は大白山一帯の高地に停止して工事を始めたも、其の他は陸續西方に向けて退却したり、此日我歩兵一小隊は劍山の西南稜に在る舊小哨を恢復せん目的を以て前進せしに敵の十字火に陥り目的を達せざりし、

左翼隊方面の戦況

老座山附近にありし敵の大部隊は此日朝來退却を始め、其一帶の高地線には只監視兵を殘すのみ、午前十一時に至り敵の艦艇五六隻龍王塘沖に現はれ、時々双頂山及黃泥川大上下屯附近の我陣地を砲撃して午後六時に至り退去したり右翼隊方面には斥候の小衝のみにて別に記すべきよし、

右縦隊方面

七月五日午前二時半敵の歩兵前進して、盤道西方高地の我陣地前五十米突の地點迄近邁し來りしを以て、我守備兵之を撃退せしに拂曉再び攻撃を試みしも亦た撃退したる爲め、逐次退却して其影を失せり、以上三日間の戰闘に於ける敵兵の動作を察するに、單に偵察戰又は威嚇運動にあらずして其防禦線を堅固にせん爲め

我軍に奪取せられたる劍山を奪還し、尙ほ爲し得べくんば青泥窪に於ける我施設を破壊し旅順の防備を増設し、以て其命脈を永からしめん目的に外ならず、當時敵の捕虜中尉の言に據れば敵將ステッセルは劍山を失したるを甚だ遺憾とし、如何なる手段を盡しても、又如何に多大の損害を被ふるも之を奪還せよとの嚴命を此線に在る部隊長に下したるがゆへ、斯く數回の逆襲を試みたるものなりと、以て敵軍意思のある所を知るべし、而して我軍の前面に現出せし敵の兵力は歩兵約十四個大隊砲二十四門なりしとなり、

攻圍軍の實員完成す

攻圍軍中の第九師團は七月中旬を以て青泥窪に上陸したるを以て之を中央縱隊と爲したり於此第一師團を右縱隊に第九師團を中央縱隊に第十一師團を左縱隊と爲し攻圍軍の實員茲に全く完成したり、

七月六日より同二十五日迄は斥候其他の小衝突のみにして別に記すべき戦闘なし、

彼我兩軍の陣地

七月廿五日現在に於ける我攻圍軍の陣地は、右縱隊(第一師團)は其右翼隊を以て案子山附近より王家屯南方高地に亘る線を、左翼隊を以て王家屯南方高地の南麓附近より盤道附近に亘る線を占領し、中央縱隊(新銳第九師團)は盤道の東南側高地より亂泥橋東南方約二千米突に亘り、左縱隊(第十二師團)は其右翼隊を以て亂泥橋南方約三千米突の

高地より劍山黃泥川大上下屯附近を経て雙頂山に亘る線を占領して敵と對峙したり、敵軍の陣地は北方雙台溝附近より圍屏溝東北高地案子嶺、毛道溝東北高地を経て南方大白山に亘りて、堅牢なる掩堡砲壘を二連に構築して我に對したり、

總攻撃の開始

(七月廿六日)

我が攻圍軍の編制は完成し戰機は熟したり、於此前面の敵を掃蕩すべき總攻撃の部署は定まれり、其概要は三縱隊等頭一齊の運動にして、右縱隊を右翼、中央、左翼の三部隊に中央縱隊を左右兩翼の二部隊に、左縱隊を同しく左右兩翼の二部隊と區署し、之に特設砲兵隊附屬せり、總攻撃は愈々七月二十六日を以て開始せられたり、

我が攻圍軍の三縱隊は意氣衝天の勢を以て午前二時を期し陣地を發し前進行動に移りしに、午前九時に至り降雨甚たしく山上の敵壘濃霧に裏まれ、爲めに砲撃の照準を定むるを得ざりしも歩兵は敵の銃砲火を冒して敵壘に向て躍進したり、其各縱隊の戦況は左の如し、

右縱隊の戦況

右縱隊は豫定の如く左右中央の三隊に部署し、其右翼隊は牧城驛營城子の敵に向ひ、中央隊は西方王家屯の線より旅順街道を双臺溝の敵に向ひ、左翼隊は中央隊の左側に聯繫し軍容整々として前進す、午前四時の頃右翼隊牧城驛に達すれば敵は早くも風を喰ふて逃走し隻影なし因て直ちに之

を占領し、更に斥候を前進せしめしに幾干ならずして敵騎三十に遭遇す、我斥候十二名之を攻撃し北を迫りて東沙崗子の附近に至れば敵騎約百散兵線を張りて我を射撃す、斥候之れを後續部隊に報ずるや、前衛の歩兵部隊突進して之を撃退し午前六時東沙崗子を占領す、此時後文家屯より西沙崗子に亘る一帯の高地に敵の歩兵約二百騎兵三十内外出沒す、我前衛歩兵之に向て前進すれば敵は恐怖して後文家屯方面に向て退却せり、此後文家屯の前面は廣漠たる平野營城子、双臺溝に連り其間波狀地を爲す、敵は此波狀の地に幾多の掩堡砲壘を築造したり、之に對する我軍は地物なき平野を曝露前進せざる可らざれば、幾多の損害は豫め覺悟せざる可らず、故に之が攻撃點に就ては將校なる者の最も考慮を要する所たり、

此時中央隊の一個聯隊は縱隊の豫備となりて旅順街道を前進し、右翼隊の一個聯隊之に連聯して前進し、我砲兵隊は營城子、射面溝、金龍寺溝、双臺溝附近及案子嶺一帯の敵砲壘と相對す、營城子の敵砲は早くも我が前進を妨害せんと砲火を開くや、我砲兵之に應射せしに敵は陣地の要害を利用し猛烈に砲撃を爲せしも、前牧城驛南方無名高地の敵砲は我砲撃の爲め漸く衰弱せしを以て中央隊歩兵の一部隊は突撃肉薄して山嶺に攀登して之を占領し、日章旗の高く頂點に翻るを見たる右翼隊は、時機來れりとし豁然躍進後文家屯の敵陣地に突進せしに敵は周章狼狽して一戦をも交へ得ず潰走したるも之を長驅せず後文家屯を占領して北山半島一名黃龍半島を封鎖し、右縱隊は其占領陣地に停止し

て徹宵したり、

中央縱隊の攻撃計畫

中央縱隊は左右二翼に部署し、其左翼隊は歩兵の第一線を以て岔溝南方高地を占領し、之と同時に砲火を開き歩兵の掩護を以て、南岔溝西方高地の稜線にある敵の機關砲陣地を砲撃して此陣地を奪取せん計畫なり、右翼隊は歩兵を岔溝村の北方高地に進出せしめ、砲戰の熟するを待て前面の双臺溝と案子嶺間に屹立する凹字形山の敵壘を攻略せんとするにあり、抑も此方面の敵は壘きに劍山、歪頭山、双頂山等の險要陣地を攻略され、幾回の奪還逆襲も遂に効なきを以て、今は双臺溝、案子嶺、老座山一帯の防禦線に據り、其前方に突出屹立する凹字形山、兜山一帯の支脈を占領して、我れを瞰制し其嶺頂に半永久的堅牢の砲壘を構築し、更に巨材を組み尺餘の土砂を以て掩へる掩蓋堡を構へ、斷壕を設けて、砲壘間の聯繫を保ち、巨石を疊みて胸障を築き、且つ山腹と基脚には鐵條網、狼狽、地雷鹿柴等の副防禦を構へ、其間隔を補ふには機關砲及び重砲を配備する等天險を利用したる堅牢なる防備を爲したり、之を攻略する豈に容易の業ならんや、然れども忠烈勇敢なる我軍は激戦に繼ぎに猛闘を以て遂に之を攻畧し、敵を旅順の圍廓内に驅逐したり、其激戦猛闘の實況を記せん、

中央縱隊の攻撃

七月廿六日天明我中央縱隊の壯勢は猛烈敵壘に向て攻撃運動を開始し、午前八時に至り夜來の濃霧霽れて激烈なる砲戦は起れり、劍山東北高地の我陣地より凹字形山、兜山の敵壘に發射する巨彈は轟々碧空を劈いて連々敵陣に炸裂し、敵彈亦た我陣地に雨下せり、然れども我砲兵は此間に屹立して冷靜沈着一發、數發又百發、其照準は固より正確一彈の目標を誤るものなし宛然演習に於けるが如し、兩軍の陣地は砲煙漲り砂塵起りて濛々漠々咫尺を辨せず、激戦約二時間にして敵砲漸く衰へ銃聲亦た疎なるや、一刻千秋の思にて躍進の機熟するを渴望したる我歩兵の一團隊は狂瀾怒濤の如く凹字形山の堅牢なる敵壘に向て猛進した

凹字形山の激戦

我歩兵の一集團は猛烈奮進凹字形山に肉薄せり、然れども此山岳の傾斜は一分の三乃至一分の二の急峻にして絶壁斷崖三面に削立、羽翼なくんは登る可らず、野猿にあらずんば攀つ可らず、而かも勇敢勁剛の我將卒は此嶮此岨を物ともせず、絶壁上より雨注する彈丸の下を猿猴の如く攀登せんと企てしに、斷崖の地隙に在る敵の機關砲は側面より猛射し偶々側方の一高地に登れば巨彈頭上に破裂し、其苦戦名状すへからず、去れど我兵は決死此高地に踏み止まりて一歩も退かず將士に殲滅の慘狀に陥らんとす、後續の一部隊

は此慘狀を目撃するや、雨下する敵彈を冒して猛進協力して猛闘せしも、敵は益々此方面に兵力を集中し來りて決死防戦せしかば攻路殆んど不可能なるの觀あり、此方面の形勢夫れ此の如し、於此機を見るに敏なる我軍は忽焉戰略を一變し先づ此山側に併立する兜山の敵壘を奪取し、而して更に此山壘に移らんと決定し、即時砲兵陣地を兜山方向に轉換し猛烈なる砲撃を爲すと同時に歩兵團は此砲兵と聯繫して包圍攻撃を企圖せしに、山頂の敵は機關砲を連射して防戦し、戰鬪愈々猛烈となるや他の一步兵團は敵の側面に迂回せしに、偶々友軍の豫備隊に會せしを以て協力包圍を試みたるも戰局は尙ほ發展せず、依て更に一部隊を案子嶺方面に、他の一部隊を左翼隊に、其他の一部隊を本隊に増加して、砲兵掩護の下に急撃突進せしも、敵軍頑強にして我軍の苦戦殆んど其の極に達す、然れども今此儘に退却せんには此一帶の咽喉部は到底奪取するの期なかるべし、如何ともして凹字形山と兜山の二壘は奪取せざる可らず、之を攻路するの戰略如何と部隊長等は頗る苦心慘憺を極む、此時敵彈雨飛の間を凹字形山の戰線に猛進せし一騎の參謀官あり、凹字形山の前方約四百米突の陣地に在りて諸隊を指揮せる突撃部隊長の許に至り、兜山攻撃の戦況夫れ彼れの如し、況んや此凹字形山は此の如く要害無雙の峻嶮、進んで敵壘に肉薄する如きは到底不可能の事なるべし、然れども如何ともして現在の戦局を轉開せずんば敵は益々兵力を集中すべし、若し能ふべくんば此重任に當られたし其戰略戰術は一任すべしと、部隊長其言を聞くや委曲承るとの

左縱隊の戦況

老座山占領

二言を以て答ふ、參謀官馬首を廻すや部隊長は自から先頭に立ち兵を麾いて轟然猿猴だも難しとする斷崖を攀登して凹字形山第一線の敵壘に突貫す、此時日漸く暮れて天色蒼然たり、敵は之を見て鬼神とや思ひけん狼狽を極めしも尙ほ頑強に抵抗し、爲めに戰友は左右前後に斃れ若くは斷崖より顛落するものありて大に其數を減したるも、部隊長の叱咤に激勵せられたる兵士は先を爭ふて奮進突撃せしに、敵も我軍の勇猛に辟易し遂に支ふる能はずして午後九時凹字形山の中腹なる第一敵壘は我有に歸し、萬歲聲裡に日章旗は壘上に翻翻せり、然れども山上更に第二の堡壘ありて敵は之に據りて尙ほ機關砲小銃を亂射す爲めに我兵の死傷少なからず、於此部隊長は更に突撃の令を下せしに全軍號喚第二壘に突入奮戦格闘遂に九時二十分第二壘を占領し敵を第三壘に驅逐したりしも、朝來の激戦猛闘に彼我共に疲勞したる爲め戦鬪は自然に止みたり、

老座山我有に歸す

老座山中腹の壘より驅逐されたる敵は其背而中腹の壘に據り、海岸方面より約二百の増援兵を得たれば之れに勢威を得逆襲に轉し來らんとする形勢あり、之を看取したる我砲兵は猛烈に砲撃し敵砲之が爲沈黙せんとせし際朝來の雲霧は雨となり、豪雨沛然として來り爲に彼我の砲戦は中止するの已むを得ざるに至り、休戦少時午後六時に至り雨霽れて砲戦復し開始せしに、敵の連射砲は我砲の威力の爲め遂

老座山方面の攻撃占領に向ひたる左縱隊は左右翼の二隊となり、七月二十六日午前七時三十分老座山の敵壘前約四千米突の地點に進着し、直ちに砲火を開きしに敵亦た待ち設けたりと云はんばかりに猛烈に應射し來り、砲戦約二時間半にして午前九時に至り兩翼の歩兵は左右より老座山の敵壘前の小銃射界内に散開し歩兵戰の機熟するを今や遲しと待ち構へたり、去れど敵は嶺頂、半服基脚に堅牢なる防禦工事を施し、更に鐵條網地雷等の副防禦を構へ且つ精巧な

に沈黙したるも其機關砲と小銃とは尙ほ沈黙せざるのみならず頗る激烈に射撃を繼續したり、去れど我兵其沈黙を待つべくもあらず突撃の號令と共に銃剣を雨後の夕陽に閃かし、峻嶮を攀登し山頂の敵壘に迫り、接戦壯姿を極めたるも敵尙ほ頑強にして退却せず、依て我は敵壘と相對したる山腹の新陣地を固守せり、此時二個中隊の援軍來り會せしを以て午後九時より更に突撃に移り、彼我交々も突撃逆襲する十數回勝敗尙ほ決せず、我軍大に憤慨、二十七日午前一時最終の大突撃を行ひしに敵も遂に我が勁剛の勇に敵するを得ず、山麓指して落ち行き我軍直ちに之を占領し凱歌は日章旗と共に山上に翻りたり、老座山全く我有に歸したり、依て直ちに此頂上に防禦工事を施し之に二部隊を残して守備と爲し、他の大部隊は夜を徹して大白山に向て躍進したり、

七月二十七日の戦闘

攻圍軍總攻撃の第一日即ち二十六日の戦闘状況は、叙上の如し、明くれば二十七日我左縦隊は大白山の敵壘を攻略せんとし、中央縦隊は夜來山腹に在りて天明を待ち凹字形山及び兜山を略取せんとす、右縦隊亦た後文家屯營城子に位置して雙台溝の砲壘を占領せんとす、三縦隊の作戦目標夫れ此の如し、因て先づ凹字形山の猛烈戦より記述せん、

凹字形山の苦戦

凹字形山の峻嶮なる敵壘の堅牢なるは已述の如し、之に對する我軍の苦戦豫知するに難からず、中央縦隊は前日已に其二壘を抜き、今は頂上の第三壘即ち此方面に於ける敵の

本據として死守する堅壘を攻陥せざる可らず、二十七日は來れり、曉霧は霽れたり、我砲兵先づ砲火を開くや敵砲直ちに應戦し、砲響轟々塵煙濛々山岳爲めに鳴動天地爲めに晦冥激烈なる砲戰約一時間にして敵砲の勢威稍々衰ふ、我歩兵隊の勇將猛卒は之れを機とし奮起勇躍峻角に攀登すれば、敵は壘上に躍り出で、小銃の一齊射撃と機關砲にて我れを掃射し、彈丸の飛來は恰も急霰驟雨の如し、我兵如何に勇敢剛氣なりと雖も、身全鐵にあらざれば之が爲め瞬く間に百數十の死傷者を出し、今は一步も前進する能はず、無念骨髓に徹するも如何ともせん術なく已むを得ず、血涙を呑んで退却命令に従ひ第二壘に退却したり、

抑も凹字形山の地形たる、南方より攻撃すれば敵の爲め瞰射せられ、案子嶺方面より攻むれば同嶺の敵壘より側射され、即ち我れは敵の十字火中に身體を曝露せざる可らず、實に我れは斯る不利の地位に在れば退却の止むなきに至りしものなり、

我歩兵退却するや、砲兵は山嶺の第三敵壘に向て猛火を集中したり、殊に此砲撃中には重砲加り其照準正確なりし爲め早くも敵壘の掩蓋を破壊し、更に射程を延長して後方の敵を猛撃したれば、隣接案子嶺の敵も掩護射撃を爲すを得ず、爲めに敵軍頗る恐怖し、掩蓋堡亦た敵影少數となり、再突撃の機は來れり、於此巔きに第二壘に退却せし我歩兵は猛然躍出敵壘に向て、攀登突撃を爲すや敵は壘内より小銃を亂射すると同時に岩石を投下したり、

石合戦の開始

敵は小銃の亂射と、岩石とを投下して尙ほ頑強に抵抗す、爲めに我兵は岩石の爲め頭腦を割られ、小銃の爲め胸部を貫通され即死するあり、負傷して穀谷に墜落するもありて死傷續出慘絶凄絶、然れども我將卒は毫も屈せず意氣益昂進し、衝天の勢にて號喚して敵の壘下に肉薄すれば、敵亦た阿修羅の勢にて、小銃岩石、若くは機關砲を亂射急投せり、我兵之を冒し突撃せんとするも、嶺頂の傾斜七十度の急峻にして前兵の脚足は後兵の頭上に在り、爲めに操銃するを得ず、去れど我兵之に耐へ殊死奮進して遂に敵壘に突入し、悲惨なる格闘と石合戦とを爲したる後午後五時此險要無双の堅壘第三線を攻陥占領したり、

凹字形山の占領

凹字形山頂の第三壘は廿七日午後五時我有に歸したりと雖も、此山頂には尙ほ一個の複廓ありて其堅牢なるは堡壘に譲らず、其位地は凹字形部の内方約五十米突なる中央凸起部に在りて、第三壘内は此複廓より自由に縱射するを得るのみならず、左方兜山嶺頂の敵壘よりも猛射し得るを以て敵は第三壘を奪取さるゝや、此複廓に停止し尙ほ頑強に抵抗するため我兵は第三壘を占領したるも壘内に入るを不利とし、敵壘岸下の斜面に嚙付地物を索めて之に夜を徹し、翌朝を期し複廓に突撃するに決し、因て各兵中據るべき地物なきものは水筒を以て、甚だしきは指頭を以て掩蔽を築き

敵弾を避く、敵は我軍壘内に進入し來らんに復廓より猛射して其第三壘を奪還せんと期したるに、我軍壘内に進入せざりしかば、大に豫期に反したるを以て自から複廓を出て、竊かに我に向て接近し來り彼我互に掩蔽物の表裏に對峙す、其距離僅々四五米突敵兵の談話能く我兵に聞ゆ、此近距離に於て互に射撃と岩石とを投して相戦ひたり、今や我兵の三面より標高二百八十一の凹字形山中の二百七十餘の地點に達し、敵は其頂點を死守して尙ほ退却せず、其勇氣は敵ながら天晴と云ふより外なし、

敵の勇氣や賞すべし、此夜午前二時(七月二十八日)敵兵約百名山頂より崖下に在る我兵に向て、直下逆襲し來りしも固より敵すべくもあらず、直ちに撃退され復ひ山頂に敗走するや、我工兵は之に追尾し、嶺頂の掩蓋堡壘二個を爆破したるに、敵も到底死守し得ざるを覺知し少しく退却の色あるや、崖下三面の我兵は一齊に第三壘及複廓に突入し萬歲聲裡に七月二十八日午前九時を以て完全に凹字形山を占領したり、實に此凹字形山の攻略には惡戰、猛闘三日間に亘り、之が爲め我軍の死傷は三百餘名の多數に達したり、敵は南山を第一關門とし凹字形山一帯の高地を第二關門とし、而して凹字形山を其主要部と爲したるものなり、

案子嶺長子嶺及其附近の占領

中央縦隊は凹字形山、兜山の敵壘を攻略するや、同日正午直ちに敵追撃に移り、右翼隊の一部隊に案子嶺の敵壘占領を命せしに、占領部隊は直ちに前進したるに敵の大部分は已に退却してあらず些少の抵抗ありしも、直ちに撃退し

て同日午後一時之を占領し、續て長子嶺、英各石の敵を撃攘して之を奪取したり、

我砲兵の大苦心

凹字形山攻略の爲め歩兵部隊の苦戦は已述の如し、我砲兵亦た頗る苦心慘憺を極めたり、即ち廿七日の戦闘に於て我歩兵は敵前二百米突乃至百六七十米突の地點に死守して突撃の期を待ちしを以て、若し砲撃にして少しく照準を誤らんに反て友軍を砲撃するが如き大事を演出すべし、故に我砲兵は一砲撃毎に冷汗腋に溢れ、甚たしきに至りては之が爲め肩癱癡りて率倒せんとしたる將校もありし、然れども我砲兵將校下士卒の教育訓練の完備と砲種の精巧なりしとに依り、一發の誤りなかりしは誠に嘆賞の至りに堪へず、實に其苦心の程察するに餘りあり、

兜山の占領

中央縦隊の右翼隊已に凹字形山の堅壘を攻略す、兜山の敵壘に向ひたる左翼隊の戦況果して如何、

七月二十六日の激戦に於て兜山の攻撃部隊なる左翼隊も頗る苦戦したるは已記の如し、翌廿七日は此苦戦を轉して攻略必成を期し早朝より激戦を開始し、砲兵各隊亦全力を盡して兜山を砲撃し、砲戦約三時間にして敵砲稍々衰弱し、歩兵突撃の機熟したるを以て突撃部隊は午前八時前進を起し、銃火を集中せしめ兜山亦凹字形山に劣らざる嶺岸削立の峻嶮、加ふるに頑敵頂上の堅壘を固守して銃砲彈を雨下す爲めに容易に攀登するを得ず、然れども勇猛なる我兵

の一個中隊は決死彈雨を犯し第一線の左翼より峻嶮を攀登し、午前九時半敵壘に肉薄突入せしに敵は大に驚愕したるも後續部隊到着せざる爲め一時背進するの已むを得ざるに至りたり、後續隊の容易に突撃を連續し得ざりしは峻嶮此の如く加ふるに隣接の案子嶺より猛烈なる砲撃を被ふりし爲めなり、形勢此の如くなるを以て我軍は更に混成中隊を編制し突撃を試みたるも敵の銃砲火益々猛烈にして接近するを得ず、強て斷行するときは徒らに損害を増すのみなれば姑く突撃を猶豫し各兵皆な地上に伏し、水筒、赤手を以て粗造の掩蔽を設け之に潜みて敵壘を仰射し時機の熟するを待てり、

第二回の突撃 第一回の突撃夫れ此の如く無効に終りたれば全隊大に之を遺憾とし、因て更に突撃隊を編制して砲兵掩護の下に兜山中腹の死角に攀登し、最も勇敢に突撃を開始したるも敵の必死なる瞰射及び比隣の敵壘より激烈に横射され、多數の損害を被り遺憾ながら第二回の壯舉も亦た無効に歸したるを以て當日は已むなく舊陣地を固守して徹霄したり、

兩回の實験に徴し小部隊の突撃は奏効困難なれば茲に大部隊の突撃を爲すに決し、翌廿八日拂曉此突撃大部隊は前進を開始せしに前日二回の突撃無効に終りたる爲め將士皆な勇憤、意氣衝天の勢を以て敵壘に接近するや突撃喇叭の號令は下れり、全軍勇躍峻嶮を攀登して敵壘に肉薄し、吶喊して突入したるに敵は我兵の大部隊に群易恐怖し微弱なる抵

抗を試みたるのみにて山下に潰敗したり、於此兜山亦た我有に歸したり、干時午前八時過にして凹字形山の攻略と殆んど同時刻なりき、

右縦隊の追撃

右縦隊の右翼中央兩隊は廿六日東砂崗子後文家屯等の小敵を撃攘し營城子占領し、翌廿七日未明兩隊聯繫して東磨子に向て前進せしも終日敵の隻影を見ず因て東小磨子に露營す、此夜軍隊區分を變更し中央隊を右翼隊に合同して、翌廿八日午前四時陣地を發し旅順方面に向て前進して西小磨子に着せしに、凹字形山及兜山方面に向ひたる友軍悉く敵壘を攻略し敵は旅順方面に潰亂したるの報に接し因て右縦隊亦た追撃動作に移りたり、即ち右縦隊は旅順街道を挾みて前進し、双臺溝の西方炮燈臺附近に達せしに、敵は其前面の鐵橋を破壊し停車場を燒毀して退却準備中なるを知り、因て我軍之を追窮し午後五時大河石附近より長嶺子に亘る高地線を占領し、防禦工事を急造し以て前面の敵と對峙したるに敵は同夜及び翌廿九日に亘り皆な旅順方面に退却したり、因て廿九日は此陣地に休止し翌三十日更に前進して敵を旅順本防禦線内に壓迫したり、

左縦隊の大白山攻撃

老座山より潰走せし敵は概ね西方の大白山の壘へ逃込しを以て、左縦隊は全力を擧げて之を攻撃奪取せんと計畫せり、抑も大白山は其山脈南北に連亘して約二千五百米突の正面

を有し、其標高は老座山より高し其傾斜の急激なる、山勢の峻嶮なる將た其防禦の堅固なるは遙かに老座山に優る、此要地向ふへき我軍の前進路は敵開せる平野にして據るべき地物なく、全く敵壘の瞰制を受けざるを得ざる地點たり、我軍前進の困難想像するに堪へたり、

大白山攻撃は七月廿七日即ち老座山占領に繼續して開始したり、午前十一時過ぎ我砲兵先づ砲火を開きしに敵砲直ちに應射し、激烈なる砲戦は開始したり、大白山占領の任務を有する左縦隊の右翼隊は大石洞東南の高地に前進し、左翼隊亦た其一部を老座山の守備に殘留し、其主力は右翼隊と聯繫して前進し共に小銃戰機の熟するを待つ、砲戦多時敵砲少しく衰退の形勢あるや兩翼隊は大白山北方の敵開地に展開し整々小銃射界内に躍進し射撃を開きしに、敵は前面高地の堡壘内より猛烈に我を瞰射す、去れど勇敢なる我軍は彈雨を冒し大白山脚前五十米突の地點に蕩進せしも其前面は峻嶮急斜の山地なれば攀登甚だ困難、加ふるに敵の銃砲射撃は益々猛烈を加へ、我軍頗る苦戦す砲兵此窮狀を見るや大小口徑砲の全力を盡して猛撃したるも敵火亦容易に沈黙せず、爲めに突撃部隊は愈々苦戦に陥れり、偶々日暮に際す突撃隊は之を利用し大白山麓に達し夜襲を以て壘敵を攻略せんと企圖したり、

大白山脚の我兵の夜襲準備は整ひたり、其夜襲隊は地形上多數を許さざるを以て左翼隊中の二個大隊と爲せり、日は全く没す夜襲部隊は奮躍して峻嶮を攀登し敵壘に突進したるも三五の明月朗々として四邊を照し早くも敵の覺知

する所となり、加之ならず地形甚だ我れに不利なりし爲め遂に目的を達する能はずして山脚の陣地に歸來せしに間もなく反て敵より逆襲し來りしも我軍奮戦之を撃退して徹宵したり、

明くれば二十八日我兵は前日の不成功に憤慨し決死敵壘の攻略を期し、全軍勇躍諸砲兵は曉霧を破つて敵壘に砲火を集中す、敵亦應射而かも前日に倍して猛烈なり、激烈なる砲戦は正午に至るも依然繼續し敵砲少しも衰弱せざるのみならず、午後二時半に至り敵の艦艇數隻龍王塘の海岸に接近し來り、我左翼隊及後方の陣地を砲撃し、爲めに我軍頗る苦境に瀕したるも午後三時過に至り我海軍之を攻撃せしかば敵艦は旅順口方面に敗走したり、然れども陸上の敵砲は尙ほ沈黙せず歩兵突撃の機は熟すべくもあらず、因て左翼隊を二隊に部署し強て大突撃を爲すに軍議決定し、午後八時を期し其一隊は敵の正面より一隊は側面より突撃強襲を實行し、頑強なる敵の抵抗あるにも拘らず、岩角を攀ち峻嶮を登り呐喊號呼して敵壘に突入壯烈なる接戦格闘を爲したる後、遂に敵を驅逐撃退し、我軍大白山の主人公となり凱歌は嘯曉たる喇叭の聲と共に嶺頂に起るや、山下の友軍之に和し山嶽爲めに鳴動せり、敵は無数の死屍を傑壘内に遺棄し旅順本防禦方面に向て潰走したり、

三日間の戦闘効果

我攻圍軍第一回の總攻撃は七月二十六日を以て開始し同二十八日一段落を告げたり、此三日間連續せし激戦猛闘の効

果は豫定の如く敵を本防禦線内に驅逐し、北方は双臺溝より案子嶺の線を経て南方大白山に至る一帶の敵壘を占領し、旅順の本防禦攻撃に對する作戦に大發展を爲したり、攻圍軍の各縦隊が僅に三日間即ち五十餘時間に於て、此天險の堅壘を攻略占領したるは全く將卒の忠烈勁剛の致す所、而して其猛闘惡戦の悲惨壯烈なりしは鬼神を泣かしむべし、公報に依れば此方面の敵の陣地は二ヶ月の日子を費して築造せし半永久性の掩蔽砲壘にして、之を據守したる兵力は旅順守兵の全部を盡し其砲數は六十門餘にして其内重砲四門あり、而して此三日間の戦闘に於て敵の死傷は少くも一千餘名に達す、重砲二門、速射砲三門、機關砲三門其他小銃彈藥等多數我軍に鹵獲したり、以て其効果の偉大なるを知るべし、

總攻撃後の追撃戦

双臺溝、案子嶺、凹字形山、大白山等より潰走したる敵軍の或部分は、後方干大山、大小孤山方面に逃走し、殊に干大山には更に防禦工事を施す形勢あるを以て我軍は連日激戦の疲勞未だ感せざるに拘らず、敵を攻撃し直ちに攻圍作業に着手する事に軍議決定したり、因て七月二十九日は隊伍の整頓、攻撃の部署、彈藥の補充、敵情偵察の爲め占領陣地に停止し、翌三十日味爽追撃運動に移りたり、其命令部署は左の如し、

右縦隊は土城子方面に中央縦隊は干大山方面に左縦隊は大孤山方面に向て三十日味爽を期し攻撃前進に移るべし

右縦隊の攻撃前進

右縦隊の攻撃目標は先づ雙臺溝の線より冷家屯を経て右咀子に亘る線を占領するに在り、依て其全隊を左右兩翼に分ち三十日味爽陣地を發し後沙包方面の敵を撃退して之を占領し、更に進んで泥河子に向ふ其第一線は西泥河子を占領したるも東泥河子の敵は頑強に抵抗して容易に退却せず、因て一隊を東泥河子前面の雨裂地隙に散開して前進せしめしに、敵は前面の高地に在りて之を瞰制し砲火を集注せり、爲めに我兵の死傷少なからざりしも我は益々猛進して敵壘に突撃せしに、敵は我猛威に恐怖し潰走せしを以て、直ちに之を占領して泥河子全部我有に歸したり、右咀子附近に停止せし敵は泥河子其他諸方面の戦況の不利なるを知り、戦はずして潰走したり、因て右縦隊は豫定の地點を占領して其目的を達したり、

中央縦隊の攻撃前進

中央縦隊の目的は干大山を占領するに在り、此方面は敗敵主力の在る所加ふるに干大山、王家甸間は土地開濶せるを以て此地點に前進するときは敵の瞰射を被ふるべければ側面より干大山の突角を攻撃するに決し、全隊を左右翼の二隊に區分し、左翼隊は英各石西北高地より、右翼隊は鐘家屯、柳樹房より前進せしめ砲兵隊は東方身の高地より之を掩蔽し、更に中隊の豫備を鐘家屯、柳樹房の後方に位置し三十日午前四時過諸隊は運動を開始し、五時に至り左翼

隊は英各石より小銃射界内に躍進す、砲兵之を掩護して射撃を始め、敵は徐家屯の西方高地及干大山、鳳凰山間の無名高地に放列を布き直ちに應射し茲に砲戦は開かれたり、歩兵前進の機來るや右翼隊は敵壘に向て躍進せしに、王家甸南方高地の敵の機關砲は連射して我前進を阻止せんとす、然れども我屈せず猛火を犯して突進し鐵道築堤を越へんとするや敵の砲火益々猛烈を加へ我兵苦戦に陥らんとす、恰も好し此時我砲兵の一隊は河西の高地に砲撃位地を轉換し、曳火彈を集注し加之ならず右翼隊柳樹房方面より敵壘に向て奮進し、豫備隊亦た左翼隊の戦線に進着し來り我軍の勢益々昂る、全軍勇往邁進し午前七時三十分を以て敵壘に肉薄突撃し敵を驅逐し、鳳凰山干大山より徐家屯西方高地を経て梨嵐子に亘る線を占領したり、

此戦闘は時間よりすれば僅々一時間餘に過ぎざるも其猛烈戦なりしは凹字形山にも譲らず、敵の死傷は少くも六百以上に達し我軍亦多數の死傷者を出したり、以て其戦闘の猛烈なりしを知るべし、

左縦隊の前進

左縦隊は太白山の敵を驅逐したる後、其右翼隊は候家屯に、左翼隊は獵村溝に前進して停止し、越へて三十日味爽右翼隊は、龍頭方面に、左翼隊は南方海岸線に沿つて、郭家溝の方面に向て前進し、各砲兵隊は山川、柳蘇家、大嶺等の高地に在りて歩兵の前進を掩護したり、然るに敵は其主力を干大山鳳凰山方面に集中したるを以て、左縦隊の前面に於

ける敵の抵抗は頗る微弱にして容易に前進し、右翼隊は梨
嵐子附近に於て中央縱隊に聯撃して左側より干大山附近の
敵を攻撃して龍頭に向ひ、左翼隊亦直進して郭家溝に至り、
兩隊は豫定の如く其目的地點を占領したり、於此我攻圍軍
は土城子一帶の高地より大孤山東方高地に亘る線を占領
し、敵を旅順要塞に驅逐したるを以て、軍は此姿勢に在り
て直ちに旅順要塞に對する攻圍作業に着手せり、今や旅順
市街は我軍の位地より僅かに一里乃至二里に過ぎず、攻圍
作業の發展及要塞戦は之より開始されんとす、

攻圍前戦に對し勅語令旨を賜る

七月三十日迄の戦闘は旅順要塞に對する準備戦にして、我
軍は此準備戦に於て一大偉功を奏したり、於此優渥なる
勅語令旨は攻圍軍司令官に下りたり、

勅語 (八月三日)

攻圍軍ハ旅順要塞ノ前進陣地ニ對シ屢々峻
要ヲ冒シ劇戰數日ニ亘リ、遂ニ敵ヲ其本防
禦線内ニ擊退セリ
朕深ク其勇武ヲ嘉ス
右奉答文は左の如し

奉答
旅順要塞攻撃準備戦ニ於ケル戦勝ニ對シ特ニ優渥ナル
勅語ヲ賜ヒ感激ニ堪ヘス臣等益々奮勵誓テ軍ノ任務ヲ達
成センコトヲ期ス

右謹テ奉答ス

軍司令官

皇后陛下ノ令旨 (八月四日)

攻圍軍ハ旅順要塞ノ峻ヲ冒シ連日猛撃漸次
其功ヲ奏スル趣
皇后陛下ノ懿聞ニ達シ我カ將校下士卒ノ忠
勇ナルヲ深ク御感賞アラセラル
右奉答文は左の如し

奉答

旅順要塞攻撃準備戦ニ於テ敵ノ第一線ヲ擊攘シタルニ對
シ特ニ優渥ナル
令旨ヲ賜ヒ恐懼ニ堪ヘス臣等益々奮勵誓テ軍ノ任務ヲ達
成センコトヲ期ス
右謹テ奉答ス
攻圍軍司令官

旅順要塞總攻撃前の狀況

敵軍が難攻不落と稱する旅順要塞の外方防禦線は、七月二
十六日より三十日に亘る攻撃に依り、悉く我攻圍軍の手に
歸したり、然るに敵は其本防禦線なる要害より大口徑砲其
他を以て我を砲撃せり、殊に大小孤山の敵砲は著りに我左
縱隊に向て砲火を集注せり、此大小孤山は旅順の圍壁要塞
と爲り我が包圍線の左翼との中間に屹立する標高百八十八の
高地たり、敵は其嶺頂、山脚に堅固なる防禦工事を施し、
大孤山には野砲六門、小孤山には二門を配備し、凹字形山

大白山等の外防禦を古領する、や、更に此防禦陣地に數門
の重砲及機關砲を増加したり、元來此兩山の東北方即ち我
攻圍線に面する方面は地勢開濶して、我攻圍線の中央及び
左翼を瞰視せり、之を抜くにあらずれば我軍將來の作戦に
障害少なからず、依て先づ之を占領することとなり、我が
左縱隊は八月七日を以て此山嶺の敵壘を奪取するの目的を
以て運動を起し、右翼隊は北向より鞠家屯を経て大孤山
方面の斜面に向ひ、左翼隊は右翼隊に聯撃して大孤山正面
より小孤山北方に向て前進し、縱隊所屬の徒歩砲兵隊及重
砲隊之を掩護し、午後四時の頃先づ我より砲火を開くや、
大小孤山の敵壘は勿論東鷄冠山、盤龍山、嶗嶗嘴等の各砲臺
より應戦し、激烈なる砲撃は開始され、彼我の砲聲は殷々
轟々として九天に震ひ、其炸裂する巨彈は土石を飛し大穴
を穿ちて九地を撼動して壯絶凄絶なりし、其間忠烈勇敢な
る我歩兵部隊は猛然躍進して敵に接近したるも、敵は地の
利に據り決死我を瞰射す、爲めに我軍の損傷少なからず、
殊に大孤山北東に向ひたる右翼隊は地形一層不可なる爲め
敵の猛火に浴し頗る苦心慘憺たりしも、我巨砲の威力旺盛
にして大孤山上の敵砲漸く衰退し、其歩兵亦た壘内に隱匿
し、加ふるに日没に至りしかば我は夜襲に決し砲兵は射撃
を中止し、歩兵は戰團隊形の儘地物に據りて時機の來るを
窺ふ、偶々猛雨沛然として來り殆んど咫尺を辨せず、之れ
天我に夜襲の好機を與ふるものなり、天の與ふる之を取り
之を利用せざれば反て罪あり夜襲の好機は來れり逸する勿
れとの號令に全軍勇躍衝天の勢にて猛雨を冒し吶喊して

大孤山の敵壘に向て奮進す、大雨に油斷せし敵は狼狽した
るも尙ほ壘上に現はれ猛烈なる射撃を爲す、加之ならず山
脚に大孤河ありて大雨の爲め濁流滔々として流る、暗夜に
加ふるに降雨激甚なれば其水深測る可らず、少しく躊躇の
色あるや決死の工兵隊は、敢然濁流に跳り入り下流の堰堤
を決潰せしかば、全軍突進彼岸に徒涉し、轟然敵前に肉薄
して其鐵條網地雷等の副防禦を破壊し、中腹の敵壘に突撃
して之を占領し、潰走する敵を急射したるも嶺頂の敵壘は
頗る堅牢にして其下部更に堅固なる副防禦あり、之を攻略
する容易の業にあらず、天明を待て攻撃を續行するに決し、
此夜は中腹の古領陣地に工事を施し、終夜豪雨と敵の探射
彈とに浴して徹宵したり、其困苦實に名狀す可らず、從て
我軍の損傷尠少なかりき、

大孤山占領

明くれば八日強雨尙ほ止まず、夜來敵壘の前面中腹に露營
して豪雨と敵の探射とを忍び居る我歩兵一隊の困苦慘憺は
愈々甚だし、於此我砲兵は天明と共に之を掩護して山上の
敵壘に對し猛烈なる砲火を送り之を沈黙せしめ、歩兵をし
て突撃の機を得せしめんと期したるも、敵砲少しも衰退せ
ざるのみならず午前六時頃に至り敵の艦艇七隻鹽廠附近に
侵入し、大小孤山東方斜面に伏姿せる我歩兵隊に對し、背
後より激烈に砲撃す、我兵之を避くべき地物なく爲めに多
數の損害を受けしのみならず、我砲兵亦た其砲撃を受け、
時陣地を他に轉換するの已むを得ざるに至れり、去れど我

大口徑砲の艦艇に對する攻撃猛烈にして巨彈頻々敵艦に落下燃裂せしを以て敵艦は港内に逃れ去り、依て大口徑砲は直ちに其目標を山上の敵壘に變更し大砲撃を爲せしに敵亦此大口徑砲の威力に壓せられ午後五時頃に至り砲力稍々衰弱するや、夜來大孤山の中腹に伏姿して困苦を嘗めつゝ突撃の機熟するを待ちたる我歩兵は、増援隊と共に猛然山上の敵壘に向て攀登し辛くも敵壘下に達せしに、敵は壘上より岩石巨材を放下し慘烈なる石戰を開始し、我兵の死傷頗る多數なりしも遂に壘上に突入大格闘の後、敵を西方に驅逐し野砲二門を鹵獲し、茲に大孤山全部我有に歸し、萬歳の聲山上山下に起りたり。

小孤山の占領

小孤山古領攻撃は左縦隊左翼隊の一部隊なり、當初敵は大孤山の防禦に全力を注ぎたるも、我軍の攻撃急激なるに及んで小孤山の守備亦た忽にすべからざるを觀し、俄かに兵力を増加して其守備を嚴にせり、我一部隊の同山に進着したるは八日の夕刻にして直ちに敵壘に肉薄したるに、敵は激烈なる砲火に繼ぎに小銃射撃をなし且つ瓦石を投下して我を惱まし、加ふるに大孤山の敗兵此陣地に潰走し來りしを以て我兵頗る苦境に立ちたり、然れども大孤山已に我有に歸し大勢已に我勝利と定まりたれば、我れは其突撃を急がす天明を俟ち全力を盡して突入するに決し徹背す、翌九日黎明となるや我大小口徑砲は連々此敵壘に大小彈を送り敵砲を沈黙せしむ、待ち設けたる突撃部は猛然敵壘に突入

午前四時三十分其全部を占領したり、此新占領地たる大小孤山は旅順市街を距る遠からず、山上明かに港内の或る地點を瞰制すべく極めて重要な地點たり、故に之を占領するや前夜の諸要塞より砲撃若りなるも我之を固守し且つ工兵は夜を徹して防禦工事を施し占領を確實に爲したり、此の左縦隊の戦闘亦頗る激烈にして我死傷頗る多し敵の死傷亦た八百に達し、現に戰場に遺棄しありし死體のみにても百餘ありたり、此戦闘に於て我軍に收めたる戦利品は野砲十七門小銃天幕土工具等は莫大なりし、

敵の逆襲

大小孤山陣地我が有に歸したるは我軍將來の作戦に大利益あると同時に、敵の防禦線に一大缺陷を生じたるものなれば、敵は之を奪還せんと企圖し、同日午後一時五六中隊の敵兵大小孤山に逆襲し來り同時に前面の諸砲臺及び鹽廠附近に現出せる敵艦は側背より盛んに我を砲撃し、爲めに我兵頗る苦戦に陥りしも強硬に抵抗し夕刻全く敵を撃退せり、然れども要塞よりする敵の砲撃は尙ほ依然たり、此戦闘に於て最も我れを苦めしは敵艦よりする砲撃なりしも陸上海軍砲と我海軍の掩護充分なりし爲め苦戦ながらも我兵は陣地を固守するを得たり、

旅順港内の砲撃開始

攻圍軍協同の陸上海軍砲は茲に始めて旅順市街の砲撃を開始せしに意外の効果を奏し、八月七日午前十時頃より市内

に火災を起し午後二時にして止み、又八月九日午前九時四十分頃敵艦レトウキザンに命中して少なからざる混雜を興へ、且つ約二千噸の汽船一隻を撃沈せり、

降兵多し

大小孤山我有に歸するや敵兵中降伏し來る者多し、八月九日二十餘名の降伏兵あり、其中大尉壹名あり如何に敵軍士氣の阻喪し居るかを下知すべし、是等降兵は我の彼等に對する態度の懇切なるを見て歡喜面に溢れたり、

敵軍の水師營燒夷と工事

敵は八月六日水師營を燒夷し、其西北方約三千米突の干大山(太白山附近の干大山にあらず)附近より水師營の東北約五百米突の高地附近を経て八里庄の西北方約千米突の高地に亘り盛に防禦工事を施せり、敵か水師營を燒毀せしは射界を擴張し、我軍の運動を阻止せんとするにあり、

碾盤溝の占領戦

攻圍軍の一部隊は八月十三日午後七時碾盤溝及其附近一帯の地を占領する目的を以て運動を開始したり、出發に臨み部隊長は宣言して、曰く發言する勿れ、射撃する勿れ、只た突貫以て敵を撃退せよ、違ふ者は後方に拘留せんと、爲めに軍容肅然たり、於此隊を二分し枚を叩んで前進せしも敵は我夜襲を採知したるにや探照燈を照し、光彈を發す山野之か爲め白晝の如し、我進軍を妨ぐるに幾何、然れども我は之に屈せず地隙に匿れ、峻峻に攀ち、地物に潜み、

西向、東折、或は北に、或は南に、只管敵の視線を廻避して勇往數里漸く敵陣に近接す、午後十二時突撃兵を撰抜して碾盤溝西方高地線の敵壘に突撃せしむ、突撃隊敵壘前約七百米突の地點に達すれば敵は急射に繼ぎに猛射を以てす、爲めに我兵負傷する者少なからずと雖も我れは猛進肉薄して鐵條網下に達し全力を盡して之を破壊せんとせしに、敵亦死力を盡して我を猛射す若し強て破壊せんには我は全滅を免れず、此に於て部隊長は已むなく再舉を期し一旦退却し其附近の山脚なる一小丘を占領して掩堡を急造し隊を整頓し對戰終背、此夜忽然暴風強雨來り全隊雨浴して夜を徹したり、夜は明けたり八月十四日は來れり、然れども夜來の砲撃は愈々激烈となり敵砲頗る頑強爲めに突撃の機は終日來らずして日は沒したり、十五日とはなりぬ流石の敵も我猛襲に堪へずして砲火少しく衰ふ、突撃の機は來れり我歩兵勇躍して敵壘に突入して接戦格闘の後、午前十一時遂に碾盤溝の敵壘を占領し萬歳の歡聲と共に日章旗は高く壘上に翻りたり、此戦闘我損害少なからず、敵の死傷亦た多大戦後の光景慘として正視するに忍びざりしなり、

干大山の占領

水師營の西方干大山、小東溝、隋字屯一帯の敵陣地亦本防禦總攻撃前に占領するの要あるを以て、攻圍軍右縦隊の一部隊は八月十三日の夜より十四日に亘り激戦奮闘の後敵を驅逐して之を占領したり、今や我攻圍軍は敵を旅順市街の弓形的圍壁要塞線内に壓迫し、而して之を包圍するに三軍の大兵を以てしたれば蟻蟻

の逸出たも之を許さず、嗚呼敵國露西亞が百代不落と特みたる旅順の陥落は只た時日の問題となりたりぬ

至仁の聖旨下る

旅順の攻略は愈々逼迫したり、於此長くも至仁なる聖旨は八月十一日を以て下りたり、山縣參謀總長は勅を奉して之を滿洲軍總司令官に訓令せり、其聖旨を拜するに

大元帥陛下は至仁の 聖意を以て旅順口要塞内に在る非戦闘員をして成るべく鐵火の慘害を免がれしめんを望ませ給ふ右の聖旨に對し貴官は旅順口要塞内に在る婦人、小兒、僧侶、中立國の外交官、觀戰將校にして避難を希望するものを青泥窪に護送し該地碇泊場司令官に引渡すべし作戰に影響するの虞なしと認むるときは旅順要塞内に在る前項以外の非戦闘員をも同じく避難せしむることを得、此至仁なる 聖旨は八月十六日を以て敵將に傳達せり、當日は彼我の全線休戦したり、

至仁聖旨の傳達軍使

旅順口要塞内非戦闘員避難の聖勅を齎したる我軍使山岡少

佐の一行は八月十六日軍司令部を出發したり、其式左の如し

喇叭卒二名先頭に立ちて休戦の詔を吹奏行進し之に次で休戦白旗一旗其直後に軍使山岡少佐次に通譯官壹名之に隨ふ、一行は進んで敵前に近ければ敵軍の將校之を迎へたり、依て軍使一行は式の如く白布を以て眼を蔽ひ、敵將校の先導にて第一線の敵陣地に至り、茲に眼蔽を除き先づ應接の將校と名刺の交換を爲したる後、軍使は責任ある將校の來接を望みたれば敵の參謀官某佐官來り、握手して互に敬意を表したる後、山岡參謀は來意を述べ、聖勅を傳へたる後更に我司令官よりの勅降書を交附し、翌十七日敵將より回答を齎すべきを約し、少時談話の後再び式の如く眼を蔽ひ導かれて敵線を離れ茲に眼蔽を除き喇叭を吹奏し白旗を翻し、我司令部に歸來したり、

軍使の往復中は彼我全線休戦したるも戦闘準備は互に寸時も怠らず、頗る活潑を極めたり、即ち敵若し我が勅降書を拒絶し來らんに直ちに本防禦線總攻撃を開始せんと企圖し、敵は勅降拒絶せば之を機として猛烈なる攻撃を受くべきを豫期し互に戦備を張りたり、

敵軍降服を拒絶す

明くれば十七日午前十時我至仁の 聖旨及勅降書に對する敵軍の返書は敵の軍使によりて我軍に齎したり、軍使は式の如く喇叭をして休戦の詔を吹奏し休戦の白旗を立て我哨兵線前に來る我前哨將校は式の如く一行に眼蔽を施し我外

- 右 縱 隊 第一師團
- 中央縱隊 第九師團
- 左 縱 隊 第十一師團
- 攻城砲兵團 豊島少將率ゆ
- 海軍砲兵團
- 豫備軍一旅團 竹内少將率ゆ

右縱隊の攻撃目標は左の如し

水州營南方高地、三里橋、刺克溝及其西方高地、海鼠山及其西方百七十四米突の高地、椅子山の諸砲臺

中央縱隊は左翼を左縱隊と連撃して

龍眼前のクロバトキン砲臺より八里庄を経て松樹山、二龍山、鉢巻山盤龍山東北の諸砲臺

左縱隊は右翼を中央縱隊と連撃して

五家房北方高地、王家屯附近を経て小孤山西麓及盤龍山砲臺其東方新砲臺（一ノ戸砲臺）東鷄冠山諸砲臺

攻城砲海軍砲は各縱隊に配屬したり、我攻圍軍の總攻撃部署及其目標とする所は此の如し、茲に敵軍が百世不落と恃む旅順本防禦線に於ける要塞の地位、及其地形等を知るは最も必要の事とす、依て左に之を記せん、但し旅順要塞の模型と對照せられたらんに其全景は鞏上に在が如し、

攻圍軍の總攻撃準備

敵軍已に開城降伏を拒絶す、此に於て敵の要塞に對する我攻圍軍の總攻撃準備は整頓したり其攻撃部署の概要は左の如し

陣營に導き來り、我參謀山岡少佐之に應接し返書を受領して之を披見するに我が大元帥陛下の要塞内非戦闘員避難に關する御仁慈には滿腔の感謝を表し奉るも時期切迫の故を以て已むを得ず聖意に副ふ能はざる由を謝し、我司令官の勅降に對しては敵將には所信あるを以て絶對に之を拒絶すと云ふにあり、敵の軍使は之を致して式の如くして歸り去りたりしが、勅降を拒絶せんとは我れの豫期したる所なるも至仁の 聖旨に對する返答の趣旨に至ては皆な意外の感を爲したり、已に運命の明白なるに當て尙ほ依然婦女老幼の如き戰鬥力なき者を鐵火の中に立たしめて、顧みざる敵將の殘忍酷薄なる此一事に於ても彼は人道を蹂躪するの甚たしきものなり、

獨逸武官の避難

獨逸皇帝陛下は旅順の運命且夕に窮迫したるの報に接せられ、旅順要塞内に在て觀戰する獨逸國武官貳名を鐵火の中に立たしむるに忍びず、我國に依頼して避難すへき命令を發せられしに付、我軍は之を勅降拒絶書を齎して我軍に來りし敵の軍使に托したるに其署名は勅命に従ひ出港して我艦隊に收容せられて其租借地たる膠州灣に避難したるも、他の一名は遂に踪跡不明となりたり、

旅順要塞及地形の防備

旅順は露國が東洋方面に鼻慾を逞ふる策源地と爲したる所、故に其天險を利用したる防備の壯嚴なるは殆んど言語に絶したり、試みに其要塞を便ふるときは新舊を合し、五十七基の多きに達し、之が備砲は重砲約二百門其他小口經速射砲及機關砲は幾百門なるを知らず、然れども其五十七基の城塞の位地等を列擧するは甚だ繁雜に堪へされは茲に其重なる城塞を掲げ詳細は模型と地圖とに譲りたり因て先づ弓形に連繋せる背面城塞より記せん、

二百三高地砲臺 一名老爺山と稱し背面要塞中の最左翼に屹立し老鐵山と相對して、背面要塞中の最高地たり、旅順の全砲臺は固より旅順口新街市街港灣及び港外黄海の全面を瞰制展望す、其位地は旅順市街の西方約六千乃至八千米突の地點に在りて、傾斜頗る急峻、西方の最要防禦陣地たり、故に露軍は此高地の嶺頂に堅牢なる砲臺二基を築造し中腹基脚を繞圍して數線の塹壕及鐵條網地雷等の副防禦を設けたり、

海鼠山の砲臺 二百三高地の北方約八百五十千米突の地點に在りて其標高百八十六米突にして二基の砲臺あり北方に面して殆んど二百三高地の補備を爲せり、中腹基脚亦た數線の塹壕及其他の副防禦あり、

赤坂山砲臺 二百三高地と海鼠山高地との中間に介在して少しく東方に突出す、其高地脈は二百三高地に連亘して殆んど其基脚を爲す、固より二百三高地の補備たり

標高百八十四米突一基の砲臺北面して高地上に在り、塹壕及び地雷等の副防禦あり、

百七十四高地 同高地は海鼠山砲臺西北の前面に在りし海鼠山砲臺掩護の好陣地たり、敵は此高地に塹壕掩護砲臺を築造したり、

椅子山砲臺 二百三高地砲臺の東北方に聯繫して北面せり兩砲臺の間隔約二千六百五十米突旅順の新市街を距ること西北方約二千四百米突にして其標高百二十三米突嶺頂の砲臺は頗る堅牢にして山形亦急傾斜砲臺前面の下部及中腹基脚に數線の塹壕を構築し之を掩護するに又數線の鐵條網及び地雷を布設したり、

大案子山砲臺 椅子山砲臺の東南方に聯繫併立して北面せり兩山の間隔約六百米突其標高百五十四米突新市街を距る北方約九百米突頂上の砲臺は椅子山と共に堅牢に築造し、山形亦急傾斜、塹壕、其他副防禦の構築は、椅子山と同一なり小案子山は大案子山と連繋して其左側後方にあり、砲臺其他の防禦工事は大案子山と異なるなり、

松樹山砲臺 大案子山の東北方に在り支那圍壁の起點首頭たり、大案子山との間張家屯北家屯の各村落及敵前軍左營等ありて稍々散開せる平地なり、鐵道此地點を貫通す、山脈は連亘せざるも砲臺防禦は聯繫せり、兩山の間隔は約二千七百五十米突にして舊市街を距る北方約二千五百米突此松樹山には新舊の二砲臺あり、舊砲臺は併て清國の築造せし所、新砲臺は露國占領後他の砲臺と共に

に築造したるものにして北面せり、其標高は九十二米突にして左方大案子山右方二龍山と聯繫して旅順港内の咽喉部たり、故に其砲臺塹壕の堅牢なる鐵條網地雷等副防禦の壯嚴なる他の砲臺に倍せり、殊に左側後方に補備砲臺を築造したり、山形は甚だしく急斜ならざるも防備堅牢なる爲め鬼神を欺く軍隊と雖とも攀登し得ざるべし、

一龍山砲臺 松樹山と圍壁を連らねて東北方に併立せり、兩砲臺の間隔僅かに七百米突其標高九十六米突にして松樹山と連繋して旅順の咽喉部なり、砲臺は北面せり、其砲臺塹壕及副防禦物の堅牢壯嚴なるは松樹山砲臺と異なるなし、故に山形は急斜ならざるも攀登は殆んど不可能なり、

鉢卷山の砲臺 二龍山の東北方に突出して圍壁外にあり、開戦後砲臺掩護及塹壕等を急造したるものにて二龍山、盤龍山、の副防禦地と爲したり、其標高八十四米突ありて傾斜は急峻と云ふにあらざるも二龍山盤龍山等より側射を受くべければ攀登亦た困難なるは勿論なり、

盤龍山東西砲臺 二龍山と圍壁を連らねて東方に併立す、西砲臺と二龍山の間隔は約六百二十米突にして東砲臺は、九百四十米突其標高八十七乃至九十九米突砲臺塹壕及び其他の副防禦物の堅牢壯嚴は他砲臺と異なるなし、山形稍々急峻なり、

設計したるものなるも其堅牢壯嚴亦た他砲臺に譲らず、

望臺 二龍山、盤龍山間の後方約三百米突の地點に在りて其標高百七十三米突圍壁に在る各砲臺を瞰制して其前方四面數哩の地を展望す、清國會て之に望臺を設く、故に此稱ある所以なり、嶺頂に砲臺あり、巨砲數門を配備す、圍壁砲臺掩護の堅要陣地と爲す、

東鷄冠山北砲臺 盤龍山東砲臺と圍壁を連らねて東方に併立して北東に面す、兩砲臺の間隔約四百三十米突其標高百十六米突砲臺塹壕其他副防禦の堅牢壯嚴は他砲臺と異なるなし、山形亦稍々急斜なり、

東鷄冠山砲臺 北砲臺と圍壁を連繋して東南方に併立して北東に面す、兩砲臺の間隔約六百二十五米突傾斜稍々急にして其標高百二十八米突砲臺塹壕其他の副防禦亦た他砲臺と同一にして前面大孤山の防禦陣地を控制せり、

同東南砲臺 亦た此中央砲臺と圍壁を連繋して南方に併立して東方に面し前面大小孤山の地隙を瞰制す、兩砲臺の間隔約六百米突其標高百十二米突にして傾斜稍々急峻砲臺塹壕等の構造他と異なるなし、

白銀山北砲臺 東鷄冠山東南砲臺と圍壁を聯繫して其南方約四百八十米突に併立して東面し圍壁の終點たり、前面小孤山の防禦陣地を瞰制す、其標高百十四米突にして傾斜稍急砲臺塹壕等亦隣接砲臺に異なるなし、

白銀山砲臺 同名北砲臺の正南方九百九米突の地點に在り、此砲臺は新舊中央の三基ありて新砲臺は西方舊

砲臺は北方中央砲臺南方に在りて鼎立東面し居れり、而して半永久的のものあり、故に圍壁砲臺に比し其築造稍々劣る所あり、其標高百二十米突傾斜稍々緩なり、
嶗嶗嘴砲臺 白銀山の南方約五百二十米突に在りて南方黃海に面する海岸砲臺なり、其標高九十七米突にして前面の低地更に同名低地砲臺あり、亦黃海に面して補備砲臺たり、二砲臺の築造は海面防禦にあるを以て頗る堅牢其備砲亦大口徑なるは勿論なるべし、
山頂威砲臺 嶗嶗嘴砲臺の西方黃海灣入の濱に屹立する高地上に在りて海灣に面する所謂海防砲臺なり、嶗嶗嘴砲臺との間隔約九百米突其標高八十二米突頗る堅牢に築造せり、

模珠新舊二砲臺 山頂威砲臺の西南方約五百米突の海岸突角に在り、新砲臺は後方舊砲臺其前方にありて前面數個の島嶼を瞰制す共に海防砲臺たり、
黃金山砲臺 旅順港口の右側に屹立する高地上に在りて旅順港口の咽喉部たり、東方の模珠砲臺と聯繫併立して黃海面を瞰制す、兩砲臺の間隔は約千五百米突にして標高百十三米突嶺頂に砲臺二基ありて海上に面す、其東南前面の山腹に低砲臺あり、又南西側港口に面して更に一砲臺あり、共に補備砲臺たり、其築造の堅牢にして宏大なるは各砲臺中無比とする所其備砲の如きも大中小口徑數十門あり、其他要塞として要する各般の設備は一として欠くる所なく完備壯觀を極む、
威遠砲臺 老虎尾半島の旅順港口の左側に在りて黃金

山砲臺と港口を挟んで相對し共に咽喉部たり、兩砲臺の間隔は約千米突にして其標高は黃金山の如く高からずと雖も砲臺は頗る堅牢に築造し備砲亦た多數ありたり、
蠻子營砲臺 威遠砲臺と聯繫して南方に在り是れ亦港口の前面を瞰制す、兩砲臺の間隔九百五十米突其標高七十米突前面圍壁連亘して堅牢なる海防要塞の一たり、大小口徑の備砲數門を配置したり、
饅頭山高低兩砲臺 蠻子營砲臺と圍壁を連繫して南方約千六百米突の高地上に在り其標高百十九米突にして高砲臺は後方に在りて低砲臺は其前面に位地して共に黃海を控制す、其砲臺の堅牢設備の完成せる海岸要塞たる資格充分なりとす、

鷄冠山南北砲臺 饅頭山砲臺と聯繫して其後方約七百五十米突の地點にあり、其標高百五十五米突にして亦た海防要塞たり、兩砲臺は嶺頂に併列し其砲臺の堅牢設備の完全なる他砲臺に異なるなし、
城頭山砲臺 饅頭山砲臺と圍壁を連繫して南西方約八百五十米突の地點にあり、其標高百十六米突共に海防要塞にして老虎尾半島の地頭に在りて南西方約五千八百米突に老鐵山砲臺を仰望す、地頭を防禦する爲め其西側に延長せる圍壁を設備しあり、砲臺亦堅牢なり、
老鐵山砲臺 老鐵山は旅順西港の西南約二千五百米突に屹立する高嶺にして其標高四百六十一米突金州半島中の最高嶺たり、其基脚の周圍亦廣大にして東南西の三方は黃海に臨みて渤海灣の海峡之が爲め生じ鳩灣亦之が爲

めに在るなり、嶺頂五基の砲臺あり、露軍は當初此の山嶺を最終防禦陣地と定め各般の防備を爲したり、
二百三高地と老鐵山 二百三高地と老鐵山とは約一萬米突を隔て、相對立す、其間王家屯、文家屯、張家屯、鴨湖村、楊樹溝、後楊樹溝、高低山、劉家屯大劉家屯、小房村、後三羊頭の各村落高地及び開闢地在り、而して此間の各高地には十三基の急造砲臺ありて二百三高地の西北方大東溝、隋家屯方面より旅順西港及び老鐵山方面へ進入する我軍を拒止せんと企圖したり、

北太陽溝砲臺 二百三高地の東南方同高地と新市街間に在り、其標高九十二米突にして二百三高地より瞰制するも其間石板橋の高地及び敞開せる豁谷形の凹地あれば要塞地としては頗る適當の地點たり、其砲臺は固より陸上防禦にあるを以て西北に面し其前面の基脚、中腹に數線の塹壕其他鐵條地雷等の副防禦を構設し、最も堅牢に築造したれば山形は急峻ならざるも攀登突入するは正攻法に依るにあらざれば不可能なるべし、

西太陽溝南北兩砲臺 是新市街の西方に在りて、西港最終の防禦要塞なり、故に其築造の堅牢なる他の主要砲臺と異ならず、其標高北砲臺百十五南砲臺八十二米突にして兩砲臺相聯繫せり、二百三高地を距る東南方約二千米突にあり、

白玉山砲臺 旅順新舊市街の間港内に突出登立す、西港東港の區別之が爲めにあるべし、其標高百十九米突北方は松樹山、二龍山、等の圍壁砲臺西方は案子山、椅子

山、太陽溝、等の砲臺を掩護して陸上防禦を爲し東南方は黃金山、威遠等の諸砲臺を掩護して海上の防禦を爲すを得べし、故に其築造の堅牢なる論を俟たず、又其北方の前面に一基の補備砲臺あり、共に陸上防禦に備ふるものなり、

此外松樹山、北方前面の龍眼に於けるクロバトキン砲臺を始めとして水師營南方三里橋刺兔溝、寺兒溝、西北方に九基鳩灣半島及後三羊頭北方并に鳩灣の北海岸老鐵山、西麓半島にも此方面よりの進入を阻止する爲め五六の急造砲臺あり、
 是等砲臺の地形位地より觀察するときは、旅順口は天險に據りて而かも最新式の科學的築城術を應用して築造したる堅牢無比の五十餘基の砲臺を以て數線に圍繞し、十萬の陸軍二十餘萬噸の堅艦を以て掩護したるものなり、

我攻圍軍の決心

旅順要塞の堅牢なる夫れ此の如し、之を攻略する我軍の決心は皆な決死なり、即ち上は司令官より下一兵卒に至る迄我帝國の爲め世界人道の爲め決死して此堅城を抜かんことを期たり、全軍已に我帝國の特性たる武士道の最上名譽とする決死を覺悟したり、於此全軍の士氣愈々奮振將士皆な一日千秋の思を爲して攻撃命令の下を待ちたり、世界開闢以降空前の激戰猛闘は茲に開始されんとす、

本防禦總攻撃の開始

旅順要塞本防禦に對する總攻撃の命令は明治三十七年八月十八日夕刻を以て司令官より全軍に下りたり、幾萬の勇將、猛卒、此命令に接するや、排舞勇躍未だ戰はざるに已に敵を吞たる概あり、各縱隊長は部下を召集して方略を授け、豫備隊となりし將卒は、先鋒たらんことを請ふて止まず、傳騎縱横に馳せ先鋒突撃隊たる名譽を荷ひたる部隊は、先きを争ふて前進したり、

右縱隊の活動

敵の左翼石板橋北方標高百七十四高地等の攻撃占領を命ぜられたる右縱隊の第二師團は、八月十九日黎明陣地を出發したり、其區分は友安少將の右翼部隊は石板橋北方標高百七十四の高地を、山本少將の中央部隊は、寺兒溝西北の海鼠山高地を、中村少將の左翼部隊は水師營南方高地より寺兒溝東北高地を占領して而して二百三高地椅子山案子山の攻撃に移らん方略なり、縱隊所屬の重砲隊は、三部隊に分屬して適當の陣地に放列を布き、師團長松村將軍は總豫備隊を提げ曲家屯北方高地に位置して縱隊の指揮を採る事に部署せり、

友安右翼隊の攻撃

友安隊に屬する砲兵は十九日午前四時百七十四高地の敵に對し砲火を開き攻撃を宣告するや、敵砲直ちに應射し砲戰約三時間にして午前八時頃友安隊は高地脚の地物なき小銃射界に散開し、射撃を開始したるに敵は銃眼ある塹壕内に

り小銃機關砲を以て狙撃連射し頑強に抵抗す爲に我隊頗る苦境に立ちしも已に決死を覺悟したる我兵は漸次敵壘に接近し午前十時三十分頃猛然怒濤の勢以て敵壘に突撃したるに、敵は遂に支へ得ず壕を出て壘を棄て敗走す、因て我軍直ちに高地の一角を占領し萬歲聲裡に日章旗を樹てたり、

敵の逆襲 石礮戰

我右翼隊百七十四高地の敵壘一角を占領し、直ちに防禦工事を施せしに、敵兵は健なげにも我に向て逆襲し來り、兩軍の距離接近して約六十米突となるや、猛烈なる射撃戰は變じて石礮戰となり、激戰猛闘の後敵を撃退せしに敵は逆襲接戰の効なきを知り再び砲火を開き、猛烈極度に達し硝煙砂塵濛々漢々天地爲めに晦冥、然れども我兵固守して退かず激戰一時間餘此時日已に没す、因て我兵夜襲に決し掩堡を急造して伏姿し時機の來るを待つ、午後九時夜襲の時機は來れり、轟然掩堡を躍出突貫を試みたるも敵頑強にして効を奏せず、高城中佐負傷す、五十君少佐の豫備隊來援夜襲を繼續せしも亦た奏効せず、因て夜襲を停止して徹宵せり、

百七十四高地の占領

右翼部隊長は突撃部隊の寡少なるを知り更に一個中隊を増加するに決し、明くれば二十日未明増援中隊は午前十時非分猛烈なる敵の銃砲火を冒し峻険を攀ちて、敵前五十米突の死角に在る前進部隊に合し直ちに突撃に移りしに敵火

益々猛烈にして死傷續出、然れども毫も屈せず累積する死屍を踰越して敵壘に肉薄せしに鐵條網地雷は壘前に縱横して突入する能はず、於此彼我二十米突を隔て、再び石礮戰闘を爲す此機に乗し三部隊は右方に迂回し側面より突撃せしに敵兵狼狽するや、正側兩方より一齊に突貫し接戰格闘途に敵を驅逐し、午後零時三十分百七十四高地の全部を確實に占領し、壘上高く旭旗を掲げ萬歲を三唱す、山嶽爲めに震動す、

中央部隊の攻撃 鉢卷山の占領

海鼠山攻撃の命を受けたる山本少將の中央部隊は八月十九日黎明を期し、其目標に向て攻撃を開始したるも敵の防備嚴なるのみならず地形上、他の敵陣地を攻略するの必要を認めしを以て同山の攻撃を猶豫し、先づ寺兒溝西北高地俗稱鉢卷山を攻撃するに決し二十日の夜此敵壘に向て前進したるも、敵は探照燈を照し光弾を放ち且つ銃砲火を猛射して我前進を妨ぐ、加ふるに我前進線は、傾斜ある開闊地なるを以て死傷者續出せしを以て二個小隊の歩兵に一個小隊の工兵を配屬潜行せしめ、敵の塹壕に接近し爆裂薬を投せしめしに敵は其不意の襲撃に狼狽恐怖し策の出づるを知らず、我兵之に乗し奮然突入せしに敵は我小部隊なるを知らしにや忽ち頽勢を挽回し來りて奮闘す、此時我後續部隊も此光景を見、九天直下の勢を以て慕進し來り、茲に壯烈なる接戰起り刃尖閃き石礮飛ひ奮戰少時にして敵は我猛威に敵するを得ず、潰亂逃走し我兵之を占領したり、

逆襲四回途に無効

鉢卷山の占領は敵に非常の苦痛を與へたれば、敵は如何ともして之を奪還せんと企圖し、多數の増援を得て逆襲し來る我兵占領の塹に據り、壕に攀ちて逆襲し、茲に再び慘烈なる格闘を生じ彼我混亂して格闘し兩軍の死傷忽ち高地上に狼籍し、遂に敵を撃退し、我兵銃劍を杖にし休息間もなく第二回の逆襲は來れり、其兵力頗る強大加ふるに後側方の椅子山、案子山砲臺より掩護して猛射する榴散彈は砂塵を卷き我頭山に爆裂するも幸ひなる哉照準正確ならず爲めに我兵の損傷少し、因て我兵は泰然自若敵を堡壘前に引附け猛撃せしに敵は多大の損害を被ふりて退却したり、然るに敵は尚ほ斷念する能はずして第三第四回の逆襲を試みたるも、我兵悉く撃退して占領を確實にしたり、抑も此鉢卷山は、椅子山砲臺の右側に位置して敵の爲めには最も緊要の陣地なり、敵が死力を盡して而かも四回逆襲奪還を企圖したるは誠に故あるなり、我兵苦戰奮闘して此要地點を攻略したるは將來の作戰に一大利益を與へたるものなり、

左翼部隊の攻略

水師營南方高地に向ひたる中村少將の左翼部隊は十九日薄暮先づ龍眼のステツセル砲臺前に進着せしに、敵は形勝の高地に築造したる掩蓋砲臺を固守し其前方下部に鐵條網を繞圍したり、我兵夜暗に乗し漸く敵壘に接近するや、敵は探燈を照し機關砲及び掩蓋壘より小銃火を雨注し、我兵

亦た射撃を開始したるも壘壁に命中するのみにて破壊力なくして苦心を極む、然れども益々猛進して鐵條網の一部を切斷破壞し將さに敵壘に肉薄せんとせしに、敵は益々猛烈に銃砲火を加ふるのみならず、天已に明けたれば狙撃するに至り損害少なからず已むを得ず一時背進して時機を俟つこととなり、

明くれば二十一日午前三時暗夜に乘し銃砲火の雨下を冒し敵壘に肉薄したるに敵の猛射に依り死傷續出したるも屈せず猛進し、遂に敵壘に突入混戦惡闘の後此砲壘を占領したるも敵は遠く退却せずして直ちに逆襲し來り、再び激戦の後敵を驅逐し確實に之を占領したり、

中央縱隊の攻撃

攻城砲海軍砲の攻撃

中央縱隊は十九日午前六時攻撃地點に向て前進す、各陣地に配置せる攻城砲隊并に海軍重砲隊は主として中央縱隊の攻撃目標たる盤龍山東西砲臺、望臺等に向て砲火を集中せしに、敵は連繫各砲臺より巨砲を以て應戦し、激烈なる巨砲戦は開かれ響々轟々砲煙砂塵は砲彈の炸裂と共に濛々漠々冲天に漲り其光景の壯烈なる言語に絶せり、我砲の照準正確にして着々命中、爲めに敵の諸砲臺は彈痕蜂集の如く、塙壁は破壊し、塙壁は飛散し、殊に望臺の一巨砲は破壊して肩墻に墜落轉覆したるも、敵は頑強猛烈に應戦を繼續して夜を徹し曉を迎ふるも尙ほ沈黙せず、然れども翌廿日の午後に至り敵も我砲の威力に壓せられ少しく沈黙の兆あり、

於此我砲兵の一部隊は歩兵の前進行路を開くの必要あるを以て盤龍山の前面に縱横する鐵條網の破壊に着手したり、

鐵條網の破壊

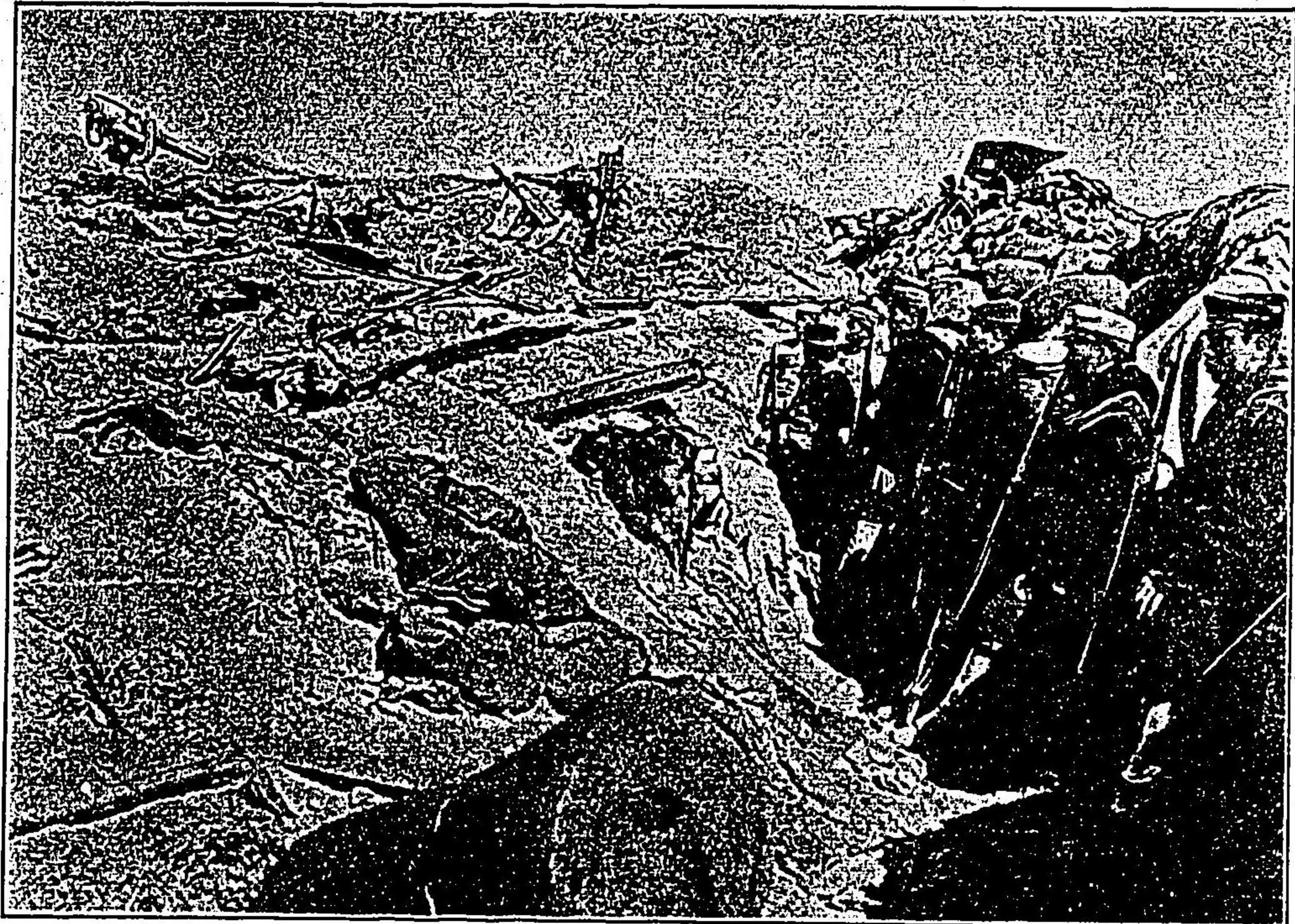
此鐵條網は三線に構設し、其第一第二の二線には驚くべし電流を通じ、玻璃板を併置して放電を防ぎ以て之に觸るを得ざらしめたり、因て我砲兵は鐵條網に向て破壊砲撃を開始し連續午後九時に至るも尙破壊し盡すを得ざりき、

三部隊の躍進

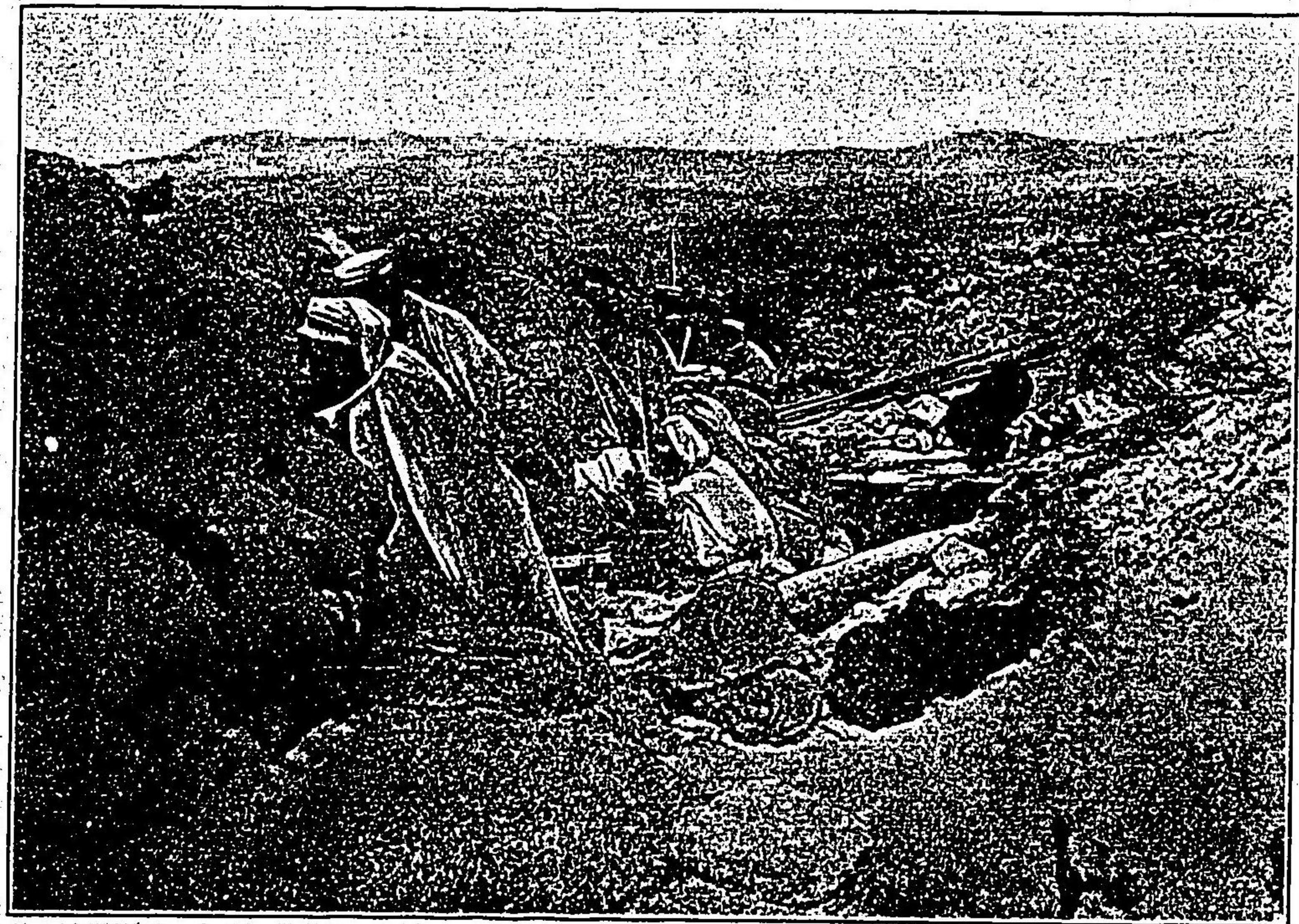
中央縱隊は砲戦開始と共に前進し、其右翼隊は水師營附近の高地に、中央及左翼部隊は先づ盤龍山東西砲台に向ひ敵火を冒して猛進し右翼隊は其高地を占領したるも中央左翼の兩部隊は砲戦繼續して未だ突撃の機熟せざる爲め只管時機の熟するを俟ちたり、

クロバトキン砲臺攻撃

全線に亘れる砲戦は愈々激烈なるもクロバトキン砲臺のみは敵砲稍々沈黙の色あるを見るや、右翼部隊は先づ工兵をして其前面の鐵條網を破壊せしむ、工兵は猛進して之を破壊し歩兵の行路を開くや、平佐右翼部隊長は、一個大隊をして正面より突進せしめ、一部隊をして之を掩護せしむ、突撃隊は十九日午後七時敵前に猛進せしに、敵は七門の機關砲と小銃とにて猛射し、面を向くべくもあらず、少時にして我死傷累積の慘狀を呈したり、去れと猛勇なる我兵二



盤龍山東砲臺咽喉部破壊後に於ける我歩哨線



盤龍山西砲臺咽喉部に於ける歩哨線
(二) 龍山砲臺に對し最も敵に接近せる歩哨

歩も退かず、死せる戦友の外套背篋に土砂を盛り之を掩堡と爲し攻撃を繼續せしに、此時南方後方の椅子山、案子山の砲臺は、此光景を看取し、俄然砲火を開き爲めに突撃部隊は十字火に陥り、掩護の二部隊亦敵の猛火に浴び頗る苦戦す、工兵隊は此苦戦の状を見るや爆薬を提げ猛進して敵壘に投入し、大爆破を試みたるも掩蓋堅牢にして充分なる奏効なかりし、突撃部隊は十字火に浴しなから其陣地に啣付夜を徹し、掩護隊亦後方の地隙に在るも敵火猛烈なる爲め二歩たも前進する能はず、砲兵は全力を盡して砲撃するも其効果未だ充分ならず、於此工兵は坑道を開穿して敵壘の掩蓋を爆發せんと決し直ちに工事に着手せしに、敵亦我が計畫を知りしにや、坑道を穿ち來りし爲め此作業も遂に奏効せざりし、

此時に當り他方面の戦況を察するに戦機未だ熟せず、掩護隊の前進亦た十分ならず、因てクロバトキン砲臺の奪取は一般戦機の熟するを待つ事に決し退却したり、

盤龍山砲臺攻撃

盤龍山方面に向ひ戦機の熟するを俟たる中央左翼の兩部隊は、歩工兩種兵の連合に成りたる破壊隊か盤龍山、砲臺の電流鐵條網地雷を破壊爆發するや、中央部隊は西砲臺に左翼部隊は東砲臺に相前後して猛烈に突撃を實行せしも、敵は小銃機關砲を亂射して頑強に抵抗するのみならず比隣の二龍山、東鷄冠山北砲臺より猛烈に砲彈を送り來りし爲め瞬時に多大の死傷者を生ず、依て我軍は更に一部隊を増援

し猛烈に敵壘に突貫せしめしも、不幸遂に其効を奏せず、千時二十一日午前五時三十分部隊長は慘烈なる光景を見直ちに殘餘の部隊及び豫備隊に再度の突撃を命ず、但し今回は一隊の工兵を附隨し、我機關砲之を掩護するに決し午前十一時突撃部隊前進を開始するや、敵は再び該砲臺より猛烈に銃砲火を集中し來る、縱隊長は此形勢を察し白晝の突撃は損害多くして目的を達すること困難なり、寧ろ暗夜に乘して突撃せしむるに加かすと判断し之を全軍に傳ふ、八月二十二日午前零時となるや、兩砲臺に對する突撃の機は熟せり、突撃隊は敵壘に向て躍進し破壊せし鐵條網を踏越せんとせしに、敵は光彈を發し機關砲及び小銃彈を雨下して頑強に抵抗す我軍彈雨を冒し猛進し、其一部隊は萬歲を叫んで敵壘に突貫せしも撃退せられ已むなく砲臺直下の地隙に引返し我砲彈の威力と、工兵作業の成功を俟ちつゝ、敵壘に向て銃火を集中する約八時間の久しきに及ぶ、我砲力と工兵の作業は大に奏効したり、

盤龍山東西兩砲臺の占領

於此正午再び大突撃を行ひ慘烈なる接戦の後遂に敵を撃退して盤龍山東砲臺を占領したり、東砲臺已に我有に歸したれば西砲臺亦た占領せしめて過ぐべけんや、同日午後五時中央部隊は東砲臺よりの掩護に依り最も猛烈に西砲臺に向て突撃し其第一線を占領したり、然るに頑強なる敵は第三第三線に山りて尙ほ防戦するを以て我突撃部隊は、之に對し數回の大突撃を爲し慘烈なる格闘の後、午後八時西砲臺

の全部を攻略占領し了りたり、
 敵の逆襲
 翌廿三日午前五時敵の歩兵盤龍山東砲臺に向て逆襲し來れり、此時砲臺第一線の咽喉部防禦工事不充分なりし爲め我守備兵少しく退くの已むを得ざるに至る、敵は増兵して遂次我背後に迫り銃火石礮を投下し其勢猛烈なりしも我亦増援を得て敵に多大の損害を與へて之を撃退したり之れと同時に西砲臺にも敵兵逆襲し來りたるも我守備兵は幾數隊の援助を得て午後一時頃全く之を撃退したり、

左縦隊の戦闘

左縦隊は八月十八日の夜半を以て先進の途に就き、十九日の早曉目的地點に達し直ちに砲撃を開始せしに、敵は東鷄冠山北砲臺初め二龍山、盤龍山等の各砲臺より應戦し就中東鷄冠山北砲臺最も有力なりしも我砲の威力旺盛なりし爲め其一部は蜂巢の如く破壊し其火藥庫を燒失せり、去れど敵は頑強に抵抗し夜間に至れば砲臺上より探照燈を照し光弾を放ちて我軍の運動を瞰視す、我砲探照燈の發電所を砲撃し之を破壊し光力を失せしめたり、砲撃と共に工兵の一部隊は東鷄冠山北砲臺の前面約二百米突の地點に存在する鐵條網破壊の目的を以て潜行前進せしに、敵は之を發見し砲撃したるも歩兵の一部隊は大孤山の北麓を迂回し砲臺前の一陣地を確實に占領したり、
 翌二十日早朝我砲火は敵の砲臺に向て猛烈を開始され東鷄冠山砲臺の敵砲は午後三時に至り稍々沈黙するに至れり、

右翼部隊の攻撃

右翼部隊の少數歩兵は工兵隊を掩護として二十日の夜半敵壘に向て躍進し、暗夜に乘り東鷄冠山北砲臺に潜行し、其前面に横る鐵條網を破壊したるを以て右翼部隊の一個大隊は午前四時突進して北砲臺の外岸斜面に達したるも其前面に深廣なる塹壕あり、携帶梯橋短小にして渡過する能はず、敵は我兵の突進を知るや、猛火を集中し爲めに我兵塹壕前に伏せしたるのみにて頗る苦戦す勇敢なる兵士は、塹壕に飛び入り彼岸に攀登せんと企圖したるも、壕内の機關砲の爲め掃射され爲めに突撃隊は慘憺たる否境に陥り、瞬時に多大の死傷者を出せり、此時偶々後續の突撃隊は北砲臺の東南堡壘に突撃し之を占領して日章旗を樹てたり、然れども盤龍山砲臺に向ひたる中央縦隊の攻撃意外に進歩せざる爲め同砲臺よりの猛火集中し、瞬時にして死傷無數益々悲境に陥りしも、必死を決心して占領陣地を保持せり、此時後

方に在る豫備隊は此慘況を見扶援せんとせしも、敵火益々猛烈なるを以て扶援突進したらんには死地に入に過ぎされは、苦心慘憺を極め後方より猛烈に掩護射撃を爲したるも突撃隊は益々悲惨なる狀況に陥り、於此右翼部隊長山中少將は土屋左縦隊司令官に報告して、我隊已に豫期の如く攻撃を爲し其一部を占領したるも今や悲惨なる境遇に陥り到底孤立して之を持続する能はず、之れ一に隣接縦隊の攻撃を待つのみ進まんか、敵の火力益々盛なれば遂に全滅せん、退かんか晝間に土地廣潤なれば亦た全滅せん、寧ろ進んで北砲臺を乗越へ第二の砲臺に薄らんとす縦隊長は之を探らず、隣接中央縦隊の速かに前進せんことを攻圍軍司令官に具申したるに、中央縦隊は今より前進せんとの通報に接したるを以て之を山中少將に通し共に一刻千秋の思を爲して中央縦隊の前進を俟ちたり、然るに夕刻に至るも攻撃前進の形勢なし之に反して山中少將の突撃隊は、刻一刻一分悲惨の度を増すのみ、於此右翼部隊は已むなく獨力第二回の強襲を爲すに決し、直ちに豫備隊をして第二回の突撃を行ひしも是亦多大の損害を被りて遂に成效せず、
 翌廿二日に至るも戦局は發展せず、午後二時に至るや右翼部隊長自から總豫備隊を提げ北砲臺に突撃せんと計畫せしに、軍司令官より攻撃地點變更の命傳はり其結果北砲臺及東南堡壘に在る右翼隊の突撃部隊は退却せざる可らざるも晝間は實行する能はず、日没を俟ちたるに敵は光輝探照燈を放ちて瞰視し、我退却を砲撃せり、爲めに又た多大の損害を被り、漸く廿三日の未明姜家屯附近に退却したり、

中央部隊の攻撃

東鷄冠山砲臺(中央砲臺)攻撃に向ひたる中央部隊は廿一日の夕刻同砲臺の前面に突進し塹壕内に突入したるに、敵の機關砲の爲め多大の損害を被り、遂に其塹壕を占領せしも攻撃地點變更の爲め之を放棄して舊陣地に退却せり

左翼部隊の攻撃

東鷄冠山東南砲臺占領の目的を以て前進したる、左翼部隊亦た其一部隊を以て廿一日の夕刻同砲臺に突撃し塹壕を占領したるも攻撃地點變更の爲め舊陣地に退却したり、

左縦隊の新運動

左縦隊は攻撃地點變更の結果其主力を東鷄冠山北砲臺に集中攻撃する事となりしを以て、之に向ひ廿三日午後六時より前進を開始したるに敵火益々猛烈午後十一時に至り彼我の砲戦頗る激烈を極めたり、此時左縦隊は所命の如く其右翼隊を中央縦隊と聯繫して盤龍山後方の望臺に向はしめ翌廿四日午前六時望臺の一部を占領し、其主力は東鷄冠山北砲臺に進み砲兵は之が攻撃を掩護し、突撃隊は猛烈大突撃を爲したるに不幸にして其大部分は敵の猛火に死傷し今は突進するの餘力なきに至り已むなく突撃を中止したり、

望臺攻撃

廿四日望臺奪取の目的を以て前進したる中央縦隊の一部隊

は、左縦隊の右翼部隊と協力し、午前二時突進せしに敵は機關砲及び小銃を猛射して、頑強に抵抗するのみならず東鷄冠山北砲臺より光弾、榴散弾を雨下し降時にして多大の死傷者を生ず、去れど我は一步も退かず丘腹の地物に據り突撃の機を窺ふ、此時我砲火の効果現はれ午前六時に至り敵兵狼狽の兆あるや、突撃隊は此機に乗じ地物を躍出し丘腹の敵壘に肉薄突貫せしに、敵は我が猛威に恐怖し嶺頂に向て退却す、我兵之を追撃し其一部隊は嶺頂に達し國旗を樹てたるも、嗚呼遺憾兵力少く後縦隊亦た少數、之に反して敵は益々主力を集中し來り、遂に敵するを得ずして已むなく國旗を撤し退却したり、

戰鬪中止

攻圍軍各縦隊の攻撃實況は夫れ如此壯烈凄慘を極めたるも戰況未だ進まず、因て軍議の結果強襲戰鬪を中止し、更に正攻法に據り、一舉に旅順五十餘基の城塞を屠り、數萬の殘敵を殲滅するに確定したり、

優詔令旨を賜ふ

八月廿四日畏くも 大元帥陛下より攻圍軍へ左の優渥なる勅語を賜はる

勅 語

旅順要塞本攻撃開始已來晝夜斯ノ堅城決死

ノ守兵ニ肉薄シ終ニ其二壘ヲ拔キ益奮進ノ途ニアリト聞ク炎熱ノ候ニ際シ連日ノ困苦轉々軫念ニ堪エス

朕深ク爾將卒ノ勇武ニ信賴ス爾將卒一簣其レ九俛ノ功ヲ全フセヨ

八月二十八日皇太子殿下より賜ひたる令旨は左の如し、連日連夜敵ノ堅壘ヲ攻撃シ不屈不撓遂ニ其一部ヲ奪取シタル軍將卒ノ極テ勇敢ナル動作ヲ歎賞ス

此優渥なる勅語令旨に對し乃木司令官左の奉答を爲す、

勅語に對する奉答

旅順本攻撃の緒戦に於て僅かに敵の二壘の攻略に對し特に優渥なる 勅語を賜ひ恐懼に堪へず臣希典等益奮勵誓て聖旨に酬ひ奉らんことを期す

謹て奉答す

司令官男爵 乃 木 希 典

令旨に對する奉答

旅順要塞本攻撃の緒戦に於て僅かに敵壘一部の奪取に對し特に優渥なる 令旨を賜ひ恐懼に堪へず希典等益奮勵誓て軍の任務を達成せんことを期す

謹て奉答す

司令官男爵 乃 木 希 典

我攻圍軍は從來の強襲戰鬪に代ゆるに要塞正攻法に依るに決し、八月廿四日を以て戰鬪を中止し直ちに對壕作業に着手す



東鷄冠山砲臺に向ふ我軍對壕作業實施中の光景 (其 一)



同 上 (其 二)

對壕作業に着手す

我軍對壕作業に着手せしに、敵は此作業を妨害せん目的にや、二十七日午前二時より同四時に亘り雷雨に乘し我戦線の各方面に向て逆襲を企て盛んに其砲火を我陣地に集注したるも、我兵悉く之を撃退したるを以て、敵は襲撃の目的を達し得ざるを知り、廿八日來望臺及其附近の高地に防禦工事を始め且つ我軍の占領したる盤龍山東西砲臺に對し巨砲及び野砲を配置したり、

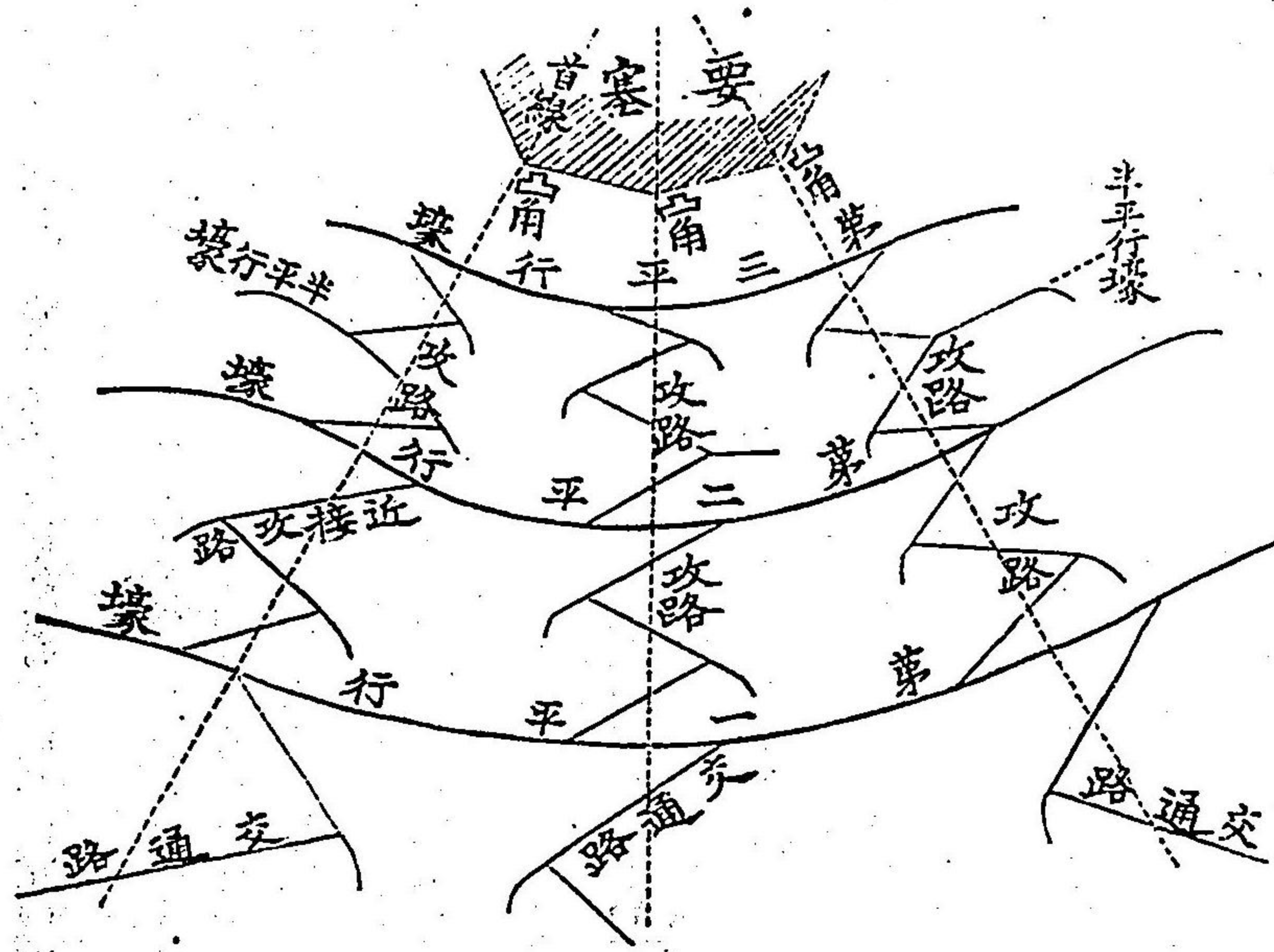
對壕及坑道

永久築城又は半永久築城を構設する堅牢なる防禦陣地にして而かも其守兵勇敢頑強なるときは、必ず正攻法と稱する攻撃法に依るにあらずんば攻略する能はず、旅順の要塞は天嶮を利用し、之に最新式の築城術を應用したる永久築城にして、而かも其守備兵は世界の最強を以て自負する露軍なれば、其勇敢頑強なる決して輕侮す可らず、因て攻圍軍は要塞正攻法に依り奪取攻略する事に決定したるものなり、其正攻法に要する對壕及坑道作業の何ものなるかを略説せん、

一 對壕作業

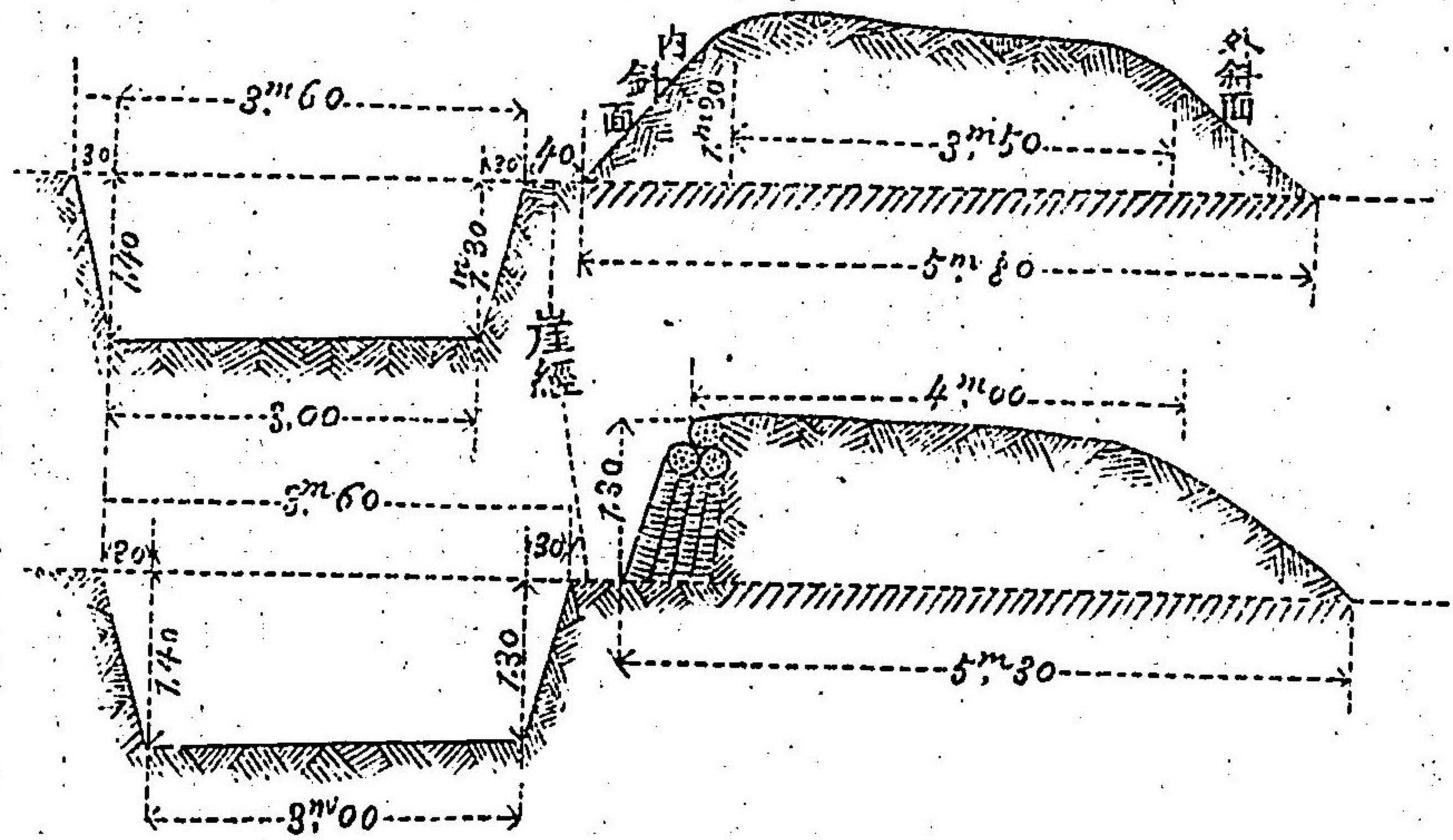
攻城戰に於て敵の要塞に接近する爲め行ふ作業には二種あり地表面上に塹壕を開穿して前進する攻路と地下を穿開して前進する攻路之れなり、地下攻路を坑道と稱せり、抑も

第一圖



對壕とは、要塞よりの射撃に對し攻撃者を掩護して漸次要塞に逼迫する爲め其前方に穿開する諸攻路の總稱にして普通之を塹壕と稱す、攻撃軍の工兵は其對壕内に於て他の戰鬥部隊を掩護しつつ、其開穿して取りたる土石を要塞に對して堆積し、胸牆を形成し以て敵眼敵火を遮蔽するものなり、

圖 二 第
面 斷 ノ 壕 行 平

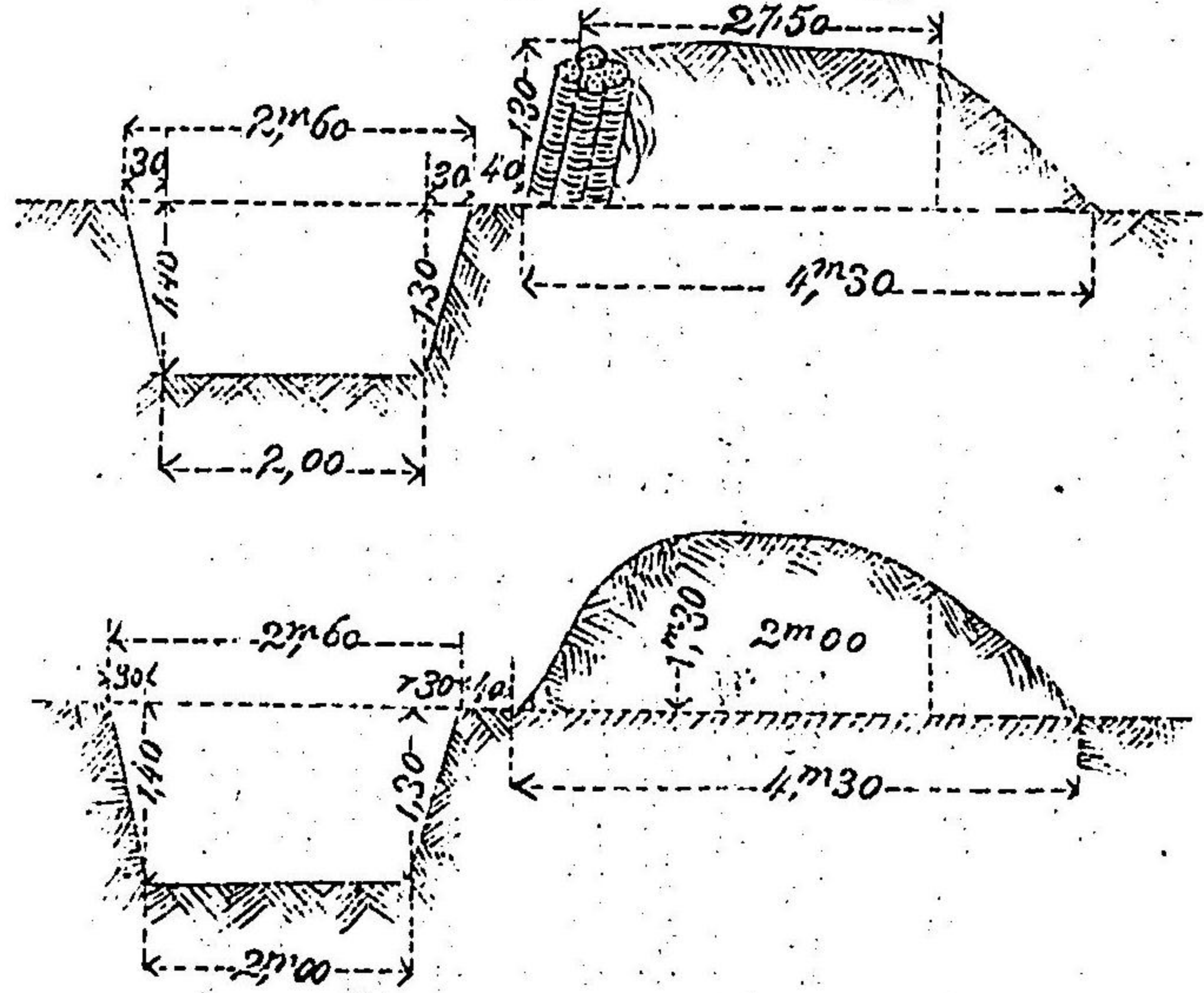


(内斜面ヲ土ノ自然
傾斜ノマハトス)

(内斜面ヲ堡壁ニ
テ被覆セルモノ)

禦物を没落破壊し、若くは火薬を以て飛散せしむる方法を
總稱す、此坑道は要塞戦に於て攻者守者共に使用す、即ち
攻者は守者の防禦陣地及び防禦物を破壊せん爲め坑道作業
を爲し、守者は之を防禦し且つ其坑道を破壊せん爲め同一
作業を爲す、故に坑道内に於て兩者の戦闘を爲すことあり、
之を坑道戦又は地下戦と稱す、
要塞攻撃軍の坑道の起點は、對壕中の第三平行壕前の攻路

圖 三 第
面 斷 ノ 路 攻



坑道作業

坑道とは、地中攻路に依りて敵の防禦地に侵入し、敵の防

此對壕作業は普通二次に施行す、即ち敵火に對し工兵をし
て早急に攻撃隊を掩蔽せん爲め先づ狭少なる壕を掘開し、
次に第二團の作業工兵を其狭少なる急造掩壕内に入らしめ
更に之を掘擴せしめ、以て位地的に相應すべき最終の形
状を對壕に與るものとす、故に其對壕即ち對壕には種々の
名稱あり、交通路、平行壕半平行壕、近接攻路等之れなり
之を圖解するときは第一圖の如し、
而して最初第一の平行壕を掘開する地點は其土地の状況に
依り異同ありと雖とも通常要塞より約一千メートル前の地
點よりす、第二平行壕は第一平行壕と要塞との中央より稍
々後方即ち第一平行壕に迫進して設く之れ第二平行壕の穿
開作業を妨害せんと要塞より出撃し來る敵兵の到着に先ち
て、作業守備兵を作業頭に先達せしむる爲めなり、第一線
平行壕の後方の交通路あるは攻撃者の諸材料を此交通路に
依り運搬するものとす、
近接攻路を電光形に作成するは敵火を避くる爲めなり壕の
蓋は危點を壕の唯一側ならしめ單胸牆即ち壕の側のみに
ある胸牆に依りて壕内を掩護するが爲めなり、此攻路は要
塞附近に達するときは電光形作成を爲さず、之れ全く攻撃
者の前進を妨害遅延ならしむるか爲めなり、
要塞の外岸を轉覆するには坑道に依ること必要なり、此時
は攻路を斜堤頂まで穿進し、夫より外岸の部分に面して長
形に對壕を掘り、次て垂坑路及枝坑路を穿ち適當の位地に
藥室を設くるものとす、

二 對壕の要部

對壕の重要な部分の幅員深淺は種々あるも概要は左の如
し、
對壕の幅は、軍隊及諸材料の通行を便易ならしむるを要すべ
きに付、平行壕は其底幅を三メートルとし、第三平行壕よ
り後方の攻路の底幅は二メートルとし、其第三平行壕より
前方の攻路に在りては二メートル半とす、
斷面の全高度は、敵眼に對し遮蔽を全ふる爲め武装せる
兵士の長身より高きを要すべきに付其高度は二メートル六
十とす、
胸牆の高度、對壕守備兵をして自由に武器を操縦せしむる
を要すべきに付、歩兵踏架を自然地上に設く即ち崖徑を踏
架に充て其廣さを零メートル四十とし、胸牆の高さを一メ
ートル三十と爲す、
壕深、は崖徑の斜面脚に於て一メートル三十とし、其内側
深を一メートル四十とす、胸牆の外斜面は土地の自然傾斜
とす、
胸牆の厚さ、は平行壕にありては三メートル五十乃至四メ
ートル、交通路に在りては二メートル乃至二メートル五十
とす、其斷面の概要は第二第三圖の如し、
複胸牆對壕の主要なる部分の大きさも亦單胸牆壕と略は同一
なりと雖も、底幅は二メートル五十其頂の厚は一メート
ル乃至一メートル五十とす、

の最先約二メートルより要塞の斜堤外岸及内壕に向ひ、更に進んで胸牆複胸牆に向て地中を堀穿す、但し危険となる迄敵の斜頂に近接せざるものとす、

要塞守備者の坑道は、攻者の坑道作業を半途に阻止破壊せんとするにあるを以て、攻者の坑道に反對して穿堀す故に地下戦起るなり、

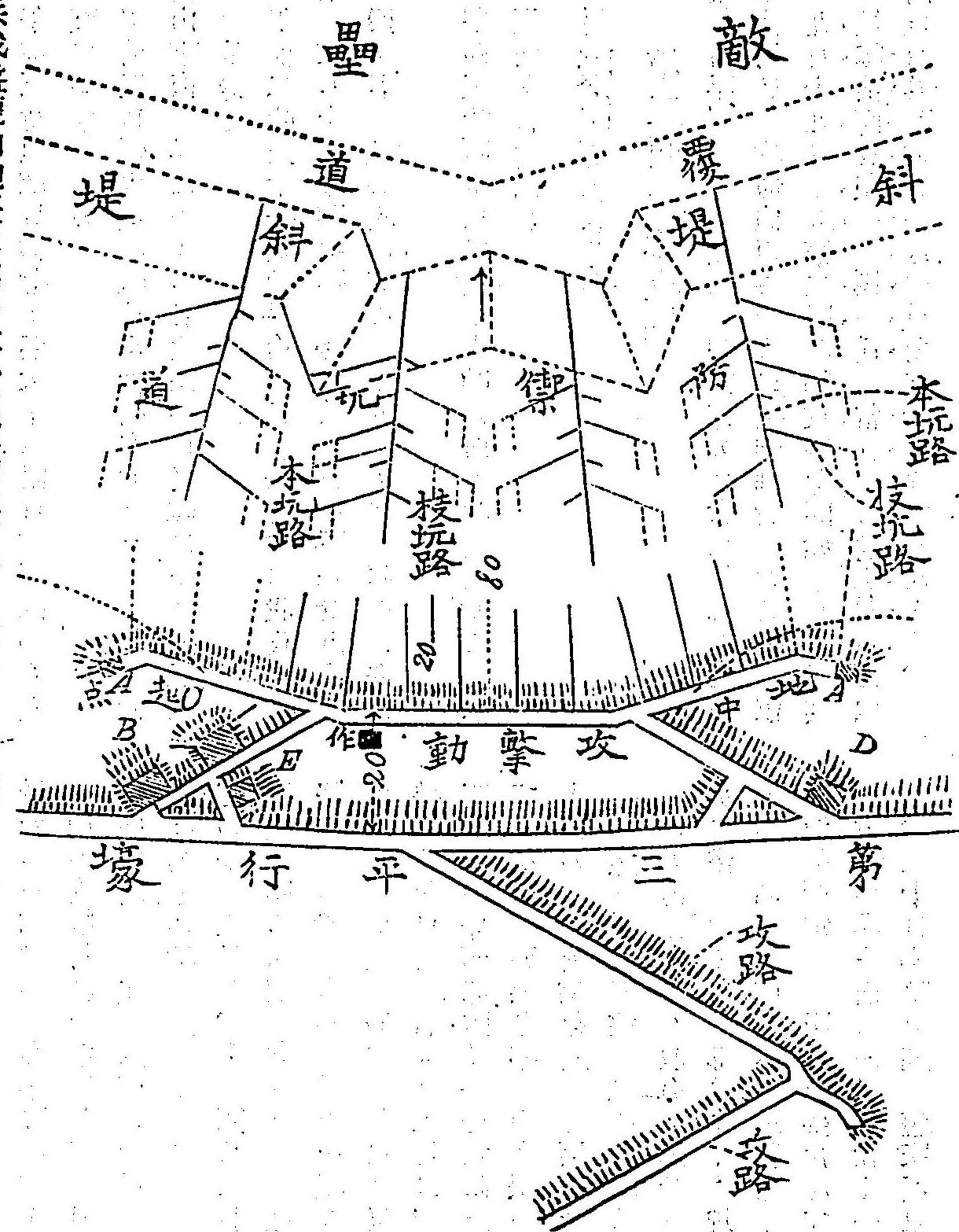
攻者の坑道の底幅は、三メートル五十其深さは、一メートル八十にして後方ならんには平行壕より側防せらるべし、而して其坑道の起點より斜堤頂に至る距離は八十乃至百メートルにして其蓋は起點より蔽ひ、枝坑道の長さは二十メートル以内とす、地中攻撃動作の起點たる深壕より敵の諸坑路に向ひて攻進せんには、其壕底に垂坑路を掘り其底より發して攻撃枝坑路と名くる水平坑路或は斜坑路を開設す、是等攻撃法は其地形地質に依り撰定す、即ち等質りては、

ひ坑路と云ふも同一なり、此坑路を圖解するときは左の如し、

我軍の砲撃及偵察

敵は我對壕作業妨害の目的を以て屢々砲撃又は逆襲し來れり、我亦重砲海軍砲を以て敵の本據とする旅順市街及兵營砲臺に向て砲撃し傍ら敵情偵察を怠らす、九月二日の如きは我右縦隊の重砲及海軍砲は市街及兵營要塞に向て數十發の威嚇砲撃を爲し、其結果松樹山の敵砲一門を破壊したり、之と同時に右縦隊右翼部隊の一隊は、鳩灣方面に向て強行偵察を爲せしに、高家屯附近に於て敵騎二名を發見射撃せしに敵は逃走したるを以て之を追撃して海岸の東北高地及夏家屯方面の敵情を最も正確に偵察し、將來の作戦に少なからざる利益を興へたり、

圖 道 坑



三日 敵兵我盤龍山砲臺に向ひ大小砲彈約二百發を送れり之れが爲め我作業工事破壊せらるる所ありし

九日 朝來敵兵頻に我を砲撃せり龍眼北方敵壘クロボトキン砲臺に對する我坑道は既に壘前五十米突に達し東鷄冠山砲臺及び同北砲臺に對するもの約三乃至四百米突に近接せり

に來襲し我兵之れを撃退せしも之れが爲め工事の進捗全く妨害せられ又盤龍山二砲臺此日劇しき砲撃を受け工事の大部破壊せられたり

十一日 各方面の對壕作業益進捗し水師營南方に對するもの今や敵壘前約七十米突に近接す敵兵重砲火を以て我作業を妨害すること前日來と異なることなし

十二日 敵兵約三十名午前十時と午後二時に於て東鷄冠山北砲臺に向ひつゝある我作業隊に襲撃し大損害を受けて敗走せり

諸砲臺觀測所及び輕氣球隊の報告に據れば東鷄冠山砲臺の敵兵我龍山東砲臺に向ひ坑路を掘設しつゝあるものゝ如し

十三日 午前三時頃敵兵約七十名大平溝附近右翼隊の右翼に襲撃し直に擊退せらる

十五日 午前三時頃少數の敵兵水師營南方クロバトキン砲臺及二龍山東南堡壘に對する各攻路の作業隊に襲撃す我兵直ちに之を擊退せり

十六日 午前二時三十分頃敵兵約百名龍眼北方の我攻路に向ひ襲撃し來り十數分間格闘の後我兵之れを擊退せり次で三時頃約四十名の敵兵再び襲撃し來りしも我が射撃に退ふて退却せり

十八日 午前三時頃敵兵二三十水師營南方我攻路頭に襲來し二個の爆藥を投じ去れり

對壕作業の進捗

第二回の總攻撃

對壕作業に着手してより茲に三句或部分は大に進捗したると、從來使用せし攻城砲以外の大口徑砲到着したるとに依り、更に九月十九日より第二回の總攻撃を開始したり、其部署は左縱隊、前面各砲臺牽制の任に當り、中央及右縱隊は、水師營附近及其南方諸高地の重要堡壘を攻撃せんとす、

右縱隊の攻撃區分

右縱隊の友安少將の右翼部隊は、二百三高地及其附近の敵壘を、山本少將の中央部隊は海鼠山の敵壘を、中村少將の左翼部隊は、水師營南方高地の砲臺攻撃と定まりたり、即ち八日の第一回總攻撃の部署を繼續したるものなり、

於此右翼部隊中の突撃隊は、工兵隊と共に要塞戰に要する一切の攻撃材料を準備し、九月十九日午前二時二百三高地に向て前進し先づ四個の斥候を派遣し其高地脚に在る敵の鐵條網を切斷せしむる事に決し、直ちに之を實行せしに豫定の如く成功し、之と同時に我砲兵隊は同高地に向て砲火を開き頗る猛烈に砲撃せしも標高の長伸なると防禦工事の堅牢なる爲め容易に効果を現すに至らず、因て更に重砲を増加して猛烈に砲撃せしに効果大に現はれ敵稍々騷擾の形勢あるを見たる右翼部隊長は、茲に突撃の斷行を命するや突撃隊の先頭部隊は午後六時三十分工兵隊と共に勇躍奮進す、後續の突撃隊亦た躍進跟隨せしに敵は俄かに機關砲、小銃の一齊射撃を爲して拒止せんとす爲めに我死傷續出せり、然れども突撃の二個大隊は山脚豁谷の地點に猛進せしに左方海鼠山未だ我有に歸せざる爲め、突撃隊は殆ど十字火に浴したるも一部は辛くも地物に依り猛火を避けたるも他の一部隊は據るべき地物なきを以て山脚を西南に迂回し陣地を撰定して明日を待たんとす、

西方太平溝方面に派遣したる一枝隊は十九日大平溝に達し、二十日拂曉を期し趙家屯東方高地の敵を攻撃して之を

占領し、少數の守備兵を残し他は二百三高地の攻撃掩護に任じたり、又他の部隊は若干の豫備を残し一個中隊宛區分し工兵隊と共同して突撃隊を編制し、隊中より更に三十名の歩兵二分隊の工兵を選抜して鐵條網破壊班と爲したり、突撃部署定まるや突撃隊長は最後の思出に快よく一睡すべしと命せしに、全隊地上に横臥す鼾聲雷の如し、熟睡幾時東天紅を呈す、我砲火は曉風を破りて霧々又殷々忽ち情報あり趙家屯東方高地我有に歸したりと、將士歡呼勇躍す、

戰機熟す突撃數回

九月二十日午後二時部隊は、敵前二千五百米突の地點に達し突撃の機來るを俟つ、砲戰は頗る猛烈容易に突撃の機は熟せず、俟つこと數時午後六時に至るや突撃の命令は下れり、待ちに待ちたる先頭の鐵條網破壊班は突進す、續ひて第一第二の突撃隊奮進するや敵の機關砲、小銃彈は急雨の如し爲めに破壊班初め第一第二の突撃隊は瞬時にして多大の死傷者を出し殊に破壊班は殆んど殲滅の慘況に陥れり、之を目撃したる第三突撃隊長は陣頭に立ち部下を歴き敵火を冒して、先頭突撃隊の據れる地隙に達したるも、各方面の戰況未だ進まざる爲め突撃せんか十字火に陥る、若かず更に破壊班を派して鐵條網を破壊せしめ、以て大突撃に移らんと決心し、此前進地隙を第二突撃陣地と爲し、直に決死の破壊班を編制して派遣せしに、勇敢剛氣の決死隊は敵の猛火に浴し鐵條網約五十米突を破壊し突撃部隊の進路を開く、全隊其偉功を讃し萬歳を絶叫し直ちに突撃に移り九

天直下の勢を以て猛然敵壘に肉薄す、此時左翼の豫備中隊亦た左側より肉薄し來れり、

兩隊の聯繫突撃

因て兩突撃隊は聯繫して敵壘下の塹壕に突入之を奪取し敵の北を追ふて壘下に肉薄すれば、敵も決死の覺悟壘上より爆彈を投下して頑強に抵抗すれば我亦爆彈を壘内に投じて奮闘す、爲めに砲壘の内外爆音轟々火燄天を焦し凄絶壯絶大惡戰を極む、敵は壘内に在り我れ壘下に在り爲めに我兵大に苦戦し死傷續出し増援は來らんとして半途に斃れ來らず、今は如何ともする能はず殆んど殲滅の悲境に陥りしに、恰も好し我砲の連續攻撃此時砲壘の西南角の大中止部を破壊したり、苦戦の突撃隊之を見るや信號して砲撃をせしめ狂瀾の如く敵壘に突入大格闘の後敵を驅逐し、同高地壘の西南角の一部を占領したり此時午後七時半なりき、午後十時更に嶺頂の敵壘に突撃したるも右側背より敵の逆襲を受け奏功せず、同十一時再度の突撃も目的を達する能はず已むを得ず凸角の占領陣地を固守し抗道作業に依るに決したり、

占領陣地を放棄す

廿一日午前四時三十分に至り敵は意外にも右側面より機關砲小銃にて猛烈に我を射撃し來り、爲に我兵多大の損害を受け、遂に凸角陣地を放棄し再び後方下部の地隙に退却するの已む可からざるに至れり、今や我突撃の諸隊は多大の死傷者を出したるも之を收容し得ざるは勿論將校の多數亦

た死れたる爲め混隊するも其指揮を爲べき將校なく、只た地隙に退却伏姿したる大杉少佐の外數名に過ぎざるに至れり、此惡戰の爲め我軍旗は三たび旗手を代へたり、以て其如何に大苦戰なりしかを卜知すべし。

再び敵陣に突撃す

戦友の大部分は死傷し、一度び占領せし陣地は奪還せられ地隙に潜伏せる殘存隊は遺憾悲憤に堪へず、全滅を期して最後の突撃を實行せんと決心し日没を待つ數時、日は暮れたり突撃の時機は來れり、突撃隊長は殘餘の戦友を糾合し、敵火を冒し奮進猛闘遂に敵を驅逐して西南凸角の舊占領陣地奪還の偉功を奏したるも、地形上左翼の突撃隊未だ其前面の高地を占領せざる爲め此高地より側背射を受け到底固守する能はず已むなく皆な血涙を吞んで死傷者を收容して背進したり、右翼部隊中の中央突撃隊の戦況夫れ此の如く悲惨を極めたり。

中央部隊海鼠山を占領す

本隊の攻撃目標は二百三高地に接する海鼠山の敵壘なり、因て十九日午後二時砲兵は豫定の各陣地に放列を布き直ちに目標に向て猛火を集注せしに、午後六時に至り其威力現出し敵壘に多大の損傷を與ふ歩兵突撃の機は熟したり、山本部隊長は突撃の機熟するを見るや、兵を麾ひて突撃に移らしむ、野壕に在りし突撃隊は雨霰の如く降り來る銃砲彈を冒し、山嶺東端の敵壕に突入格闘鏖殺して之を奪取した

左翼部隊の攻撃

敵壘占領

中村少將の左翼部隊は十九日夕刻他隊と前後して水師營南方敵壘攻撃を開始したるに、先頭の突撃隊は敵の猛火に陥り悲惨を極む、依て明朝を俟つに決し敵前に掩蔽を急造して徹夜したり、廿日拂曉を期し我が重砲隊は猛烈なる巨砲火を敵壘に送りしに、着弾明確大に之を破壊するや掩蔽内の先頭突撃隊は躍出猛進後續隊亦奮進急敵の如き砲彈猛雨の如き銃砲に浴

るも、嶺頂砲壘の敵は頑として動かさず、加之ならず椅子山、案子山等の隣接砲壘の猛火は急雨の如し、爲めに死傷續出因て已むなく壘下に掩蔽を急造して明朝を待ちたり、明くれば二十日黎明我砲火は海鼠山及二百三高地に集注す、突撃隊は此掩蔽に依り猛烈敵壘に肉薄したるも、抵抗益々頑強にして攀登する我兵に向て猛烈に爆彈石礫を投下するのみならず他砲壘より飛來する砲彈亦た急雨の如し我兵苦戦後續部隊此慘狀を見るや、部隊長は陣頭に立ちて戦友の危急を救はざる可らず、敵壘奪取せざる可らず、一人となるも退く可らずと、叱咤猛進して先鋒隊と共に轟然敵壘に突入大格闘の後敵を驅逐し、海鼠山全部の敵壘を占領し萬歳聲裡に日章旗は翻へりたり、全軍之を見て歡呼萬歳を三唱山岳爲めに鳴動す、海鼠山占領の結果は將來我作戦に多大の利益を與へしのみならず二十七密速射砲二門を鹵獲したり。

し共に敵壘に肉薄し、決死工兵隊の破壊せし副防禦物を踏越し斜堤を踏破し、午前九時遂に第一壘に突入して之を占領し、同十時過ぎ第二壘に續て第三壘に突入して午前十一時四十分頃水師營南方の敵壘全部を攻略し嚇々たる偉功を奏したり。

中央縱隊右翼部隊の突撃

八月十九日以後の第一回の總攻撃に於て占領の目的を達するを得ざりし中央縱隊は、爾來連日連夜正攻作業を爲したるを以て這般の攻撃には幾隊の殲滅を期するもクロバトキン砲壘を攻略せざる可らずとは全軍の決心なり、故に第三回總攻撃の命傳はるや、之が攻略の任に當りたる、平佐少將の右翼部隊は意氣衝天の勢を以て、九月十八日の夜クロバトキン砲壘に向て前進し、十九日午前二時となるや、我巨砲隊は先此砲壘に向て鉛雨を集注し敵壘亦た必死となりて應射したるも何爲ぞ我巨砲の威力に敵するを得ん、敵壘の巨材大石は爆煙と共に空中に飛散し、午後二時に至り其掩蓋の多數は大破を被れり、去れど頑強の敵は尙ほ死守して退かず午後六時突撃の期は熟したり、第一線の第一大隊の突撃隊は野壕を躍出し第二大隊の突撃隊亦た突出共に萬歳を連呼して敵壘の外壕に突進す、敵は擲彈を放下して必死抵抗す、爲めに我將卒の死る、もの無數然れとも決死の我兵毫も屈せず益々奮進せしに、敵は四門の機關砲を壘頂に併列して掃射し、加ふるに銃眼よりする銃射と擲彈との爲め、我突撃隊なる二個大隊は多大の損害を被る、殊に第二大隊

の如きは大中隊の將校皆な瘠れ一少尉僅かに之が指揮を爲すに至れり、此悲惨壯烈なる光景を目撃せし部隊長は悲憤措く能はず直ちに第三大隊を叱咤赴援せしむ、因て赴援隊は猛烈なる敵火を冒し前進突撃隊と協力して更に數回の突撃を爲し第二第三の敵壘を奪取したるも、敵は後方の壘内に退き尙ほ頑強に猛射を繼續す、爲めに壘内に突入するを得ず、工兵は爆藥を投したるも達せず、日は没したり、已むなく明朝を待て更に突撃する事と爲し占領陣地に徹夜したり。

クロバトキン砲壘の占領

二十一日午前四時半突撃隊は占領陣地を躍出し突入に移らんとするや、敵壘内俄かに火燭濺々として起るを見る、好機逸すべからずと猛進敵壘に突撃するや、後續の諸隊亦た突撃し來り三面同時に敵壘に突入し殘敵を鏖殺し全くクロバトキン砲壘を攻略占領し、宿昔の目的を達したり、壘内の火炎は敵軍到底據守し得ざるを知り自から燒毀したるものなり。

二百三高地の攻撃(二面)

二百三高地は已記の如く右縱隊の右翼部隊主として之に當り、中央右翼の兩部隊亦た協力して攻撃する部署なり、因て十九日午後二時三十分我砲兵は砲火を開き最も猛烈に攻撃し、砲煙は濺々として高地上を密蔽すと雖も砲口大なるらざる爲めか、午後六時に至るも敵壘掩蓋の二少部分を破

境したる外別に認むべき効果なし、而かも敵は沈黙して應射せず、午後六時過ぎに至り初めて三十七ミリの速射砲數發を放ちたるのみ、然れども老嶺山假頭山臺よりの敵砲は盛んに我が準備陣地に落下したり、

我突撃隊前進の豫定時刻は已に経過したるも突撃の效果未だ十分ならざる爲め突撃の機は來らず、六時四十分頃に至り突撃の機熟せり、斷行すべしとの命令あるや、先頭突撃隊は二部隊となり工兵隊と共に前進し一隊は右方の鶯谷より他の一隊は左方の凹地より突進したり、

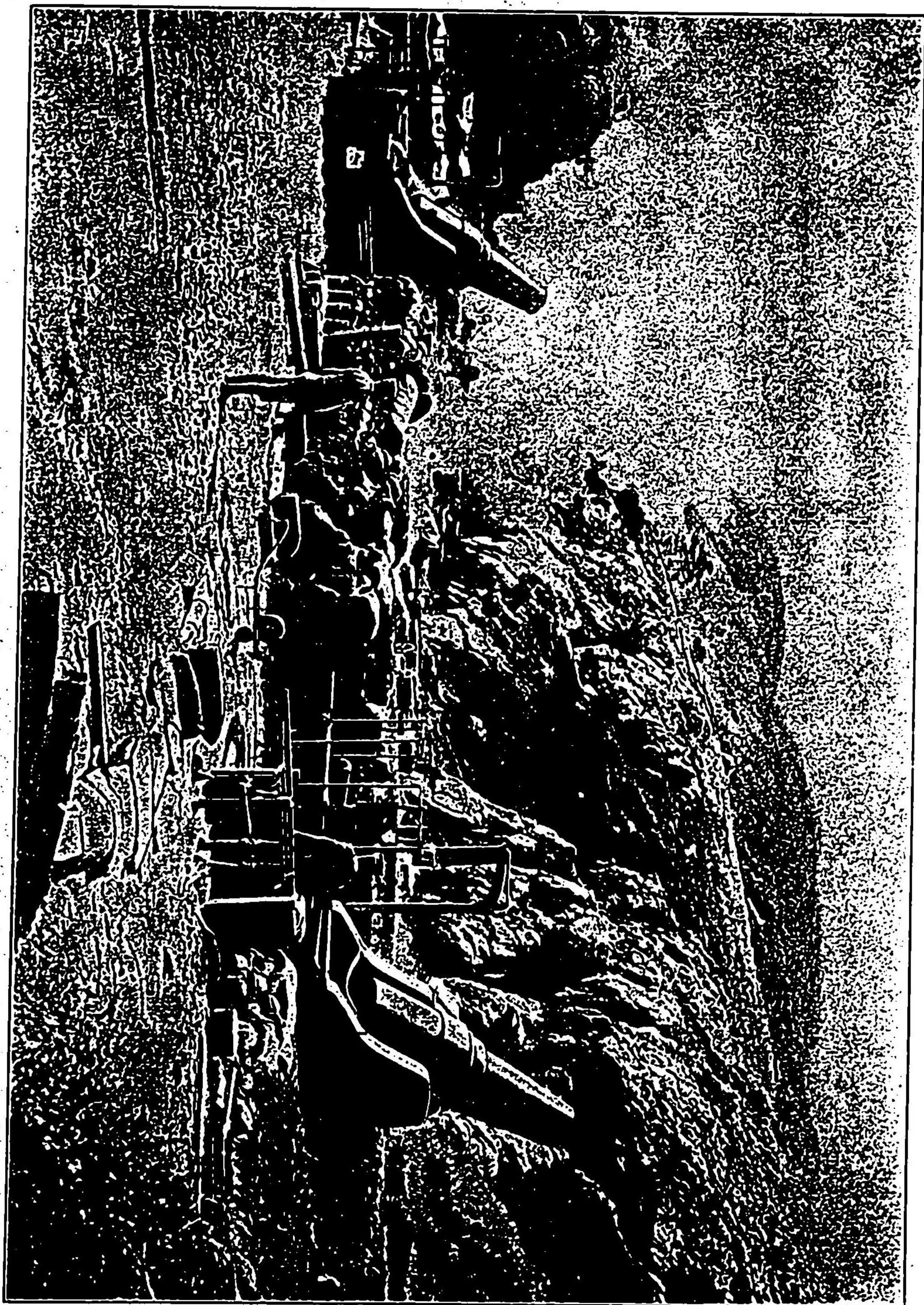
沈黙したる敵は突撃隊の近距離に突進するや、機關砲小銃火を雨下し來りしかば我兵瞬時にして多數の死傷者を生ず、且つ此突撃は比隣の高嶺山未だ我有に歸せざる前なるを以て、同山の敵臺より側背を狙撃したる爲め二部隊の突撃隊は甚たしき苦戦に陥りたり、此慘況を見たる部隊長は直ちに三個の突撃隊をして赴援せしめ、二十日午前二時敵臺下の斬壕に突進せしに、敵は上部の臺に據り掃射擲弾必死防戦す、加之ならず後方の臺内より小口徑砲を亂射し來り、我軍益々苦境に陥りたり、突撃隊は已むなく臺下の岩角地隙に身を潜めしに、敵は頭上より猛烈に擲弾を投下し爲めに我死傷亦た續出したるも、我は此地隙に喰付日の没するを俟てり、懸て日は没し午後六時四十分に至るや、先頭突撃隊は猛然として二百三高地西南角の敵壕に突入奮撃猛闘して之を占領したるも、左右兩側の敵壕より盛んに擲弾を投する爲め占領を確實にする能はず頗る苦戦す、此時午後七時豫備の二部隊は工兵と共に突進扶掖し來りて

防禦工事を施したり、此時敵は頭上の稜斜線に多數の兵を増加し逆襲し來りたるも、地域狹隘なる爲め大部隊の逆襲を爲し得ざりしゆへ、我兵之を擊退し此占領山角に掩蓋堡壘を構築したり、然るに翌二十一日午前九時に至り敵亦た逆襲し來りしを以て之を擊退するや各方面の敵臺より猛烈に砲火を集中し彈丸は頭上に破裂し、且つ高地稜斜より投下する擲弾亦た飛來す、之に反して我射撃は殆んど効力なく爲めに我兵力は刻一刻に減少するのみ、二十二日黎明我兵五個小隊増援し來る因て嶺頂の敵臺に突撃を爲したるも敵の十字火を受け多大の死傷者を生じ遂に目的を達せずして舊陣地に退却したり、午後九時過ぎに至り敵は鴨湖村の西北高地に新たに放列を敷き斜而高地に密集する我を砲撃す、其危険云ふべからず、依て已むなく此陣地を捨て山脚の凹地に陣地を變換せり、

二百三高地の攻撃は四日間連續したるも敵兵の頑強なると砲臺斬壕の堅牢なる爲め攻略するを得ず、反て多大の損傷を被りたるを以て更に作業工事を進めたる後に於て攻撃するに決し、突撃隊は遺恨の涙を吞んで死傷者を收容し舊陣地に退却したり、

山本少將の戦死

右縦隊の中央部隊長山本少將は海鼠山占領後九月廿五日二三將校と共に海鼠山の斜面に行進し、二百三高地方面の敵情偵察中俄然敵彈飛來して少將の左胸部に中り心臓を透射し右胸を貫通せり、爲めに英魂忽ち去て復た歸らず、嗚呼哀惜の至りに堪へず、



海鼠山北の方より二十八日「巨砲」にて崖内の敵壕に向て同接砲撃の光景

敵の逆襲を全滅す

九月廿五日午前八時半敵は松樹山、東鷄冠山等の各砲臺より二龍山砲臺に對する我對壕作業に對し砲撃を爲すと同時に約三十の敵兵逆襲し來る勇敢なる我兵之を遂撃し激闘三十分に於て之を屠殺全滅したり、

海軍砲の敵艦攻撃

九月二十八日陸上海軍砲を以て旅順港内の敗殘敵艦を攻撃せしに、七八發は確かに命中して火災を起したり、彼は唧筒を以て防火に努めたるを確認せり

松樹山及敵艦砲撃

九月二十九日我中央縱隊の大口徑砲は午後六時より松樹山の砲臺を攻撃し、一發其西北角に命中するや、敵兵約三十は悲鳴を擧げて逃走したり、我海軍砲は翌三十日再び敵艦を砲撃せしに「ベレンスウィンドボビエグ」に各五發命中し「セバントホール」は我の砲撃を恐れ東港に錨地を移した

對壕作業と砲撃

八月廿五日以來の我對壕作業は大に進捗したりと雖とも未だ各方面とも完成したるにあらず、尙ほ大に作業を進めざる可らず、因て九月十九日より二十二日に亘る四日間攻撃後各縱隊とも専ら之が作業に従事し、此間我砲兵は大口

徑砲海軍兵は其海軍砲を以て敵艦及び砲臺を攻撃する事となり、

十月三日大口徑砲は砲臺海軍砲は敵艦を砲撃せしに旅順ベレンスウィントに命中し多大の損害を與へ、又東鷄冠山砲臺を攻撃し數發命中其二角を破壊せり、敵は我作業妨害の目的を以て、同夜半より翌三日午前四時の間に於て、東鷄冠山の我が作業に對し逆襲し來り、我左縱隊之を遂撃し劇烈なる戦闘を爲し敵は數多の死體を遺棄して潰走したり、爾來敵は我對壕及坑道作業妨害の目的を以て各方面に向て連續逆襲し來りしも、堅壁に據らざる敵なりせば何んぞ我に敵するを得ん、皆な多大の損害を與へて潰走せしめたり、

二龍山の敵壕奪取

十月十日中央縱隊の右翼隊中の一中隊は正午三龍山下の敵壕に向て強襲し之を奪取したり、此新壕は同山砲臺に對する我坑道作業に妨害を與ふる少なからざるを以て先づ之を奪取するの必要ありしが爲なり、之を奪取するに就き我れは巧みに地物を潜行し俄然突貫したる爲め、敵は大狼狽を極め一彈だも發し得ずして逃走す依て之を奪取占領せり、

水源地發見

我工兵隊は龍眼附近に於て十月十三日敵の水源地を發見したるを以て、之を閉塞したる結果、旅順港内の敵は益々飲料水潤乏之に反して我軍の占領せし河川にして是迄水なきものは三十冊米以上の水量を見るに至りしは幸ひなり

鉢巻山砲臺の占領

二龍山砲臺と盤龍山北砲臺の間にある鉢巻山砲臺は二龍山を居る前之を攻略するの必要あるを以て、攻撃命令は中央縦隊に下れり、於此攻撃部隊は機關砲數門を携へて工兵隊と共に重砲掩護の下に十月十六日早朝前進して突撃陣地を占領し、同時に砲兵は砲火を開きしに中腹の敵壕は我巨彈の爲め粉塵し、突撃の機熟するや、工兵前進して先づ地雷を爆發し突撃隊は之を機として敵の猛火を冒して突撃したり、其光景の壯烈なる觀戰外國武官をして思はず拍手嘆賞せしめたり、第一線の突撃隊は北麓より壘下に肉薄し、玆に爆發戦を開く、此時後續の突撃隊亦た決河の勢にて突入し大格闘の後殆んど敵を殲滅して此鉢巻山の壘を攻略占領したり、戦利品は大口徑野砲小口徑砲各一門機關砲二門彈藥小銃は多大なりき、

旅順の慘狀

敵軍益々窮乏し降伏の兵日々多きを加ふ、十月十八日投降露兵の語る所に依れば旅順の運命は旦夕に迫り上官は露民支那人の別なく強制的に晝夜兼行労働に服せしめ殆んど體軀の休息を得ず、悲聲四方に聞ゆ自分等も衣食足らず、數月間給料渡らず且つ労働過劇なるを以て決意降参せり、日本軍砲撃の爲め艦隊市街の被害甚だし、ステツセルは決死隊四團を募り勳章と賞金とを約し各方面に出撃せしめて日

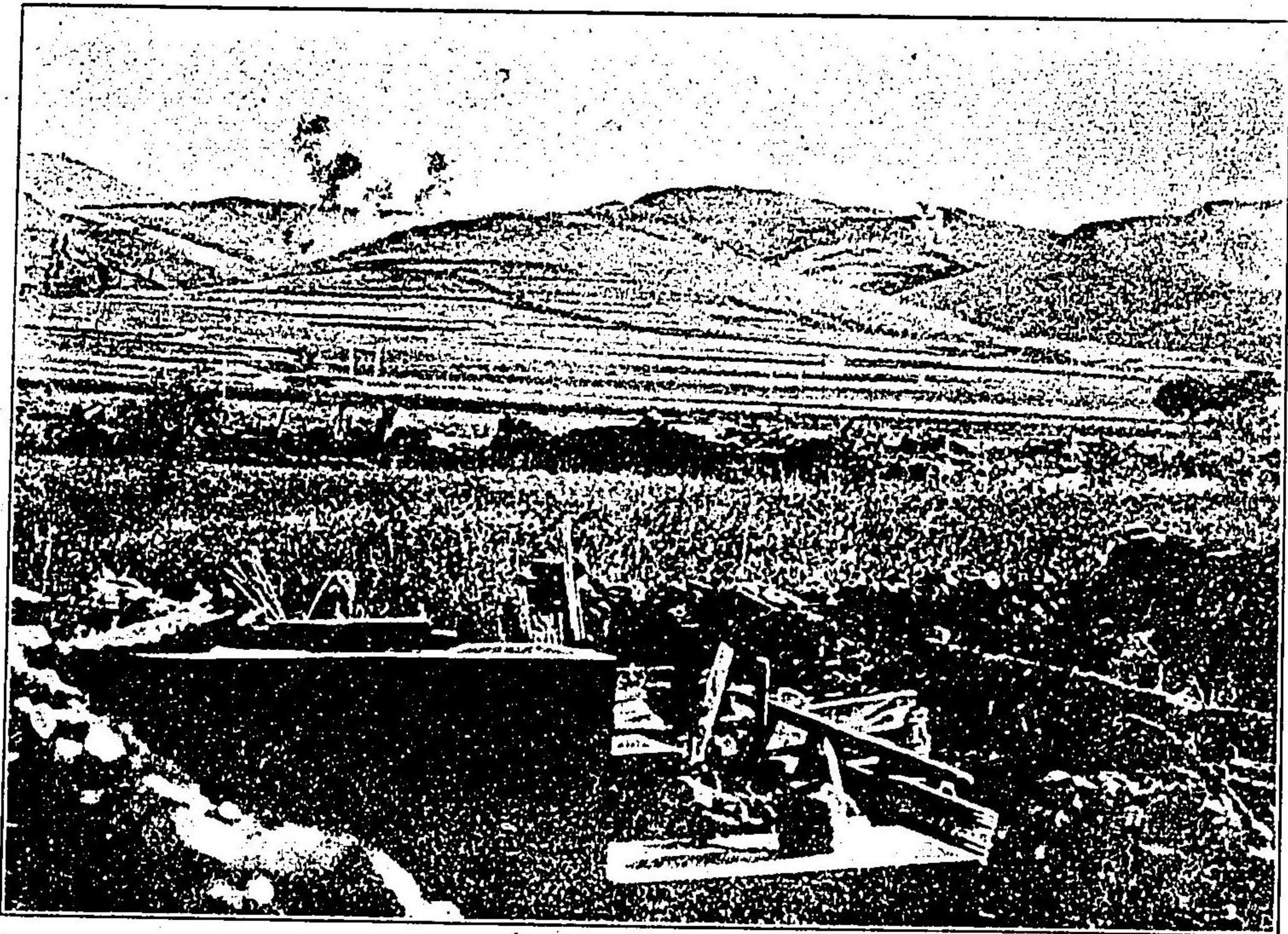
本軍の大砲を破壊せしめんと努め居れりと云へり、又我大口徑砲及海軍砲攻撃の結果十月廿四日午前二時より旅順市街に火災起り五時頃漸く鎮火せり、以て旅順の如何に慘憺たる狀況に陥り居るかを知らるべし、

我對壕作業大に進捗す

各砲臺に對する我れの對壕作業は、着々進捗し十月十九日の頃は二龍山東鷄冠山に對する作業は敵壘前五十米突の地點に接したるを以て、敵は必死之が妨害に努め爲めに作業頗る困難なるも我は固より之に屈せず着々進歩したり、二十四日の夜の如きは二龍山の敵は魚形水雷の頭部二個を發射して我作業を攻撃せり、陸戦に魚形水雷を使用したるは古來の戰爭其例なし蓋し之を以て嚆矢とす、

第二回の總攻撃

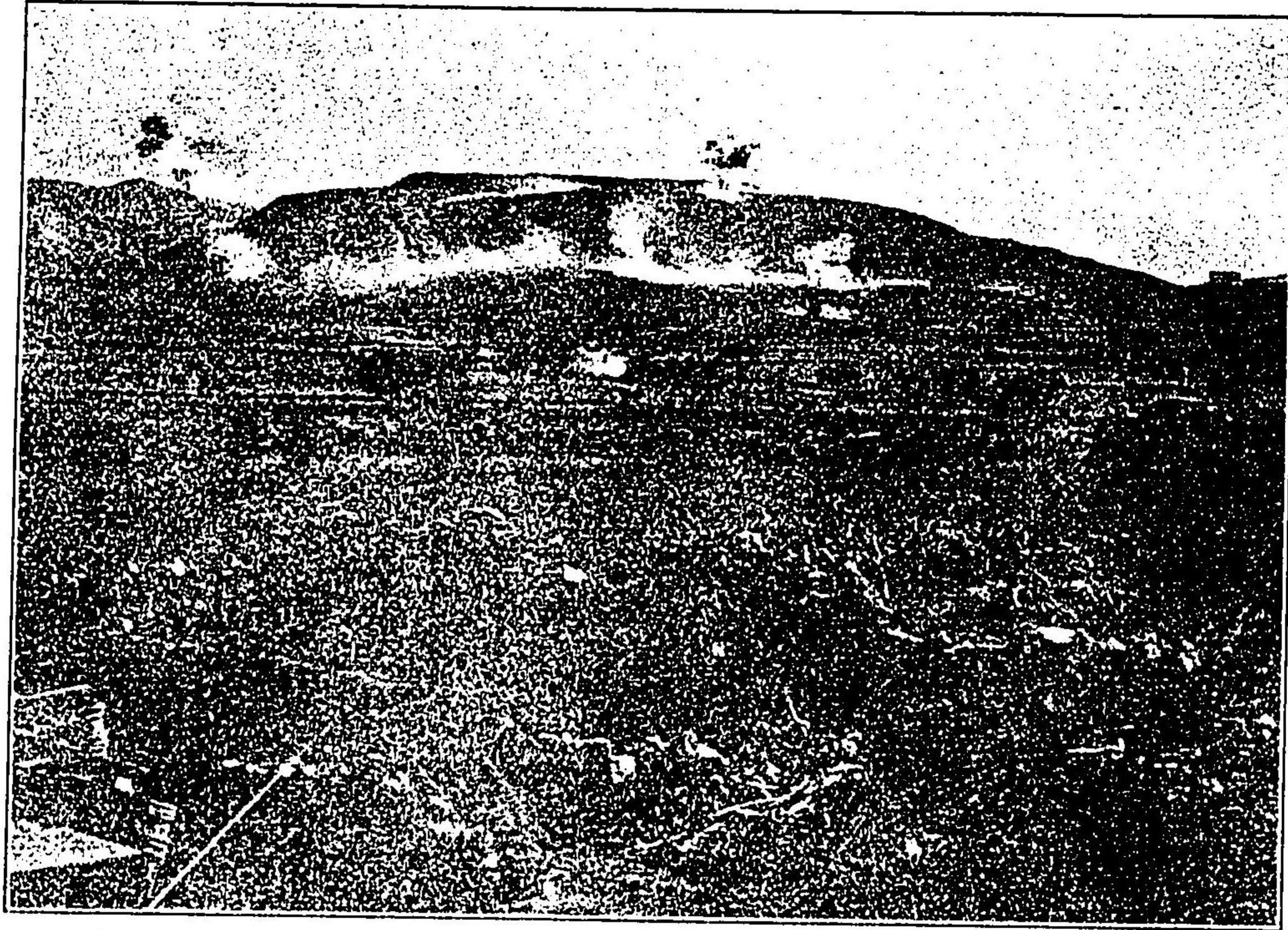
十月廿五日攻圍軍司令官は左の命令を全軍に傳へたり、右縦隊は廿六日午後五時を期し先づ松樹山前面の散兵壕を占領し、次て砲撃の奏効を待て松樹山を占領すること、中央縦隊は廿六日午後五時を期し、二龍山前面の散兵壕を占領し、次て砲撃の奏効を待て二龍山を占領する事、左縦隊は砲撃の奏効を待て直ちに東鷄冠山以東の砲臺を占領すること、三縦隊の各目標地點に對する歩兵突撃の時期は更に命令すべし、砲兵隊は各豫定の位置に在りて砲撃を開始し同時に牽制



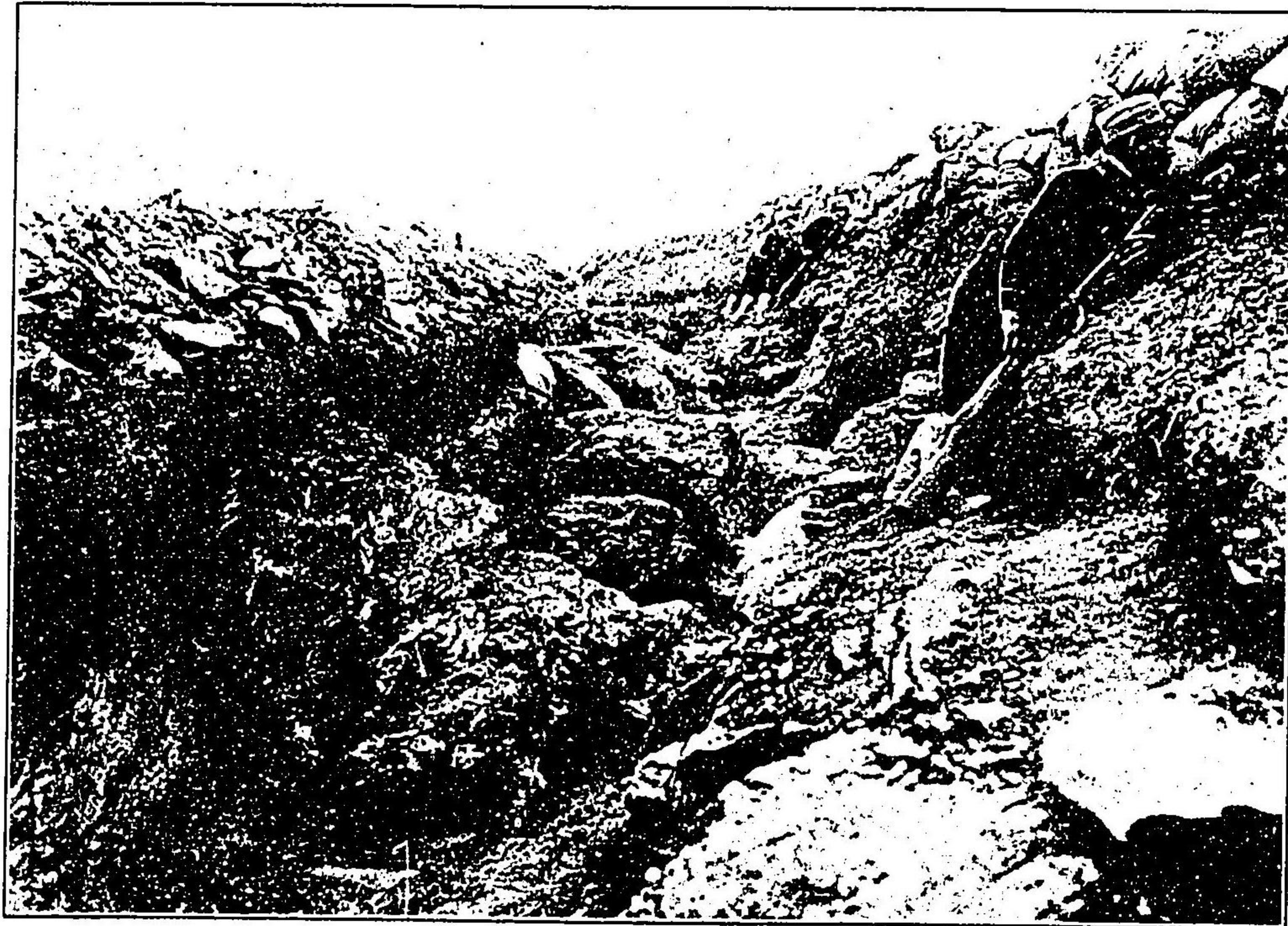
鉢巻山砲臺に我歩兵第七聯隊第二大隊の一部突撃の光景
明治三十七年十月十六日



二龍山砲臺復舊内に於ける敵の重砲破壊の光景



二龍山砲臺直前の塹壕に向ひ我歩兵第十九聯隊の一部突貫の光景
明治三十七年十月廿六日



東鶴冠山砲臺に向ふ我對壕第三歩兵隊地内の光景
(最も敵に接近せる歩哨)
三十七年十月廿六日

運動を執る事、東鷄冠山、松樹山、二龍山、二百三高地に對する我攻路は、慘憺たる苦心の後已に何つれも敵前數十米突に迫りつゝあるなり、

三縦隊の攻撃地區は定まりたり、於此十月廿六日午前八時三十分を以て我大口徑砲は先づ敵壘に向て一發を加へて總攻撃を宣告したり、全線の各陣地に在る幾百門の大中小口徑砲并に海軍砲は松樹山、東鷄冠山、北砲壘、中央砲壘及ひび砲壘に向て連々轟々砲火を集注するや、敵亦應戦す天地爲めに鳴動す、我砲火は照準正確瞬時にして二龍山砲壘の胸壁及掩蔽部を破壊する甚だし、殊に松樹山砲壘は其咽喉部の掩蓋二個を破壊し、十五珊砲一門を顛覆し、一門に多大の破壊を與へ、東鷄冠山北砲壘の十五珊砲一門亦た破壊したり、此砲撃に依り我砲の命中弾は二百五十發、海軍砲亦松樹山砲壘に多數の命中弾を送りたり之れ午前中の事に屬す、

午後二時より更に砲火を開き午前に倍するの威力を以て松樹山、二龍山の砲壘前面の斜堤に在る散兵壕及ひ鉢巻山南部の敵壕に大破壊を與へたり、午後五時に至り突撃の機は熟せり、全線大突撃の命令は軍司令官より下れり、於此三縦隊は各豫定の攻撃目標に向て海嘯颶風の如く突撃す、敵は此猛威に恐怖狼狽して松樹山前の散兵壕に六十、二龍山前にも同數の死屍を遺棄して砲壘内に潰走したり、散兵壕の敵は潰走し其壘壕を占領さるゝや附近砲壘は固より西太陽溝西方高地及假頭山、黄金山、白玉山、嶮嶮嘴等の各砲壘よ

りも我突撃方面に向て砲火を集注し來りしかば、我砲撃と相和し砲彈炸裂の光景は壯絶快絶なりし然れども敵彈は有效と認むべきもの甚た少く、且つ敵は二龍山砲壘の斜堤に於て、大地雷を爆發せしも時機を得ざりし爲め我兵一名も之に罹らざりしは天祐なるべし、戦闘は日没に至り中止し、我軍は全線の占領陣地を確實に保持したり、

同夜又攻城砲及海軍砲は敵の修理作業を妨害する爲め二龍山、東鷄冠山、同北砲壘及松樹山に向て攻撃し、尙ほ港内の敵艦機器局を砲撃したり、

同夜敵は銃砲火の掩護を以て松樹山、二龍山の我占領壕に向て數回逆襲し來りしも悉く撃退したり、

此日の突撃戦に於て敵壕を占領し且つ敵の砲壘及ひ市街に損害を與へたるは此の如く多大なりしも之か爲め我軍の受けたる損害は死傷約四百四十餘内將校二十二名に過ぎざりし、

大口徑砲及海軍砲の威力

敵壘破壊旅順の大火災

明くれは二十七日我軍の砲威は愈々猛烈となり海軍砲と共に松樹山、椅子山、案子山、白玉山、二龍山、東鷄冠山、造船所及敵艦を攻撃せり、其効果益々偉大にして東鷄冠山砲壘に於て砲車一輛を破壊し、二龍山砲壘の北正面東端より中央に至る間の歩兵踏架を破壊し、掩蓋を飛散せしめ、二個の輕火砲を毀損し、東方正面の砲一門を破壊し、又同砲壘の東南隅角に數發命中して掩蓋を破壊し、其附近に在りし機關砲

二門を飛散せしめ、松樹山砲臺に於ては凸角部の砲一門を傾斜せしめ、左翼面中央部に在る十二瓏加農砲一門を毀損し、又掩護部及掩蓋を破壊せり、夜に入り東鷄冠山北砲臺凸角部外岸砲臺の一部を破壊したり、我大口径砲及海軍砲の砲撃は翌廿八日も續行せり、其結果は益々良好にして二龍山、松樹山、東鷄冠山砲臺に對する命中弾は、二百八十五發其他案子山、椅子山、二百三高地、白銀山及白玉山等にも各若干命中したり、海軍砲は主として西太陽溝、椅子山、案子山、東港内軍艦及新市街を攻撃せり、其効果亦た顯著なりし、兩砲種攻撃の効果は概要左の如し、

二龍山（敵は前日破壊せられたる歩兵踏梁の一部に土叢を併列せり）は歩兵踏梁、堡壘内の構築物を破壊し咽喉部に少からざる損害を興ふ、

東鷄冠山北砲臺は焚藥庫を爆發し東鷄冠山砲臺は咽喉部西側の野砲一門を飛散し松樹山は掩蓋を有する十二瓏米加農一門及咽喉部砲一門に命中す、

椅子山は十二瓏米加農一砲車を顛覆し一砲車を甚だしく傾斜せしめ砲の高地堡壘は掩蓋二ヶ所、鐵條網及散兵壕の若干部を破壊せり、

西太陽溝北砲臺にも備砲其他構築物に少なからざる損害を興へたるが如し、

旅順舊市街には火災を起せり又た第二回の火災は黄金山西北麓の製造所にして延焼三時間に及べり

夜間も例に依り旅順港内機器局を砲撃し又た我對壕作業の

援助射撃をなせり、十月二十九日本日は各砲の發射弾數を増加して砲撃を續行せり、

此日未明約百名の敵は二龍山の我攻路頭に向ひ逆襲し來りしが多大の損害を興へて之れを撃退せり同時約百名の敵は松樹山の我攻路に向ひ猛烈に逆襲し來り我守兵最も勇敢に之れを拒守せしも終に其の一部を失へり而して午後二時頃砲兵の協力を得て一舉に之を奪還せり、

二龍山の攻路は前夜外岸に達し其の一部を爆破せり、東鷄冠山北砲臺東角の外岸砲臺には前夜更に二回爆發を行ひ巨大の破壊孔を穿ち砲臺内に在りし數十名の敵を殲せり、

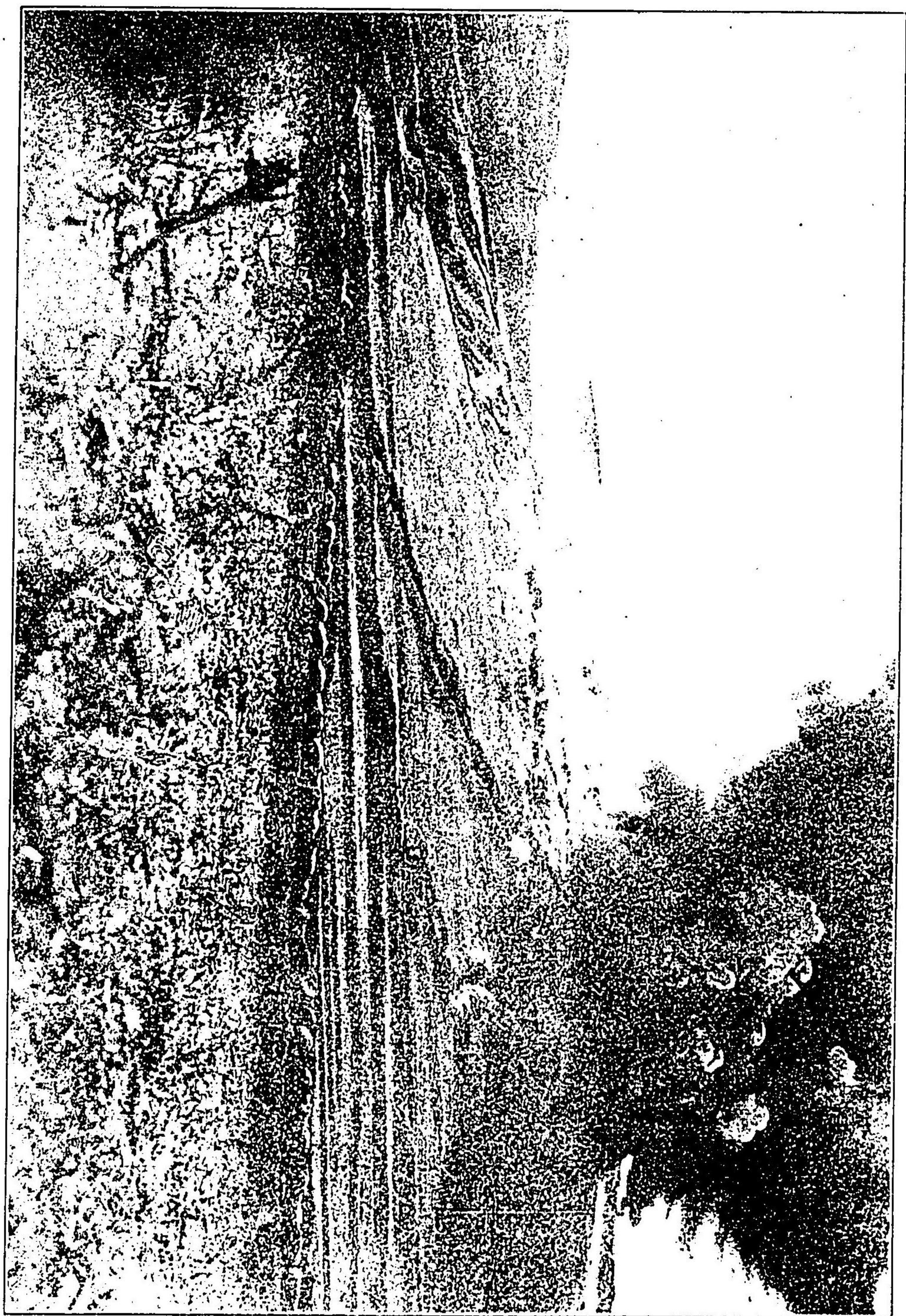
砲撃の成果は益々良好にして大口径火砲の命中弾三百五十に達し其の他輕騎砲高砲臺、椅子山、白銀山及各中間砲臺等に少なからざる損害を興へたり、

海軍砲は西太陽溝、椅子山、案子山、穀前軍左營、白玉山、松樹山を射撃し西太陽溝の焚藥庫を爆發せしめ又西港内南側に附著繋留せる掃海艇五隻を砲撃し其三隻に大損害を興へ内二隻に火災を起さしめたり、

他の攻城諸砲は午後一時半より支那圍壁及堡壘間隔の砲臺散兵壕を砲撃せり

坑道内の一慘事

我軍の坑道作業は愈々進歩し、十月中旬に至りては敵壘下五六米突前迄穿進したれば、敵も亦防禦坑道を掘進し、彼等の坑道は刻一刻に接近し東鷄冠山北砲臺に對する坑道の穿きは、十月十九日に至り愈々接近し、敵の坑道作業の穿



東鷄冠山北砲臺砲臺を破壊したる光景

音明かに我が耳朶に達し、而て其坑道は我坑道の下部にあるを知りしを以て、我は更に枝坑道を穿ち敵坑を爆發せんと期し作業中同日午後零時過ぎに至り、俄然我坑道作業の前頭に小徑の穴口を生せり、怪みて之を見ればコールターの臭氣甚たしく必然敵の爆薬なるを知りしかば、之に對する處置を取らんとする一刹那、爆薬は轟音と共に土石を噴飛し爲めに我作業手たる工兵三名壯烈なる戦死を遂げたり、此爆發の爲め我坑道は破壊せしを以て更に他の方面に向て坑道の掘進に着手したり、

側防窠の爆破

東鷄冠山北砲臺に對する我左縦隊の作業坑道の一は不幸にして爆破せしも、同砲臺に對する他の坑道作業は大成功を以て、砲臺外岸の側防窠に達したれば何んの猶豫かあらん、直ちに裝藥點火せしに濂然たる大爆音は、大地を震動して窠の上部を破壊すること方一米突窠内に在りし、敵は愕驚恐怖を極め悲鳴を上げて逃走し、於此工兵は大膽にも第二回の大爆破を爲し大成功の下に外岸側防の窠を占領したり、他の坑道より進みたる工兵亦二十八九の兩日を以て、數個の大爆破を爲し、窠内の敵を殲滅して是亦大成功を博したり、對壕及坑道作業の困難なるは已に述べたるが如し、況んや旅順の如き岩石地層に於て作業するをや、然るに其困難の甚たしき丈其れ丈其成功したる時の愉快は更に一層の事なりしなり、

第三回總攻撃

我軍の對壕及坑道作業は愈々進歩し、大口徑砲并に海軍砲の威力は益々顯著なり、於此十月三十日を期し第三回の總攻撃は開始されたり、同日天未だ全く明けざるに當て一發の砲聲は中央縦隊の陣地附近に起りて開戦を宣告す、全線の砲煩之に依り一齊に砲火を開きたり、前日迄の砲撃は重砲海軍砲のみなりしも、這般の砲撃には大口徑砲海軍砲は固より野砲、山砲、迫撃砲、機關砲等皆な參加し、敵亦屈せず各砲臺より應射す、彼我の砲響爆聲股々轟々鐵火縱横砂塵濛々壯絶凄絶天柱爲めに確け地軸爲めに裂けんとす、此日歩兵の突撃開始は午後一時の豫定なり、其攻撃地區の部署は左の如し、

左縦隊は東鷄冠山北砲臺、同中間砲臺、吉永砲臺（吉永の名後に附す）同砲臺の南方瘤山砲臺其後方のH砲臺、砲臺M砲臺I砲臺を奪取を目的とす、

中央縦隊は二龍山砲臺P砲臺H砲臺望臺及其後方高地砲臺の奪取を目的とす、

右縦隊は松樹山并に二百三高地砲臺其後方高地の一帯の奪取を目的とす、

右縦隊中の一枝隊は後三羊頭村北方高地の砲臺を奪取るに在り、

三縦隊の突撃時機は午後一時にあるを以て、砲兵隊は午後零時三十分頃より榴散弾をも發射して一層猛烈に攻撃を加ふ、廳て午後一時は來れり、

大突撃の開始

各方面敵前の平行壕攻路に在りし、我歩兵の全線突撃隊は、猛然として躍出敵の猛烈なる機關砲火と小銃火を浴びつゝ、奮撃突進敵壘に肉薄す、其勇猛壯烈なる光景名状す可らず、敵も勇敢に殊死して一步も退かず益々猛射抵抗す、

中央縦隊

鐵條網の破壊

作業隊より撰拔せる工兵決死隊は三方面より、驟雨の如き敵火を冒しP砲臺下の鐵條網破壊の爲め猛進し二方面は見事に破壊の功を奏したるも、他の一方面なる最緊要の鐵條網は敵火の爲め成効するに至らず、因て更に十二名の工兵決死隊を撰出し、鐵橋を持ち爆薬を携へ猛進せしめたるも、是亦不幸悉く負傷して目的を達せざりしも、此時朝來猛烈なる我砲撃の爲め敵の散兵壕は大破壊を蒙り、敵火稍々沈黙せしかば、我作業隊は此好機に乘し午前九時三十分更に工兵を派したるも、亦目的を達せず、斯くすること四たび最後の大膽極まる工兵の爆薬装置は見事に成功し、天地も摧裂せん大爆撃を發し、約五米突の鐵條網は破壊せられ一道の突撃攻路は開きたり、此大膽なる作業の成功したるときは我將士皆な覺へす萬歳を絶叫したり、去れど五米突の破壊突撃行路としては十分なるにあらざるを以て、勇敢決死の工兵三名更に猛進して爆發せしに、是亦見事に成功して五米突を爆發し、茲に十米突の攻路は開かれたり、

P 砲臺の占領

(一ノ戸砲臺と命名す)

P 砲臺への突撃は單獨にて之を實行するときは、隣接の東鷄冠山北砲臺より猛烈なる側射を受くべければ北砲臺突撃と聯繫するの必要あり、依て豫め之か計畫を爲したり、三十日午後一時過ぎに至り聯繫すべき東鷄冠山北砲臺突撃の左縦隊右翼部隊より一ノ戸少將の率ゆる中央縦隊の左翼部隊に向て、北砲臺突撃の旗號を爲すや、時機の來るを待ちたる突撃隊長は、一聲突撃を令せしに豫定の二個中隊は阿修羅の如く巖に破壊せし鐵條網を越へP砲臺に突撃し、午後一時四十分敵を驅逐して砲臺を占領したり、然るに此時聯繫して北砲臺に突撃したる右翼隊は頗る苦戦に陥り、退却するの已むを得ざるに至りし爲め、敵は北砲臺より我が占領したるP砲臺に向て猛烈なる砲火を集注し加ふるに其砲火掩護の下に敵は壘壕奪還の目的にて數回逆襲し來り爆薬を雨下し、爲めに一時は頗る危険なりしも我兵能く防戦悉く之を撃退したるに同夜十一時三十分に至り恐るべき優勢なる敵は猛烈に逆襲し來り、盛んに爆薬を投し一舉に奪還せんと期し、我れは別に工兵なく爆薬を掃除すべき方法砲彈を防ぐべき工事も爲し得ず、去れど殊死奮戦極力防戦したるも、將校の多數は殞れ、携へし爆薬は盡き、銃彈亦た缺乏し、白兵戦を爲さんか、敵は我に數倍する優勢今は如何ともする能はず、悲憤切齒して舊陣地に退却するの已むを得ざるに至れり、

一ノ戸少將の奮戦

我突撃隊退却の悲報一ノ戸部隊長に達するや、少將は憤慨

措く能はず、奮然躍起更に一個中隊を増援し自から最先の散兵壕に募進して白刃を揮ひ諸隊を叱咤指揮せしに、士氣大に振ひ奮進大突撃を爲せしに其猛勢には頑強の敵も遂に抵抗し得ず、多大の損害を被ふりて潰敗せり因て確實に之を占領したり、砲臺は此の如くにして我有に歸したり、一ノ戸砲臺の名は日章旗と共に中外に赫耀せり、

二龍山砲臺の攻撃

二龍山に向ひたるは中央部隊の一大隊にして其歩兵の一部隊は突撃に先つて、工兵隊と共に敵火を冒し突撃行路の開發に着手し、死傷續出するにも拘らず砲臺斜頂二十九米突前に猛進して鐵條網を破り突撃路を開くや、第一線突撃隊は此攻路に依り彈雨を犯して斜頂に突貫して之を占領す、午後五時過る頃には突撃隊の全部猛進して防禦陣地を急造し占領を確實にし更に戰機の熟するを待てり、我砲兵は必死となりて突撃時機を作り出さんと努めたり、

地雷の爆發

二龍山は松樹山と共に敵の咽喉と恃む所從て其防備一層嚴重なり、敵は我兵斜頂に突撃し來らば其掩蓋壕下に埋没しある地雷を爆發せんと企圖したるに、我兵の突撃急なりし爲め其機を失し反て我兵の發見する所となり、我兵の手に依り爆發し盡したるは一快事なりき、

敵の奪還企圖

我兵二龍山前の斜頂を占領するや、敵は砲臺上新たに數門の機關砲を据へ猛烈に掃射するのみならず盛んに爆彈を投

して我を撃退せんと努む、爲めに我兵頗る苦戦し其慘狀云ふ可らざるも屈せず、益々防禦工事を施し一層占領を確實にしたり、

松樹山の攻撃

松樹山砲臺の攻撃は中央縦隊の右翼部隊の一部と、中村少將の率ゆる右縦隊左翼部隊なり、三十日午後零時三十分砲撃の効果大に顯はれ突撃の機熟するや、掩護砲は更に砲臺に向て猛撃し外壕破壊の任を有する工兵隊は爆薬を提げ攻路を躍出鐵條網を破り外壕の外岸に達し爆薬を投したるも十分の目的を達するに至らず、於此攻路作業班の工兵は二個中隊相共に土囊を携へ外岸に向て奮進せしに松樹山砲臺よりは狙撃し、二龍山、案子山、椅子山よりは砲撃し、前進頗る困難なりしも勇往邁進外壕に達し土囊を投し敵壘に攀登を試むこと前後三回に及しも敵の砲火と擲彈とに遮られ目的を達する能はず、時に午後一時十分此光景を目撃したる第一線の突撃隊は、猛然攻路を躍出して工兵班と共に突進して外岸に達するや、後續の突撃隊亦た外岸に達したるを以て壕に入り、敵壘に突撃せんとするも壕深く石壁直立して入るを得ず、已むなく掩護堡を急造し斜頂に停止して戰闘を繼續せしも、敵の瞰射と擲彈の爲め死傷者續出す、續て第三線の突撃隊募進し他の掩護隊と砲兵隊とは敵に向て猛射したるも戰局發展せず、加ふるに我か損害は益々多大となりしを以て已むなく外岸に散兵壕を急造し之を固守して突撃を中止したり、

左縦隊の攻撃

東鷄冠山諸砲臺、吉永砲臺、嶗山砲臺に向ひたる左縦隊は竹内少將の率ゆる總豫備の一部を牽制隊と爲し、中央部隊の指揮は前田少將右翼部隊の指揮は山中少將にして、右翼隊は東鷄冠山に左翼隊は嶗山に向ひ別に一個聯隊を總豫備と爲し、各部隊は二十九日對壕攻路に依り各其目標とする敵壘前百乃至百五十米突の距離に達し突撃陣地を作成したり、同日午後七時東鷄冠山東南堡壘即ち吉永堡壘（第一回攻撃の際吉永少佐此地に於て苦戦したる爲め此名あり）、前に在る右翼隊は斥候をして敵情を偵察せしめしに堅牢なる側防穹密あり、外壕を越るには先づ之を破壊するの必要あるを認む、之を破壊する容易の業にあらず、於此一隊の歩工兵より架橋班を編制し猛進せしめしに、敵の爲め直ちに破壊せられて目的を達する能はず、只た壕を隔て、射撃を交換するのみにて戦況は更に發展せずして夜を徹するに至りたり、

敵の逆襲と攻撃中止

明くれば二十日午前四時過ぎ東天紅を呈するの頃五十餘の敵は、我右翼に二十餘は左翼に向て逆襲し來りしも我兵之を撃退し、右翼に來りし敵は二十餘の死屍を遺棄して敗走したり、然るに前記の如く敵の側防穹密堅牢にして強襲にては到底奪取の目的を達成する能はざるを以て攻撃を中止し、更に坑道作業に依る事に決定したり、

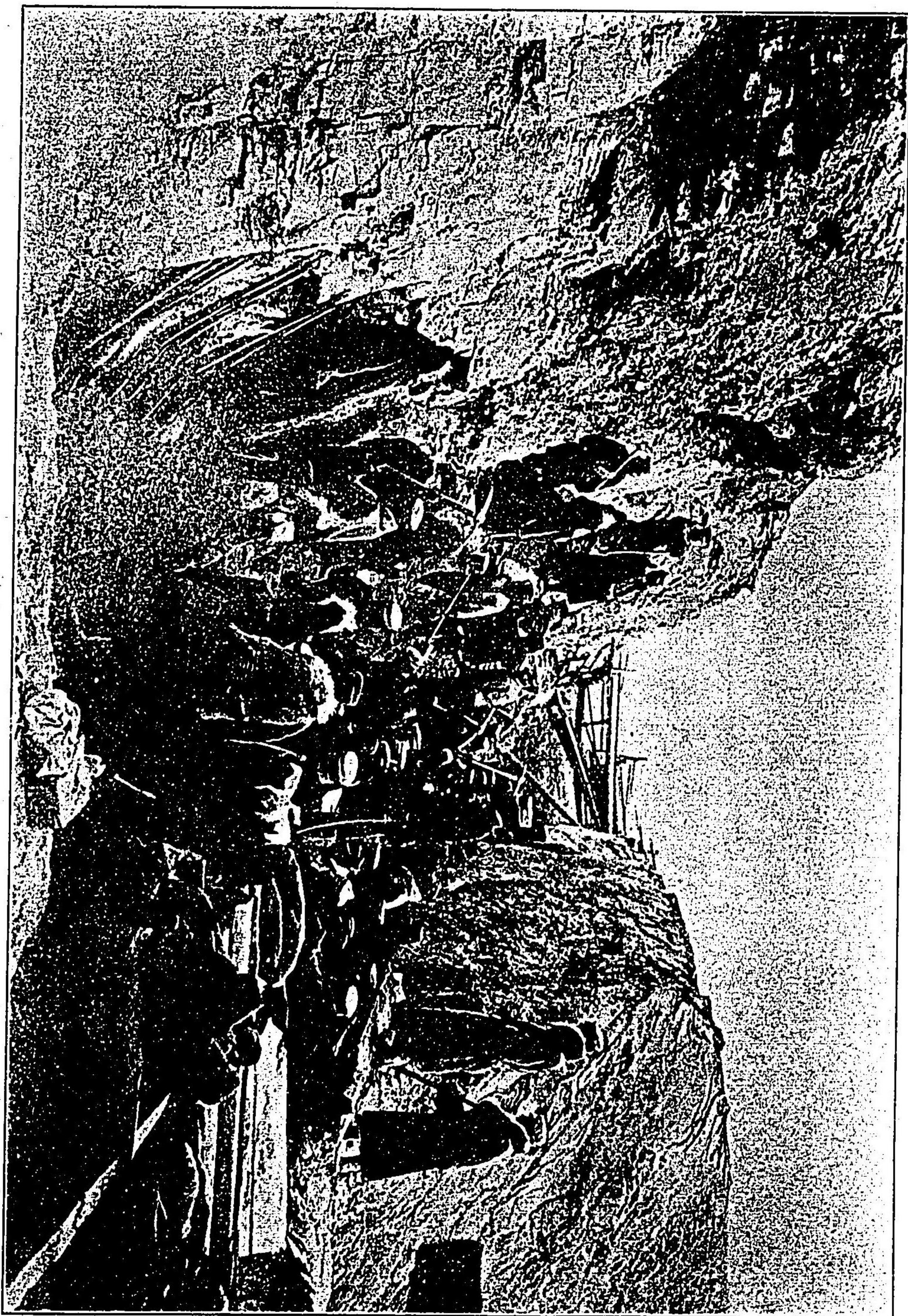
東鷄冠山北砲臺の攻撃

突撃隊の悲惨

已に其外岸穹密の一部を占領したる東鷄冠山北砲臺に向ひし二個中隊の突撃隊は先づ破壊工兵班をして殘る穹密の破壊に當らしめんと計畫し、於此工兵班は三十日午前六時外岸に向つて邁進したるに、敵は極力之を射撃して破壊作業を妨害するも我工兵は殊死して其作業を全ふし直ちに爆破して完全なる攻路を開きたり、依て突撃部隊長は赤穂義士に倣ひ四十七名の決死隊を編制し、工兵一部隊之に屬す午後二時に至り突撃の機は熟せり、決死隊は對壕を躍出無二無三に斜堤に攀登す續て他の突撃隊亦た邁進するや、胸墻に在る敵は正面より比隣砲臺は側背より銃砲火と爆薬を猛射投下し、爲めに突撃隊は十字火に陥り殆んど全殲せらる、噫壯烈、噫悲惨突撃隊の悲惨夫れ此の如し、今は已むなく突撃を中止せざる可らざるに至れり、

斜頂面を占領す

翌三十一日砲兵掩護の下に第二回の突撃を斷行せん計畫にて機の熟するを待ちしに、偶々決死工兵の穹密を爆破し突撃攻路開かる機は來れり、突撃隊は一氣呵成に此破口より闖入して外壕内に竊進し、胸墻に攀ち再び猛烈なる爆薬戦を爲したるも、不幸にして我携帶の爆薬缺乏したると比隣砲臺よりの砲火劇甚なるとに依り、我兵の大半之に殲れたる爲め血涙を吞んで斜頂面に退却し之を占領して敵の猛火



東鷄冠山北砲臺方面に對する對壕作業工兵班の光景

に浴しながら防禦工事を急造し確實に之を占領したり、此時十一月一日午前三時半なりき。

瘤山占領

左縦隊中央部隊の一部隊が向ひたる瘤山は東鷄冠山の西北方に突出する一高地にして、東鷄冠山砲臺及同北砲臺攻撃に對し少なからざる障害を與へたる敵壘なり我軍の爲めには目の上の瘤の如し依て此稱あり之を攻略する固より必要なり、依て突撃隊は十月三十日砲兵掩護の下に之を攻撃する事となり、午後一時先づ破壊班の工兵は對壕を突出するや、先頭突撃隊續て突出鐵條網に達し工兵之を破りしに、敵は猛射して抵抗し我兵之を冒し勇往邁進敵の散兵壕に突撃し、潰走の敵を追撃し一氣壘上に突入して之を攻略すると同時に西方斜面の敵を驅逐せしに、敵は頑強後方の溪間より逆襲し來りしを以て直ちに之を撃退して占領を確實にし、日章旗を樹て萬歳を絶叫したり。

東鷄冠山砲臺の攻撃

瘤山攻撃と聯繫して東鷄冠山砲臺突撃の任に當りたるは、左縦隊中央部隊の一個大隊にして工兵隊若干之に配屬し、而して三隊に區分し、二隊は正面より他の一隊は西南の側面より突撃し、更に一個大隊をして掩護に任せり、三十日午前八時各隊對壕内の陣地に着するや、砲兵は敵壘に對し砲火を開きしに、敵壘應射砲戰激烈我砲の照準頗る正確砲臺に暫壕に着々命中し、其威力猛烈、掩護歩兵の射撃亦た激烈なりし爲め砲臺下の暫壕に據りたる敵は我銃砲火の威

力に恐れて砲臺内に退却す、突撃隊之を見るや午後二時雨下する猛火を冒し吶喊して敵壘に突進肉薄したり。

敵壘に攀登す

敵の射撃は益々猛烈なるも決死の勇士何んの猶豫かあらん、第一突撃隊は猛然として敵の砲臺に攀登したるに、嗚呼残念殆んど殲滅さる、第二突撃隊續て攀登し直ちに國旗を壘上に立て萬歳を唱ふ、此時砲臺の咽喉部に在りし敵の海兵約三十名は我が兵の勇猛なる動作に避易し後方に退却したれば、我第二突撃隊は突進其咽喉部を占領し、後方圍避に據れる敵に對し射撃中比隣砲臺よりの猛火集注瞬時に大部分死傷し、咽喉部の守備困難なるを以て前に占領せし砲臺に退きしに未だ後續隊の來着せざる前、優勢なる敵は逆襲し來りたり、此時我兵頗る少數なりしも屈せず慘烈なる格闘を爲し撃退に努めたるも衆寡敵せずして退却したり、西南の側面より突進したる第三突撃隊は先づ前面の圍壁に據る敵に向て突進せしに頑強に抵抗したるも之を撃退し砲臺に突進したるも、時機已に後れ第一第二突撃隊已に壯烈慘烈なる惡戰を爲し退却したる後なりしかは、第三突撃隊亦た苦戰し目的を達する能はずして退却するの已むを得ざるに至りたり。

突撃隊と共に登進したる工兵隊は殊死防戦の敵火を冒し爆弾を以て機關砲を破壊し、敵の砲手數名を殲滅し、進んで砲臺に達し、慘烈なる格闘を爲し、大口徑砲二門中口徑砲二門を破壊したるも歩兵突撃隊の狀況此の如くなる爲め遂に東鷄冠山の攻略は未だ成功するに至らずして了りぬ。

右縦隊方面

二百三高地の攻撃

二百三高地の攻撃は依然右縦隊の右翼部隊にして中央部隊之を援助協攻す、然るに此高地は已に述べたる如く旅順背面の聯樂砲臺の最左翼(敵の位地より云ふ)にして各砲臺を瞰制するのみならず敵の本據とする市街及び敵艦の隠匿する地點をも瞰視するを以て敵は之を攻略せらるゝときは、全く旅順の死命を制せらるゝものなれば最も堅牢なる砲臺を築造せしのみならず、幾線の掩蓋塹壕幾條の鐵條網其他あらゆる副防禦を構設し、多數の兵力を集中して死守したり、故に我軍二回の攻略を試みたるも遂に目的を達するに至らず、因て爾來益々正攻法に依り對壕作業を進め、今や其大部を構築したるを以て茲に第三回の攻撃を爲すに至りたり、二百三高地の防備の堅牢なるを此の如し、依て今第三回の攻撃を爲すに當り我軍の第一に困難を感じたるは其前面なる我攻路に横はる鐵條網なり、之を破壊せざれば攻路開けず、然るに其の鐵條網の在る地點は敵前僅か十二三米突なるを以て部隊長以下之が破壊に苦心慘憺を極む、偶々一奇計を案出す、

鐵條網破壊の奇計

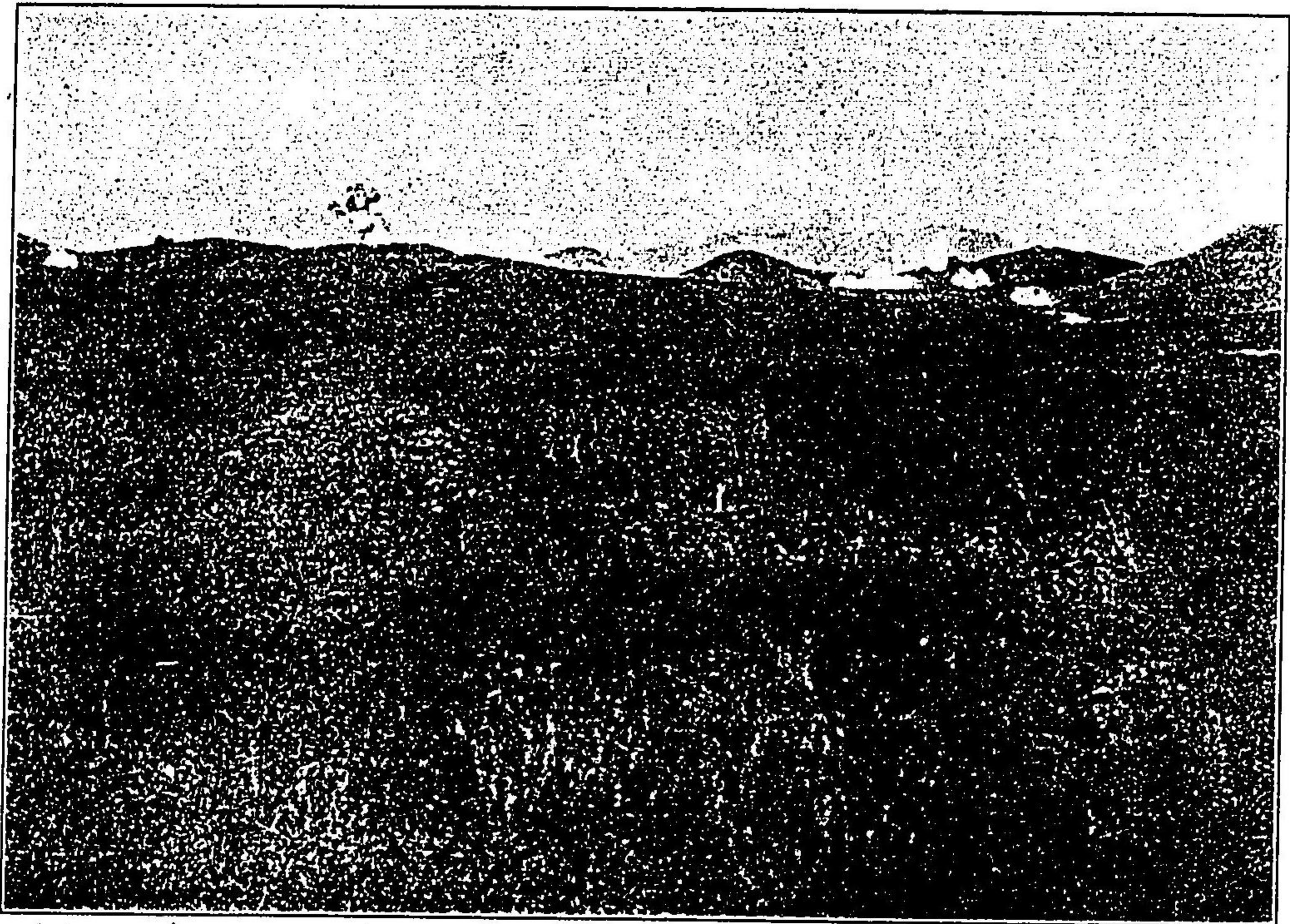
沈勇豪氣の二兵卒を撰拔し敵眼を遮蔽する爲め、カーキ色の服装を爲さしめ、匍行を便にする爲め、唐米袋を膝頭に纏綿せしめ、太き麻繩の一端を腰に結び他の一端を我對壕中に殘し、苟かに敵眼を忍び匍匐して敵情を窺ひつゝ、鐵條

網に近づき、其砲臺せんとする部分の鐵條網の周圍を一周して携へたる麻繩を巻き附け無事歸壕す、部隊長初め一同

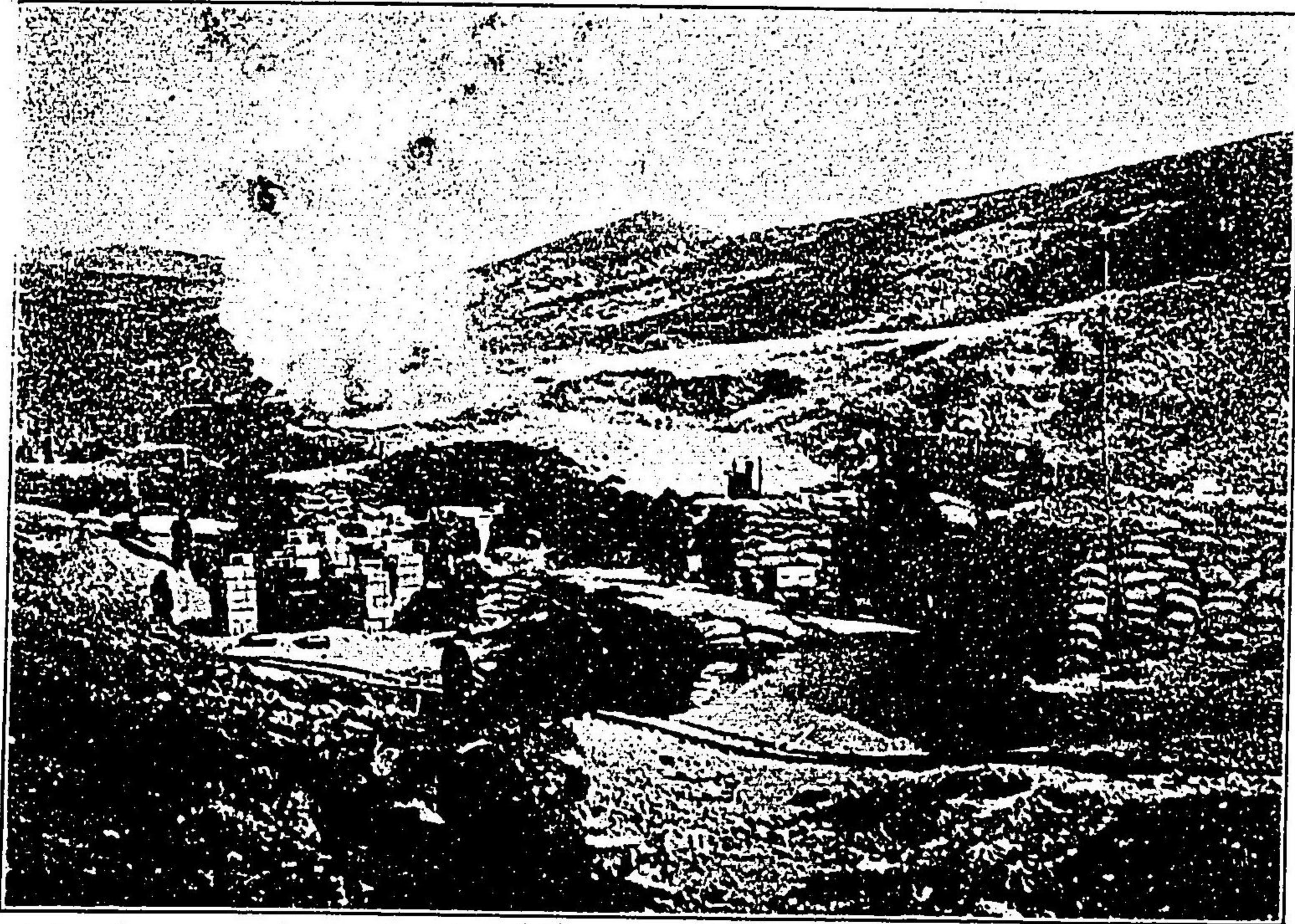
嘆賞して措かざりき攻撃の時期は三十日午後一時と定まりたれば突撃部隊長は前夜各隊の將士を集め訣別の宴を張りたり、明くれば三十日午前九時突撃の準備砲撃は般々轟々と起り、之を合圖として前夜鐵條網に結び附けたる繩を引けば十米突餘の鐵條網は全く破壊し攻路大に開發したり、敵は之を自撃し狼狽して猛射したるも、我軍未だ躍出せざる前なれば更に其効なかりしは一笑に價ひせり、砲戦十時に至り我巨砲の威力大に顯はれ敵砲は遂に沈黙し獨り銃射のみ依然激烈なりしも十一時に至り亦沈黙したり、

突撃開始

時針午後一時を指す突撃の時機は來れり、突撃隊の將士は奮然として躍起せり、第一線第五中隊の突撃隊は右方に第六中隊の突撃隊は左方に向て對壕を躍出して敵壘に蕩進す工兵一部隊亦た共に蕩進するや、第二第三第四の突撃隊は之に次きたり、之より先き決死の搜索兵三十餘名工兵二分隊に斧梯子鐵條網の諸材料の外爆彈、石油罐、及脚筒を携帶せしめて先頭突進せしめ、皆な敵壘下の死角に肉薄せしむ一條の導火索を發見したるを以て之を切斷し、土囊を破り、木製の掩蓋二ヶ所に石油を注ぎて之に放火焼毀せしむ、此の壯烈なる行動を目撃したる第一突撃隊は疾風の如く敵壘に肉薄せしむ、敵は小銃、機關砲、石礮、擲彈あらゆる防禦物を猛射投下して抵抗せり、之れが爲め右方先頭の突撃隊は多大の死傷者續出し、後續の突撃隊亦た敵壘前二十乃至三



松樹山砲臺内火災を起したる光景



礮臺溝南西約六百米突に於ける榴散砲發射の光景

十米突の地點に肉薄せしも、敵の猛射の爲め今は寸進するを得ず頗る苦戦す、左方に向ひたる第六中隊の突撃隊亦た外壕に突進したるも壕深く幅廣くして突入する能はず、最左方の突撃隊亦た敵壘に達せしも優勢なる逆襲に遭遇し苦戦を極む、全線の我軍夫れ如此く苦戦す突撃陣地に在りし突撃大隊長は自から豫備の二個中隊を提げ突進増援したるも敵の機關砲、小銃、爆彈益々猛烈にして大隊長以下幹部の將校概ね殞る、

隊長殞れたるも兩中隊は如何んぞ之に屈せん、先頭隊に協力し決死奮戦猛闘したるも戦局は發展せず、此壯烈慘烈なる形勢を見たる友安右翼部隊長は已むを得ず攻撃を中止し、更に再舉の期を待つに決したり、於此殘餘の突撃隊は遺恨血涙を呑んで夜に入り肅々として對壕内の舊陣地に歸りたり、

第三回の總攻撃は茲に一段落を告げたり、第四回の攻撃計畫は直ちに軍司令官に於て講せられたり、

大口徑砲及海軍砲の威力二

攻圍軍第三回の總攻撃中、十月三十日及び三十一日兩日間、に於ける、攻城重砲及海軍砲の攻撃效果は左の如し、十月三十日午前八時頃より海軍陸戰重砲隊及び大口徑砲の射撃開始せらるるや、大案子山及小案子山背後の有烟臼砲は盛に應射したり、午前七時より先づ松樹山砲臺に向て砲火を開始し、次で同補備砲臺小案子山大案子山及二〇三高地に向て射撃せり、午後六時三十分に至りて射撃を中止す、午後十時十五分より松樹山二〇三高地及び西太陽溝北砲臺に

向て終夜威赫砲撃を行ひ各數十發の射撃を送れり、當日各目標に對し午後六時三十分迄の發射彈及命中彈左の如し、

| (目標) | (發射彈數) | (命中彈數) |
|-------|--------|--------|
| 松樹山 | 一四五 | 一二一 |
| 同補備砲臺 | 四八 | 二六 |
| 小案子山 | 二三 | 一二 |
| 大案子山 | 二六 | 一七 |
| 二百三高地 | 九 | 七 |
| 計 | 二五一 | 一八三 |

松樹山砲臺に對しては其效力非常に多大なりと認む、其最效驗の著しき者は中央凸角の五十加農一門及西面胸墻の中央部及び其南端に於ける、有蓋を毀損し、木材或は被覆材料を盛に飛散し、特に其中央凸角後に於ける掩蔽部に命中せし時の如きは、其潜伏せし敵兵數人を一時に空中に飛散せしめたり、

十月三十一日朝來松樹山、椅子山敵前軍左營の敵砲臺は我が右翼の對壕作業に向ひ射撃せり、午前八時五十分松樹山に向て砲火を開始し、午後四時三十五分射撃を止む、午前八時四十七分二〇三高地に向ひ射撃を開き、午後十時中止す、午後零時十五分より東港内碇泊の敵軍艦に對し、散布射撃を行ひ、午後二時十分より敵の軍艦ギリヤーク號及び運送船に對し射撃を開始し、午後六時四十分射撃を止む、發射及命中彈數左の如し、

(目標) (發射彈數) (命中彈數)

| | | |
|----------|----|----|
| 松樹山砲臺 | 二六 | 二一 |
| 高地 | 六 | 四 |
| 敵の軍艦散布射撃 | 二五 | 未詳 |
| ギリヤーク號 | 一三 | 二 |
| 運送船(二隻) | 二八 | 一〇 |
| 計 | 九八 | 三七 |

松樹山砲臺にありては機關砲一門を破壊し、又掩蔽部に命散し、構造物を飛散せしこと數度に及べり、軍艦に對する散布射撃は其の成果を詳かにする能はざるも、第四發目に於て我射撃方向線内に盛に爆煙を上げ漸次濃密となり其勢猛烈を極む、是蓋し我砲彈の爲めに遂に火災を生ぜしならん午後六時四十分猶ほ儘ます最も烈く黒煙を揚ぐるを望みたり、軍艦ギリヤーク號及び運送船に對する我射撃は甚大なる偉功を奏せり、即運送船二隻を撃沈せしめ、砲艦ギリヤーク號に確かに二發命中せり、此射撃の間砲艦と運送船及び陸岸に赤十字旗植立せる小蒸汽船並に數隻の端舟彼れ是れ頻に往復頻繁を極む、察するに乗組員を救助せしものならんか、茲に最も遺憾なりしは日暮れし爲め砲艦ギリヤークの運命を判知するを得ざりしこと是なり、

午後七時三十分より松樹山砲臺に對し終夜絶えず緩徐なる夜間射撃を行ひ十四發の射撃を透れり、當日發砲せる敵砲臺は左の如し、

大案子山、小案子山背後の有煙白砲椅子山、松樹補備砲臺、黃金山等の諸砲臺とす、

第四回總攻撃

松樹山以東の諸砲臺に對する坑道作業は略ぼ完成を告げ新銳の第七師團は大迫將軍統率の下に攻圍軍に参加したり、於此第四回の總攻撃は十一月廿六日を以て開始したり、其軍隊區分は左の如し、

- 右縦隊 第七師團 縦隊長大迫中將
- 中央右縦隊 第一師團
- 中央左縦隊 第九師團
- 左縦隊 第十一師團
- 豫備歩團 攻城砲團 海軍砲隊

之より先き十一月廿三日を以て左の優渥なる 勅語は攻圍軍に下りたり、

勅 語

旅順要塞ハ敵カ天險ニ加工シニ金湯トナシタル所ナリ其攻略ノ容易ナラサル固ヨリ怪ムニ足ラス

朕深ク爾等ノ勞苦ヲ察シ日夜軫念ニ堪ヘス然レトモ今ヤ陸海兩軍ノ狀況ハ旅順攻略ノ機ヲ緩ウスルヲ得サルモノアリ此時ニ當リ第三軍總攻撃ノ舉アルヲ聞キ其時機ヲ得タルヲ喜ヒ成功ヲ望ムノ情甚々切ナリ爾等將

卒夫レ自愛努力セヨ

此勅語に對する乃木司令官の奉答左の如し、

奉 答

旅順要塞總攻撃ニ際シ 勅語ヲ忝フス臣希典等感激恐懼ニ堪ヘス將卒一般深ク 聖旨ヲ奉體シ誓テ速カニ軍ノ任務ヲ遂行センコトヲ期ス

謹テ奉答ス

司令官男爵 乃 木 希 典

此勅語を賜はりし夜山縣參謀總長は夢に旅順攻略を見る於此總長は左の一絶句を即吟し翌廿四日乃木司令官に而かも電報を以て示されたり、

百彈激雷天亦驚 合圍半歲萬屍橫 精神到處堅於鐵 一舉遂屠旅順城

乃木將軍此一絶に接し果して如何かの感懷ありしかは兩將軍の外何人も之を知るを得ず、

攻撃部署

右縦隊は中央右縦隊と協力して二百三高地及赤坂山、松樹山の諸砲臺及び其附近の高地一帯を攻略する事、

中央右縦隊は右縦隊と聯繫して松樹山及び二百三高地を奪取する事、

中央左縦隊は二龍山砲臺及望臺を攻略する事、

左縦隊は東鷄冠山北砲臺、東鷄冠山砲臺を攻略する事、

攻城砲及海軍砲は之を掩護して砲臺及旅順港内を攻撃する事、

十一月廿六日天明と共に我か全軍の大中小口徑砲并に海軍

砲は各其目標に向て砲火を開く歩兵の攻撃は午後一時と決定す、我が砲火に對し全線の敵壘亦た應射す、砲戰愈々猛烈股々轟々天地爲めに鳴動す、

松樹山砲臺の攻撃

松樹山は敵の咽喉部とする所、從て其防禦の堅牢なるは他の砲臺に優る、故に之に對する我攻撃法も亦た壯嚴なり、突撃隊の一部は對壕より砲火の掩護に依り突撃したるも敵軍殊死防戦せし爲め未だ十分の成功を收むるに至らず、

白禪決死隊の編制

然るに茲に中央右縦隊及び其他の各隊より撰抜したる獨立枝隊あり、之れ決死隊中の決死隊と稱せしものにして中村少將之を統率し、右縦隊よりの二個中隊及一個大隊は、渡邊大佐中央右縦隊よりの二個中隊は、山田少佐他の二個中隊は、大久保中佐之を率ひたり、勇名世界に轟きたる旅順の決死白禪隊之れなり、實に此白禪隊は決死中の決死隊にして其粉裝は各規定の軍服を脱し目標とならざる莫大小の防寒褌衣を着し、戰友たる目印の爲め各自布を禪と爲し全く一種の輕裝なりき、此一枝隊は松樹山補備砲臺の攻略を目的とす因て黎明を期してクロバトキン砲臺の北方凹地に集合せり、乃木司令官其集合點地に臨み嚴然として宣告して曰く、陸には敵軍の大増加あり海には波羅的艦隊の來航遠きにあらずらんとす、國家の安危殆んど我攻圍軍の成否に依りて岐れんとす、此時に當りて此獨立突撃隊の壯舉を敢行す、余は死地に突入せんとする此隊に對し屬望の實に切實

なるを禁する能はず、諸氏が一死以て君國に酬ゆべきは正に今日に在り、希くは努力せよ、と其言悲壯淋漓聲淚共に下る、陣中寂として聲なく、勇奮の氣全軍を蔽ふ、暫くありて中村少將奮然として全隊に宣告して曰く、枝隊の目的は旅順の要塞を中斷するにあり、故に一人たりとも生還を期す可らず、吾れ倒れば渡邊大佐代るべし、大佐倒れたらんには大久保中佐代るべし、各幹部は皆な順次代るべき者を選定し置くべし、襲撃は銃剣突撃を主とすべし、第一着の地歩を占むる迄は敵の猛射を受るとも一發をも應射す可かず、故なく後方に止まり、若くは隊伍を離れ、又は退却する者あらば、幹部に於て直ちに之を斬るべし」と司令官の宣言枝隊長の宣告を聞きたる枝隊の將士は意氣愈々昂り、未だ戦はざるに已に旅順を呑みたる概あり、突進の時刻は午後五時なり、於此決死隊は心許りの訣別の宴を開きたり、其間の光景は沈痛壯烈にして筆舌の盡す所にあざらき、

白禪決死隊征途に就く

十一月二十六日午後五時は來りぬ、白禪決死隊の征途に就くの時刻は來りぬ、其目的とする所は先づ松樹山後方の補備砲臺を奪取して支那圍壁に達し更に白玉山砲臺を攻略せんとするに在り、其突進路は松樹山西南の地隙にあり、寔に難事中の難事冒險中の冒險なり、時針五時を報するや、決死隊は猛然蹶起山田少佐の二個中隊を先頭として軍容整々又肅々牧を囀りて進む而して補備砲臺への突撃は此夜即ち陰曆十九夜の月の出ざる前と定めたり、於此白禪隊は九天

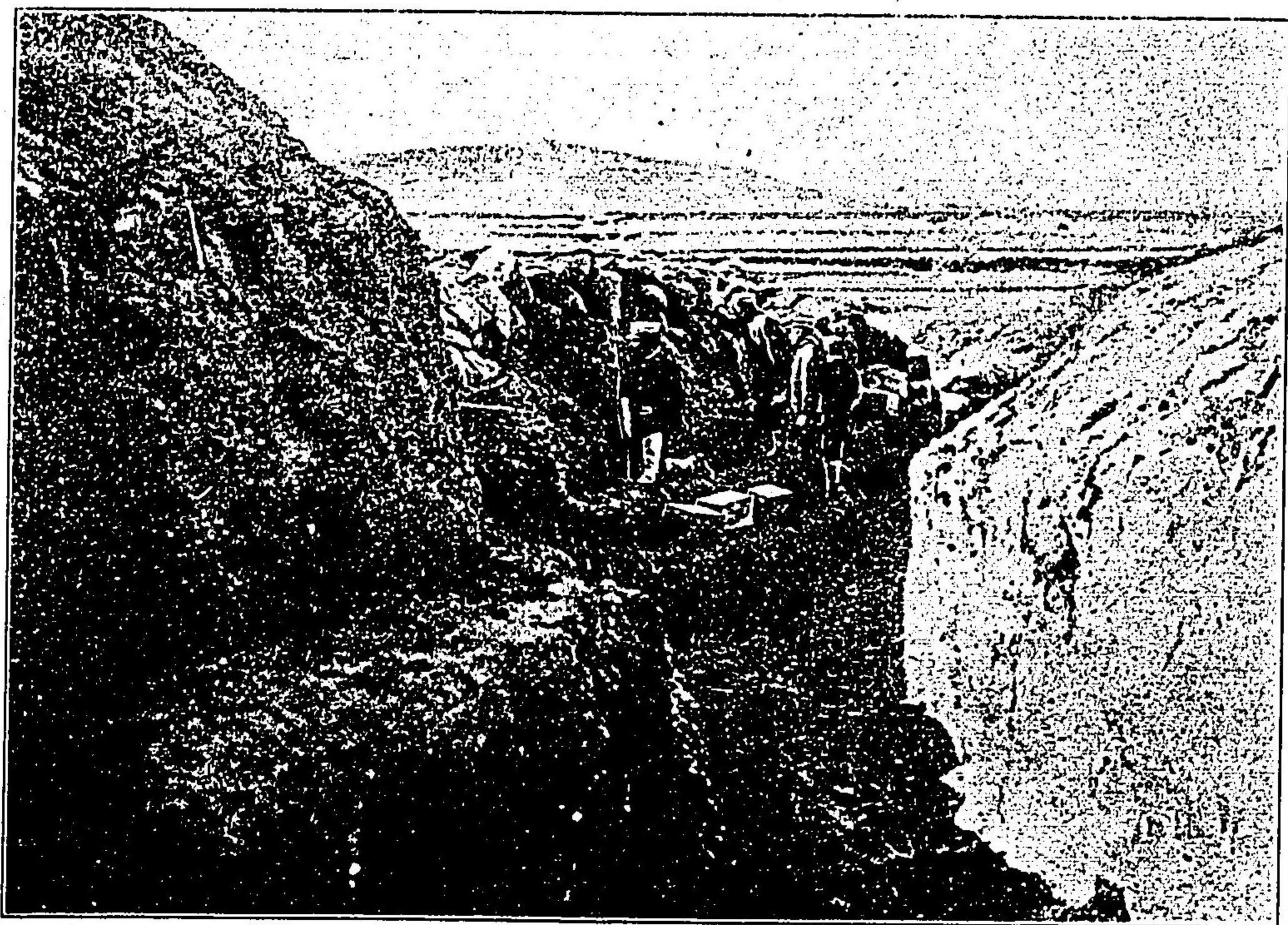
直下の猛威を以て砲臺に肉薄す、敵は此不意の襲撃に魂飛ひ氣奪はれ周章狼狽容易に射撃たも爲し得ざりしと雖ども松樹山新砲臺より猛烈に側背を射撃し、椅子山砲臺よりは探照燈を照して亦た猛撃す、此掩護に勢威を得たる、補備砲臺兵は初めて射撃を開始し我兵敵壕前二十米突の地點に猛進するや、地雷を爆發する二ヶ所其轟下に突撃するや、爆彈を投下し且つ松樹山新砲臺椅子山砲臺よりの砲撃益々猛烈を極む、爲めに大久保中佐初め我兵の死傷頗る多しと雖固より屈せず奮戦猛闘せしも、機關砲の掃射小銃の亂射加ふるに比隣各砲臺よりは更に劇烈に曳火彈を發射し來り死傷益々多大愈々苦戦に陥る、去れど決死の將卒尙ほ屈せず、爆撃戰に次て慘憺たる突撃戰を爲し惡戦其極に達したるも、如何せん我兵力漸次消耗し尋て中村指揮官亦た膝蓋骨に負傷して倒る、此悲惨の情報軍司令官に達するや、司令官は此上突撃を續行するは時機にあらずとし命を傳へて引上げを命じたり、干時廿七日午前一時過ぎなり、中村少將は泣けり生残りたる戦友皆な泣きたり、中村少將は泣きて曰く、「己が身はさもあらばあれ謀りことあらざりしこそ怨みなりけり」と白禪決死隊の突撃は一見不成功に了りたるが如きも、攻略の期を減縮したるの功は實に偉大なるべし、殊に我軍の勵氣勇猛我帝國の特性たる武士道を現實に世界に表示したるの功亦た甚だ大なるべし、

左縦隊の決死隊編成

中村少將の白禪決死隊と共に馳名を世界に轟したるは東鷄



東鷄冠山北砲臺正面の破増孔及咽喉部に向ひ歩兵第二十二聯隊の一部突撃の光景
明治三十七年十一月廿六日



東鷄冠山北砲臺に向ふ壕對第四步兵陣地内の光景

冠山北砲臺に突撃せし齋藤少將の指揮せし決死中の決死隊之れなり、此決死隊は南海道の健兒より編制されたり、其の部署は第一線正面突撃は歩兵二個中隊と工兵一分隊にして福地少佐之を率ひ、咽喉部突撃隊は一個中隊と工兵一分隊にして佐々木少佐之を率ひ、第二線突撃隊は二個中隊にして厚東少佐之を率ひ、別に二個中隊を豫備と爲したり、其目標は東鷄冠北砲臺比隣のキユー砲臺にあり、十一月廿六日作業攻路より進みたる山中少佐の率ゆる一隊中の破壊班午後一時胸墻を爆破するや、追撃砲は砲臺内を砲撃し突撃の機は熟せり、第一線正面突撃隊は破壊胸墻に攀登し猛烈に突進して砲臺に肉薄せり、敵は殊死して正面及び左右兩側の突角より機關砲小銃火及爆薬を雨下し來り突撃隊は全く十字火に陥り死傷續出此慘況を見たる、豫備隊は工兵一分隊と共に突入し同時に一ノ戸砲臺より我機關砲之を援助し咽喉部突撃隊亦た突進したるに是亦敵の十字火に陥り光景慘憺たり、因て部隊長は更に一個中隊を増援したるも未だ目標地點に達するを得ず、敵火は益々猛烈を極め瞬時にして兩隊とも中隊長初め多大の損害を受く、又た正面突撃隊は福地少佐初め殆んど全滅し、爾來數回の突撃を試みたるも尙ほ成效せず、午後十二時舊陣地に引上げたり、其剛毅壯烈は白樺隊と共に中外に轟けり、

東鷄冠山北砲臺の攻撃

左縦隊特設決死隊のキユー砲臺に對する戰況は此の如く悲惨の光景を呈し遂に目的を達せずして止みたり、之れと同

時に東鷄冠山北砲臺に向ひ突撃を爲したるは各中隊より撰抜したる二個中隊の精銳なる突撃隊に、工兵一分隊を附したると更に後續突撃隊二個中隊工兵二分隊の一隊并に一個中隊の一隊なりき、此突撃隊は定刻となるや一齊に作業攻路を躍出前面の圍壁に向て突進し其基脚に達するや、敵は壁内より爆彈を放下し激烈なる爆撃戰は開かれたり、光景如此し此の機に乗して更に一個大隊は他の方面より突進し山腹の散兵壕に突撃し是亦爆撃戰を開始したり、圍壁に向ひたる突撃隊は最も勇敢に最も猛烈に健闘したるも山上砲臺の機關砲キユー砲臺及び右方圍壁内よりの銃火の爲め殆んど十字火を被ふり損傷甚だしく已むを得ず一時前進を中止したり、他方面より突進したる一個大隊中の二個突撃隊亦た爆撃戰の爲め苦戰に陥りたるも後續隊來着し頽勢を挽回し、勇奮健闘午後一時五十分遂に敵を驅逐して散兵壕を奪取したり、然れども數刻の猛闘に我兵疲勞したる爲め之を固守する頗る困難なりしも新銳一個中隊増加し來りしを以て支持し得たり、

二百三高地奪取戰

二百三高地は敵軍の緊要地陣とする丈我軍亦た之を攻略するの必要あり、即ち之を占領するときは敵の死命を制すればなり、故に我右縦隊は多大の損害あるを顧みず、幾回の

土屋左縦隊長の負傷したるは、此猛烈戰の時にして縦隊長は自から戦線に突進し各突撃隊を指揮し居りしに、俄然敵の砲彈飛來し頭部に負傷したるものなり、

強襲攻略を試みたるも防備堅牢にして其目的を達する能はざりしものなり、於此更に十一月廿七日を以て第四回の攻撃を開始したり、其部署は右翼部隊は中央部隊と協力し廿七日午後六時を期し、二百三高地を攻略奪取すべし、中央部隊は右翼部隊と協同して二百三高地及赤坂山を攻撃すべしと云ふにあり、因て右翼部隊長は二個聯隊に工兵一小隊を配屬し、其一個聯隊を二百三高地の西南方面より他の一個聯隊は正西面より又中央部隊長は其第三大隊の一個大隊をして右翼部隊と聯繫して二百三高地に、其第二大隊の一個大隊を赤坂山に向はしむることと爲し其突撃時期は何つれも午後六時と豫定したり、

廿七日黎明我重砲陣地より砲彈一發開戦を宣告するや、二百三高地及赤坂山に對せし我重砲は各所定の目標に向て一齊に砲火を開きしに、兩山の敵砲亦直ちに應射し砲戦は一分刻一刻愈々猛烈となり、我砲の威力は頗る激烈約一時間にして兩山の敵砲臺は我砲彈炸裂の爲め砂塵と硝煙とを以て蔽ひたるも、防備堅牢なるゆへ午後三時に至るも砲臺の半たも破るを得ず、我砲兵之を遺憾とし全力を盡して大口徑砲を猛射せしに、偉大の効果を奏し敵砲中破壊又は轉覆するもの多し、砲臺亦た大破す突撃の機は來れり、

中央部隊の突撃

廿七日午後六時突撃の機熟するや、中央部隊の第三大隊は正面に向ひたる右翼の一個大隊と聯繫して對壕内の陣地を突出し、先づ第十一十二の二個中隊をして敵の散兵壕に突

進せしむ、兩中隊は勇往邁進鐵條網を破り岩角を攀ちて敵壕に肉薄突撃せしに、赤坂山の敵壘より猛烈なる側背射を受け瞬く間に多大の死傷者を生ず、此慘烈なる光景を見たる、第九第十の二個中隊は憤然奮進したるも亦た敵の側背射と、正面數ヶ所の敵壕より機關砲と小銃火を浴せられ死傷者續出し突入の目的を達するを得ず、已むなく前進隊と共に地隙に潜み敵火を避けて徹宵したり、

右翼部隊の突撃

右翼部隊中高地の西南に向ふ一個大隊の突撃隊は三十名の鐵條網破壊の決死隊を撰拔し廿六日の夜暗に乘し潜かに鐵條網に接近し之を破壊して突撃行路を開きたり突撃準備は整ひたり、二十七日に至り突撃隊は勇躍して時機の來るを待つ午後六時過ぎ時機は來れり、全隊奮然躍起輕裝所定の目標に向て對壕内の陣地を突出し、前夜破壊の攻路に近接せしに計らざりき、敵は其破壊口に機關砲を備へて我兵の突進を掃射す、爲めに死傷續出因て更に他方の鐵條網を破壊し猛射を冒して突撃し西南角に達せしも、西太陽滯及び其附近の諸砲臺より猛烈に砲撃し來るのみならず前面の敵壕よりは更に機關砲、小銃爆彈を雨下し爲めに前進するを得ず、已むなく敵壕下約五米突の岩角地隙を死守したり、高地の正面に向ひたる突撃隊亦午後九時突撃して敵壕に達するを得たるも、之れ亦損害多くして占領するに至らず、各突撃隊の戦況夫れ此の如く皆な慘烈なる苦戦に陥り、加ふるに敵は益々他砲臺より増援を得て猛射抵抗す、於此

右翼部隊長は更に三個中隊を兩突撃隊に増加し中央部隊長亦豫備を盡して第三大隊に増加し、右縱隊長は總豫備中の一個大隊を全線に増加して徹宵激戰猛闘を繼續せしも、戦況依然として發展せざりし、

新鋭兵の増加總指揮の新補

二百三高地に對する戦況容易に發展せざるを以て乃木司令官は、軍の總豫備として提けたる第七師團の新鋭兵幾千部隊を二百三高地各方面の突撃隊に増加し、而して大迫第七師團長を突撃總指揮官に新補したり、大迫指揮官は戦況を按し更に砲撃の必要を認め、廿八日爽味より大砲撃を加へ午前八時を期し總突撃に移るべしとの命を傳ふ、
明くれば廿八日大口徑砲は未明より全力を盡して二百三高地を砲撃し更に多大の破壊を爲し敵砲遂に我が砲威に壓せられ午前八時に至り沈黙す、突撃の機は熟したり、大突撃は茲に再び開かる、

右翼部隊の再突撃

高地西南に向ひたる右翼突撃隊は多數の増援を得たるを以て、廿八日午前八時十五分高地の中腹に在る敵の塹壕に向て發射突入爆彈戰の後之を占領するや、更に奮然として猛火を冒し嶺頂に突撃せしに、敵は後方の砲臺より死力を盡して猛撃す、我兵之に堪へず嶺頂を退却す、友安右翼部隊長大に憤怒し幾多勇士の碧血を注ぎて縱かに奪取したる嶺頂を棄て退却し來るときは何事なるぞ、今若し之を棄つる

ときは再び彼所に達せんには更に多大の碧血を流がざる可らず、速かに嶺頂に引返すべし」と叱咤せしに退却隊は謀て命を聴くと稱し猛然として再び嶺頂に向ふや、後續部隊は土囊其他の材料を携へ之に跟随し、直ちに其一部に防禦工事を施し日章旗を立てしに敵兵之を見て逆襲し來りしも、此時已に我兵陸續攀登したるを以て多數の敵を斃し之を撃退したり、其後尙は數回逆襲を試みたるも悉く撃退すると共に一面更に攻路の開穿に努めたり、

中央部隊の突撃

前夜來岩角地隙に潜み鐵火を避け居りし、中央部隊第三大隊の突撃隊亦増援隊を得たれば、二十八日午前七時頃地隙を躍出せしに、敵火愈々猛烈なり爲めに稍々躊躇の色あり隊長寺田中佐大に怒り自から先頭に立ち叱咤突進す、忽ち砲彈に中りて負傷す續て幹部の將校概ね死傷し苦戦に陥る、此時五個中隊の増加隊疾風の如く突進し來りしかば戦況忽ち挽回し共に吶喊して猛火を冒し、遂に嶺頂に攀登し頑敵を驅逐して嶺頂を占領し、直ちに防禦工事を施さんとせしも殘存の兵少數なる爲め能はず、且つ側方中腹の塹壕には、殘敵尙は支持し居る爲め、占領を確實にせんと苦心慘憺中、果敢優勢の敵は逆襲し來れり、決死格闘して漸く撃退し、劔に憑り銃を吹き休息せんとする一刹那、多大の敵は再び逆襲し來りて我れを包圍し猛烈に爆彈を投ず、爲に隊長以下副官も負傷す、依て已むなく占領したる嶺頂を棄て一方の血路を開きて中腹の作業塹壕に退却したり、

攻略の必成を期したる二百三高地は漸く西南の一角のみ我有に歸し、戦局は尙ほ發展せず、加之ならず我軍の損害甚大なれば、茲に新銳の第七師團の全部を増加し協同して、更に大突撃を加ふる事に軍議決定し、依て右翼方面は新銳旅團長齋藤少將、左翼方面は同旅團長吉田少將指揮する事に定めたり、於此松村第一師團長は部下に對し左の訓示を爲したり、

諸子は連日戦闘に等しき對壕作業の勞働に服し、更に一昨廿七日以降頑強なる敵に加ふるに遼東の嚴霜と戦ふこと爰に三日、豫期の成果を收むる能はさりしも、成否は天なり、諸子の職務に盡す亦至れりと謂ふべし、今や茲に第七師團の新銳兵と共に再舉目的を達し得るの時機に達せり、諸子の忠勇義烈なる難に望みて勇氣百倍非常の決心を以て今回の攻撃には必ず目的を達するを期すべし、第一第七師團協同攻撃の作戦は成れり、因て翌三十日を期し更に攻撃を續行するに決したり、

兩師團の協同攻撃

明くれは三十日午前十時より更に攻撃を實行すること、なり、大迫總指揮官は二百三高地の西北角に、新銳の一個聯隊及在來の寺川隊の殘餘部隊を進め友安部隊の一個聯隊の一個聯隊を増加して西南角に進む、部署定まるや、直ちに突撃を實行す、

高地西北角占領

三十日午前十時五個中隊の突撃隊は豫定の西北第一攻路より前進したるも作業全く終らざる所ありて、隊形を暴露するや、赤坂山砲臺より側射され死傷甚多し容易に前面の第二陣地に進むを得ず、去れと西南角に進みたる友隊の戦況に徴し、如何ともして前進せざるを得ざるを以て、友安部隊長は副官乃木中尉をして西北角突撃隊に前進を促さしむ、乃木副官直に命を領し、馬を疾驅して前進を促すや俄然敵陣に中りて壯烈なる戦死を遂げぬ、

乃木司令官は薨きに南山戦闘に於て長男勝典氏を失ひ今又次男保典氏を失ひたり

西北角突撃隊は此督促に依り、奮起身體を暴露して前面上の歩兵陣地に向ひしに敵彈果して雨注し來り爲めに多大の損害を被ふりたるも前進陣地に到達したり、依て午後六時を期し突撃を實行せしに、第二線の鐵條網附近に於て再び苦戦したるも固より屈せず、猛烈なる大爆撃を爲し一個中隊以上の敵を倒し、隊長自から先頭に立ち、猛然突進して更に數百の敵を斃し午後九時殘餘の敵を驅逐し、二百三高地西北角の嶺頂に達し之を占領したり、

高地西南角占領

西南角に向ひたる突撃隊は占領せる堡壘より目標の鞍部に向て突進せんと試みたるも、西北角に向ひたる友隊の突進發展せざる爲め正面及び東北方の敵の猛射を受け、死傷甚多し、依て友隊の突進を促したり、友隊突進するや相應呼して突撃し壯烈なる爆撃戦に繼ぐに、大格闘を爲し、一

千以上の敵を倒したるも敵は西太陽澤方面より多大の増加隊を得て益々猛烈に銃砲火を注ぐ、爲めに我兵多大の損害を受け頗る苦戦せしに、友安部隊長突撃隊長に「貴官の隊は全滅に歸するも願慮するなく猛進して二百三高地の占領を勉めよ」と命し自ら殘餘の二個中隊を率ひ午後八時三十分第二陣地に到着し、更に九時突撃隊長に「貴官の勇敢なる動作は、奏功を疑はずと雖も尙ほ萬難を排して突撃を實行し速かに目標の嶺頂を占領せん事を望む」と於此突撃隊は遙かに友隊と相應して勇猛壯烈なる突撃を爲し、遂に午後十時四十分頃其目標たる二百三高地の西南角を占領したり、

二百三高地嶺頂の地形

二百三高地の西北西南兩角嶺頂は我軍已に占領せしと雖も、未だ其全部を占領するに至らず、抑も同高地の嶺頂は殆んど弧形を爲し、敵は之を利用し西南方と東北方兩地に堅壘を築造するのみならず、其地頭に副防禦を施し西南方の嶺頂占領するときは、東北方の嶺頂砲壘に據り、之に反するときは西南方に據り、固守せんと計畫したるものなり、故に西南北の砲壘を奪取されれば東北方の砲壘塹壕に依り殊死固守せんと期し、而して其山脚より嶺頂に交路坑道を構築したり、

敵の逆襲

我軍十一月三十日午後十時四十分を以て高地南西北嶺頂を占領し、直ちに防禦工事に着手せしに、約二時間を隔て、敵は早くも奪還の逆襲を爲し來り、我軍苦戦の後之を撃退し

たるも其後三十日より十二月一日に亘り、數十回逆襲し來り、殊に一日の逆襲の如きは大部隊にして左手に銃を提げ、右手に爆弾を携へ、頗る猛烈に逆襲し來り、一大猛烈戦を爲し、彼我多數の死傷者を出したる後之を撃退したり、敵の逆襲此の如し友安少將は殘餘の二個中隊を提げ突撃を爲さんと決し、先づ戦友の死屍を收容し、通路を開かんとせしに偶々齋藤少將一個大隊を提げ來り之を兩突撃隊に増加する事となりしを以て、友安部隊長は其二個中隊を齋藤部隊長の兵に合し、共に其占領を確實にしたり、

隊伍の整頓重砲陣地の變換

攻撃は尙ほ續行する豫定なりしも、數日來連續したる激戦の爲め、各隊の隊伍頗る錯綜し加ふるに狹隘の攻路には敵屍横はり運動自由ならざると、高地嶺頂占領の爲め重砲陣地の變換を要すべきに付、十二月一日より四日迄攻撃を中止し、隊伍の整頓死屍の收容、陣地の變更を爲したり、但此間砲撃は繼續せり、

二百三高地全部の占領

十二月五日拂曉より攻撃は開始さる、砲戦先づ開けたり總指揮官の企圖は若し全部を占領する能はずんば、已に占領したる西南の二角を確守し、此地點に觀測所を設け旅順港を瞰制して敵の本據を砲撃し、其敗殘艦を殲滅せんとするにあり、之れ現時の急務なればなり、突撃の機熟するや齋藤少將の部隊午前九時先づ前進突撃したるに東北方に在る敵

は少く退却の兆あり、吉田少將の部隊亦午後二時より突進し來り茲に齋藤吉田兩部隊協同して猛烈に大突撃を爲せしに、頑強無比の敵も遂に支ふるを得ずして多大の死屍を遺棄して西太陽溝方面に向て潰走したり、於此我右縱隊が八月以來數回の攻撃を爲し、多大の碧血を瀉き、莫大の鐵火を消費したる二百三高地は、明治三十七年十二月五日午後二時三十分を以て全く我軍の掌裡に收め得たり、我軍已に之を攻略占領したれば、旅順に残存する敵の陸海兩軍の死命は全然我に於て掌握したり、即ち殘敵に對し致命傷を與へたるものなり、其痛快なる何もものか之に若かんや、此高地我有に歸するや乃木司令官は第一第七の兩師團及竹内旅團に對し左の賞詞を與へたり、

二百三高地は旅順要塞の防禦上敵が待んで以て鎖鑰とする險要にして、並に某師團其旅團（其本書には師旅團名あるも特に略す以下之に倣ふ）は攻城諸砲兵と連合して多大の損害を蒙り、勇猛激烈攻撃を爲せしも敵の防禦工事は頗る堅牢にして其抵抗又極て頑強なりしに因り遂に其目的を達する能はざりき爾後某師團は某步兵旅團と共に困難に耐へ、抗路作業に従事し十一月二十七日より某旅團は某師團砲兵某團と一致協同壯烈に之を攻撃し堅忍不撓遂に全く該高地を占領し軍の目的を達成するの時期を促進せしむるに至りしは深く本職の満足を表する所なり

十二月七日 軍司令官男爵 乃木 希典

乃木司令官又即吟一首あり

爾靈山 (二〇三を云ふ)
 爾靈山嶮巖難攀 男子高名期克難
 鐵血覆山山形改 萬人齊仰爾靈山

亦以て二百三高地の攻略が如何に困難にして、又其占領が攻圍軍將來の作戦に如何に多大の利益を與へたるかを知る

べし、

赤坂山の占領戰

赤坂山は第一師團の赤坂聯隊之を攻撃したるを以て此名稱あり、其位地は已に述べたるが如く二百三高地と聯繫するを以て二百三高地を攻略するときは赤坂山亦た同時に奪取せざる可らず、依て二百三高地攻撃と共に右翼部隊の第二大隊をして十一月廿七日より更に攻撃せしめしに、敵は二百三高地と連繫して最も頑強に抵抗したるも我兵勇奮突撃大爆發戰の後、午後六時過ぎ第一第二の敵壕を占領したり、之か爲め大隊長富澤少佐の負傷を初め多大の死傷者を出したるも我兵屈せず、更に嶺頂の第三壕に誘進突撃し、午後七時之を占領したるも、敵は尙ほ七米突の近距離壕内に殊死して銃丸爆彈を以て猛烈に防戦し、爲めに我兵頗る苦戦し戦況發展せず、翌廿八日亦猛烈戦を繼續したるも尙ほ進まず、反て敵の機關砲の爲め多數の損害を被ふたり、依て右翼部隊長は、一個大隊を増援し兩回の突撃を爲したるも、亦た敵の機關砲と爆彈の爲め目的を達し得ざるを以て第七師團より新に二個中隊を増援し、廿九日更に大突撃を行ひたるも頑強に抵抗し戦局進まず、因て已むなく占領陣地を固守して二百三高地の攻撃效果を待ちたり、

赤坂山及其附近の占領

二百三高地十二月五日を以て我有に歸したれば地勢よりして赤坂山は守持するを得ず、果然赤坂山の敵は十二月六日

を以て一戦たも爲さずして退却したり、我軍亦た一兵たも損せずして之を占領したり、二百三高地、赤坂山已に我有に歸したれば、寺兒溝三里橋の敵亦地形上殆んど包圍の中に陥らんとす、敵も之を知りしにや六日以降皆な椅子山、西太陽溝の砲臺へ退却し、是れ亦我れは一兵に觸らずして占領したり、此の寺兒溝三里橋にも敵は堅塁を築き防備頗る嚴なりしも、今は之を抛棄して退却したり、以て二百三高地占領の價値大なるを知るべし、

敵艦殲滅敵本據の大破壊

二百三高地の占領は實に敵の死命を制したり、我軍此高地を占領するや、高地上に觀測所數基を設け大口徑砲海軍砲は各良好の陣地を占領して直ちに旅順港内白玉山下の海入地に匿せざる敗殘敵艦并に殘敵の本據とする旅順の新舊市街に向て大砲撃を加へ其結果敵艦は悉く港内に轟沈殲滅し陸上亦た多大の破壊を加へたり、

病院保護の軍使來る

十二月十五日午後二時に至り敵の歩兵大尉一名、海軍少尉一名、外に下士一、喇叭手一名、赤十字旗を先に立てて二百三高地に向て來る、之れステツセルの軍使なり、佛文の一書を出し我乃木將軍に傳達し呉れと云ひしを以て直ちに司令官へ傳達し軍使は歸去りたり、其文意の大意は左の如し、

ステツセルよりの通知書

貴下 予は茲に貴軍の砲兵が我病院を射撃しつゝあることを告知するの光榮を有す、此等病院は明かに赤十字旗を以て標識せられ、而して此等の標識は貴軍大砲の位置より望見し得べきものなり、依て予は貴軍と名譽の職を爲し、已に負傷して赤十字旗の下に病院内に平臥しながら滅殺せらるゝ如き取扱を受くべき筈にあらざる我軍の勇士を尊敬する上より之を禁止せられんことを希願す、此等の勇士の内には日本軍の負傷者もあり、予は此機會を利用して再び敬意を呈す、

關東要塞司令官將官 ステツセル
 旅順攻圍軍司令官男爵 乃木 希典 閣下

其二

貴下 予は此書簡の持参者にして赤十字社の職權ある理事長たる皇帝陛下の「エーゲルマイステル、パラシヨフフランカ」へ、攻撃中各病院を危害の外に置くの方法に付閣下と談判することを委任したり、但貴下の交戦動作の成功を確むる貴下の權利を酌すべきは勿論のこととす、

敬具

關東要塞司令官 ステツセル
 旅順攻圍軍司令官男爵 乃木 希典 閣下

此書は十五日の夜八時軍司令部に到達せり

右に對し左の回答を軍參謀齋藤少佐に携行せしめ之に通譯官二名を附し十六日午後一時迄に指定の場所たる三里橋に至らしむ、

我回答

十二月十六日攻圍軍司令部に於て

貴下 予は日本軍は人道及條約を重んじて攻圍の當初より赤十字旗を掲げたる家屋及船舶を故意に、照準して發砲したること斷じて無きことを確保するの光榮を有す、然れども要塞内の大部は我大砲の位置より展望し難く、又吾人の知る如く砲撃は必ずしも希望の點にのみ到達するもの

にあらず、特に貴軍の長き勇敢なる抵抗の爲に我大砲の躲避も益増大し時として不慮の地點に彈達することなきを保し難きは誠に遺憾とする所なり、

予は此機會を利用して茲に再び敬意を表す、

旅順攻圍軍司令官 乃 木 大 將

關東要塞司令官 ス テ ッ セ ル 閣 下

十六日午後一時半頃より彼我の軍使會見の額未大要左の如し、

敵曰く日本軍は赤十字旗ある家屋を照準して發砲す、

我曰く斯くて此事なし、

敵曰く旅順新市街の全部と、舊市街の東北部を限り砲撃せられざる事を要求す、

我曰く地を制限することは絶對的に同意する能はず、

敵曰く病院の地位を記入したる地圖を交附す、依て成るべく其地位を砲撃せられざることを希望す、

我曰く希望に添へられたる地圖は一應拜見すべし、

此敵の軍使は「バラシヨフ」にして地圖は十八日交附すべしと云ひしも遂に交附なかりし、之れ全く我砲の威力に堪えずして窮餘の策に出しものなるも我れ豈に斯る奸計に乗らんや、

東 鷄 冠 山 北 砲 臺 の 占 領

東鷄冠山北砲臺の攻撃は十二月十八日午後二時を期して行はれたり、此砲臺は是迄數回の強襲を行ひたるも防備堅牢にして毎に多大の犠牲を出し、十月廿六日の攻撃の如きは土屋左縦隊長迄負傷したるも成功せず、其後鮫島中將縦隊

長となり且つ正攻法たる坑道作業も完成したれば、茲に竹内少將の率ゆる豫備團と協同して攻撃を開始したり、其攻撃計畫は坑道に依り爆破すると同時に全部に向て突入するにあり、豫定の攻撃時期至るや、坑内七個の藥室に點火せしに大爆聲は天地を震動し土石冲天に飛散すると數十丈砂塵全砲臺を覆ふ、突撃隊は爆發と同時に砲臺及び咽喉部に向て突入し、我重砲砲は一齊に他砲臺及敵援の來路を猛撃す、其壯觀名狀す可らず、

突撃隊は直ちに砲臺内部に突入せんとしたるも、敵の防備亦周到にして重砲彈を亂射し、爆彈を投下し、小銃特に機關砲を猛射して其勢當る可らず、已むなく爆破したる堆土の外方斜面に止まりて爆藥戰を爲すのみ、午後四時過に至るも戰況容易に發展せず、

鮫島縦隊長は當初より外壕附近に在りて指揮督勵したるも、情況此の如くなるを以て竹内豫備兵團の一個大隊に前進を命するや、突進して砲臺下に至り、大隊長は先づ其中の二個中隊をして突撃せしむるに決し目標は砲臺の中心なり突撃せよと命す、兩中隊は慕進して前進突撃隊と共に將さに堆土を越へ躍進せんとしたるも敵火尙ほ猛烈にして奏功甚だ困難なり、此時我山砲、機關砲増加し來り猛撃せしに敵の砲火少しく衰退す、於此大隊長は百三十人の決死隊を編制し士官五名を附し砲臺に突入せしむ、決死隊は直ちに突入して其中心部に迫りしに、敵は已に潰走して後方の咽喉部に止まり更に爲すあらんとするもの、如し、依て總突撃隊は猛然として之に迫りしに、彈雨霏りに來り死傷續



東 鷄 冠 山 砲 臺 正 面 の 爆 發 光 景
明治三十七年十一月三十一日

出せしむ更に屈せずして突撃せしに敵は遂に支ふる能はず、三個の地雷に點火して潰亂逃走す、於此我軍東鶏冠北砲臺の全部を占領し、日章旗を樹て、陛下の萬歳を叫ぶもの數回山岳爲めに鳴動したり、千時十二月十八日午後十一時五十分なりき、此砲臺の敵兵は三百三十餘名なりしに、大爆破の爲め地下に陥落埋没して死したるもの一百餘名の多きに達たりとなり、

鳩灣方面の砲壘占領

鳩灣方面に向ひたる我右縦隊右翼部隊の一枝隊は、十二月廿二日午後五時頃後三羊頭北方高地の敵壘に於て敵兵動搖の兆あるを認め、好機乘すべしと爲し、之を襲撃して同高地砲壘を占領し、其勢に乗じ同地西方鳩灣半島の敵壘を襲撃し、之を占領せり、之が爲め鳩灣方面よりの敵の密輸入路は全く杜絶したり、

二龍山砲臺占領

二龍山砲臺は松樹山砲臺と共に敵の咽喉とする所、故に其防備の堅牢なるは勿論にして我中央縦隊、數回の強襲攻略を試みたるも、多大の損害を被ふり皆不成功に終りたり、依て爾來對壕作業に繼ぐに坑道作業を爲したるに、地質殆んど岩石なるのみならず敵の妨害甚だしくして作業頗る困難なりしも十二月廿七日に至り、漸く完成したり、因て翌廿八日を期し、之を攻撃するに決し坑道に依る爆破装薬、突撃掩護射撃の砲兵、突撃部隊の部署は、前夜即ち廿六日

の夜準備整頓將士腕を扼して天明を待つ、明ければ廿八日東天紅を呈するや、我重砲は砲火を開きて攻撃を宣告すれば、松樹、白玉、望臺等の敵砲二龍山砲臺を掩護して應射最も努む、砲戰約五時間突撃爆破の期は來れり、對壕陣地に在る中央左縦隊の中央部隊は輕裝若劍爆破を待つ、時針十時を指すや、工兵は砲臺正面の胸墻下四坑道内十數個の藥室に點火せしに轟然地軸を震動して胸墻を爆破し、巨岩大石大空に飛散す、突撃隊は疾風の如く壕内を躍進して破壊墻に突撃し、敵の猛火を冒して之を占領し、我重砲掩護の下に銳意防禦工事を施し、其占領を確實にし、午後四時再び前面内部の重砲線に突入して之を占領し、更に猛進して咽喉部に突撃せしに、敵は機關砲、小銃及爆薬を亂射投下し頑強に抵抗したるも、遂に之を驅逐潰敗せしめて午後七時三十分を以て砲臺の全部を攻略占領し、陛下の萬歳を絶叫するや、全軍之に和して萬歳を叫ぶ、天地爲めに震動したり、

松樹山砲臺占領

松樹二龍兩山の砲臺は旅順背面の咽喉部にて殘敵が首力を集中して死守する所、然るに其なる二龍山砲臺は已に我有に歸す、豈に松樹山砲臺のみ獨り能く固守するを得んや、果然明治三十七年の末日を以て遂に我有に歸したり、之より先き此砲臺に對する坑道作業は完成し攻略の時機は來れり、我攻圍軍中央右縦隊の右翼部隊は十二月卅一日を期し、之を攻略せんと決定し前日を以て各般の準備全く整備し、

翌三十一日天明となるや、我軍輕砲は該砲臺及び後方の補備砲臺及び望臺に向て砲火を開き砲戰數刻各聯隊より撰拔せし三十七名の決死隊と工兵は坑道に進入したり爆破の時は來りぬ、其午前十時轟然たる大爆響と共に濛々たる黒煙は松樹山頂を包み、漠々たる土砂は青空に昇り其光景壯絶快絶勇武絶倫なる各突撃隊は、歩工兩兵より撰拔せる地雷搜索隊を先頭として攻路壕内の陣地を突出爆破せる胸壁に攀登して之を占領し、突撃部隊長は直ちに其一部隊をして咽喉部に突撃せしめしに、敵は此猛威に恐怖し抵抗の力全く消失し、白旗を掲げ面縛して降伏し來る、於此砲臺の全部我軍の有に歸し、萬歳の聲と共に日章旗は高く砲臺上に翻りたり、此時午前十時四十分にして爆破を爲してより僅かに四十分間なり、

望臺占領

松樹、二龍兩山砲臺其他圍壁聯擊砲臺已に全く我有に歸したれば、望臺の如きは攻略するの必要なが如きも、望臺は此方面に於ける最高標なれば、之を占領するの要あるを以て中央右縦隊左翼部隊は明治三十八年一月一日午前六時頃より先づ砲撃し、同九時に至り歩兵は砲火掩護の下に強襲攻撃を實行し、敵の頑強なる抵抗を排し、峻坂險路を攀登し

て猛烈なる突撃を爲し、午後三時三十五分全く之を占領したり、

敵の咽喉を刺す

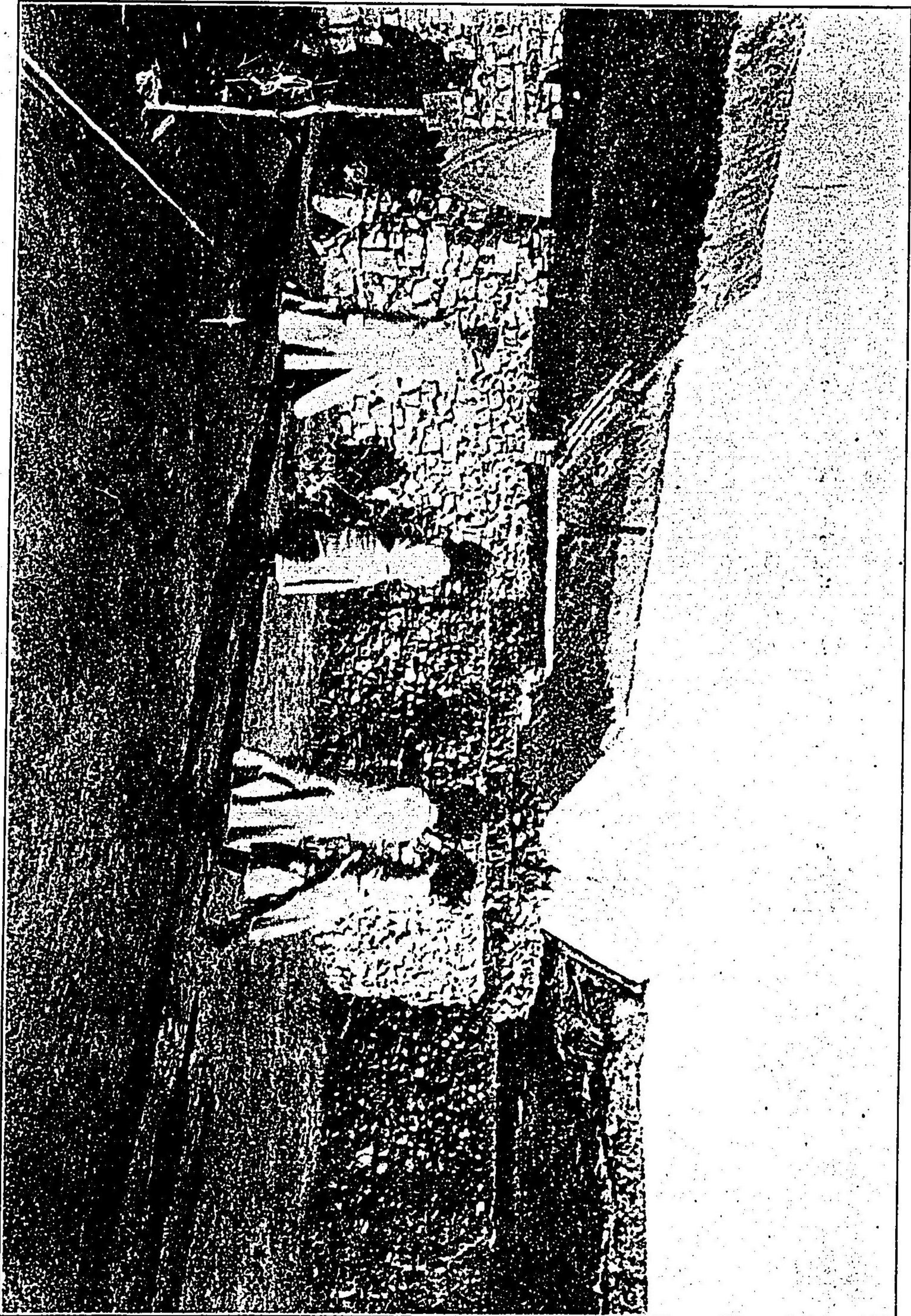
曩きに二百三高地を占領して敵に致命傷を與へ今又松樹山以東の圍廓砲臺を攻略して敵の咽喉を刺したり、今後に於ける我攻圍軍の行動は敵の本據とする市街に突入して殘敵を殲滅せんのみ、敵帥ステツセルは其豫告の如く一人となるも尙ほ戦ひを繼續し得るかとは當時攻圍軍の意思せし所、而して敵の本據を衝くの計畫準備は成り將に前進命令を下さんとせしに當り、明治三十八年の元旦午後五時敵の降伏軍使は我軍門に來りたり、

軍使開城書を齎す

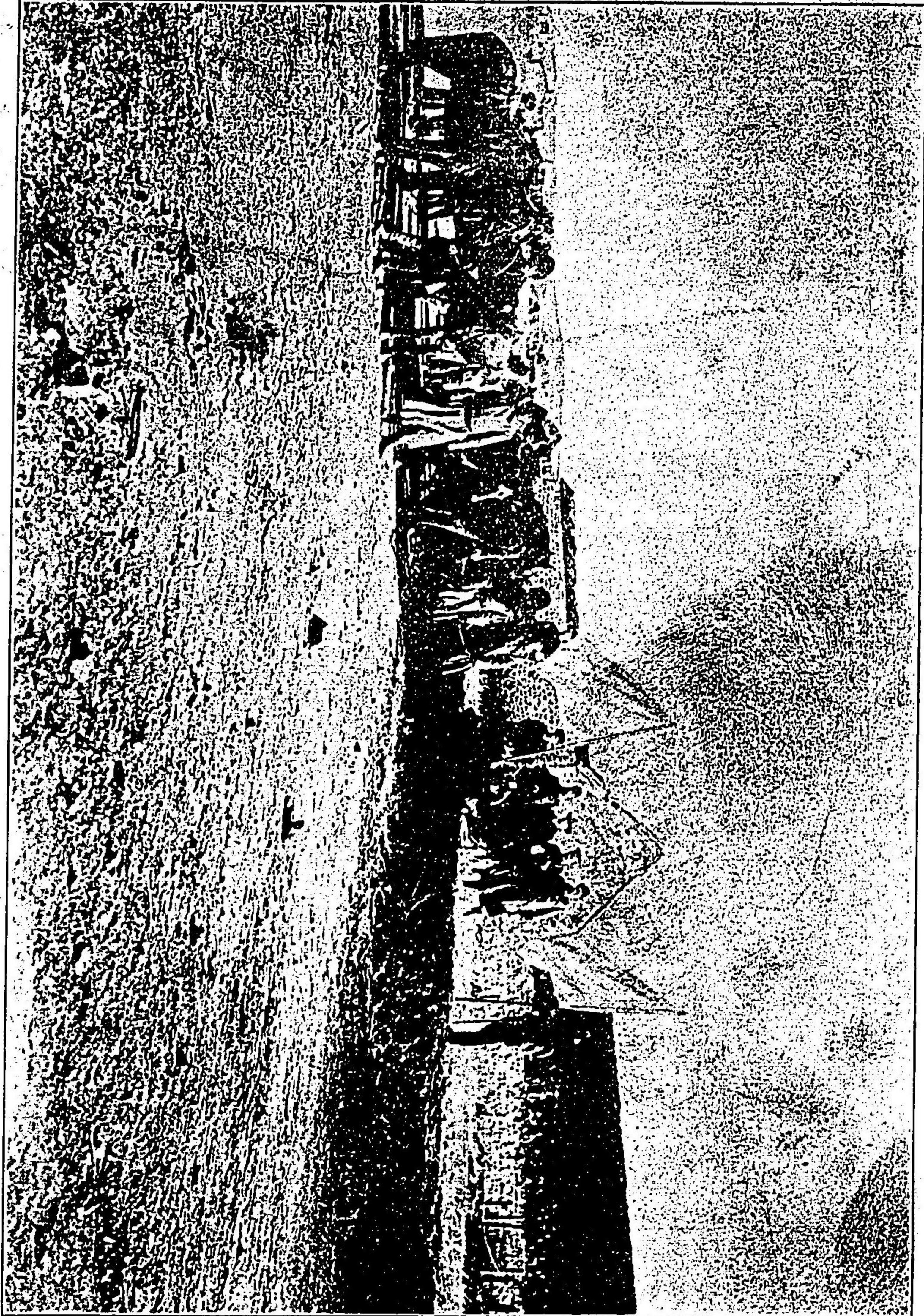
旅順要塞の主將ステツセルは難攻不拔と恃みたる金湯の堅城は攻略され、其艦隊は殲滅され彈盡き劔折れて降るとの彼等の格言を實行し、其參謀長レーズ少將を軍使とし、二時將校と共に白旗を掲げしめ、明治三十八年一月一日午後五時我軍門の第一線水師營の南方に開城書即ち降伏書を齎し伏降を乞ひたり、茲に其顛末を記せん、

開城顛末

乃木司令官が敵將の開城書を受領したるは、一月一日の午後九時にして其開城書の全文左の如し、
旅順口一千九百四年十二月
第二千五百四十五號



明治三十八年一月一日午後五時敵軍の軍使レーズ參謀長以下開城書を齎し水師營に來り我軍司令部を參照して會見所に入るの光景
一月一日なるや、入口の兩側に松樹あり標札は安全路と記したり



明治三十八年一月一日開城書を廢したる敵の軍使を護衛し來りたる哥薩克騎兵休憩の光景
左方の自旗は敵軍右方は之を迎へたる我軍の自旗

貴下交戦地域全般の形勢を考察するに今後に於ける旅順口の抵抗は不要なり依て無益に人命を損せざる爲め予は開城に付談判せんことを望む若し閣下之に同意せらるゝに於ては開城の條件順序を討議する爲め委員を指命し并に予の委員が該委員と會合すべき場所を選定せられんことを願ふ予は此機會を利用して予の敬意を表す

旅順口攻圍軍司令官男爵乃木閣下

依て乃木司令官は次の回答を我軍使に齎して翌二日天明後

直ちに彼に交附したり

一九〇五年一月二日

旅順口攻圍軍司令部に於て

貴下予は茲に開城の條件及順序に付談判せんとする閣下の提議に同意するの光榮を有す之が爲め予は旅順攻圍軍參謀長少將伊地知幸介を委員に指命し若し閣下之に同意せらるゝに於ては隨行せしむ即ち一九〇五年一月二日の正午に水師營に於て貴軍委員と會合すべし双方の委員は調印の後批准を待たずして直に効力を生ずる開城規約に署名するの全權を有すべく其全權委任狀は双方の最上指揮官の署名したるものにして互に交換すべし

予は此機會を利用して敬意を表す

旅順口攻圍軍司令官男爵

乃木將軍

關東要塞地區司令官

ステツセル將軍閣下

優渥なる聖旨下る

ステツセル開城降伏の事長ぐも 微聞に達せまかば 大元帥陛下には直ちに山縣參謀總長を召させられ左の優渥なる 聖旨を賜はる依て參謀總長は聖旨を奉じて一月二日午前八時左の電報を旅順攻圍軍司令官男爵乃木大將に送り

旅順攻圍軍司令官宛

將官ステツセルより開城の提議を爲し來りたる件伏奏したる處陛下には將官ステツセルが祖國の爲め盡せし苦節を嘉みし玉ひ武士の名譽を保たしむべきことを望ませらるる右謹で傳達す

降伏談判の結了戰鬪行爲の停止

彼我全權委員は二日午後四時三十五分を以て其談判を終れり彼は大體に於て我提出せる條件の下に開城規を締結したり此の談判結了と同時に兩軍の戰鬪行爲を停止したり

開城規約の全文

二日午後九時四十五分兩全權委員間に於て開城規約本調印を終れり其全文左の如し

第一條 旅順要塞及び該港にある露國の陸海軍々人及び義勇兵並に官吏は總て之を捕虜とす

第二條 旅順口に於ける全堡壘、砲臺、艦船艇、兵器彈藥、

馬匹其他一切の軍用諸材料官舎官有諸物件は現状の儘之を日本軍に引渡すものとす

第三條 前二箇條を承諾するに於ては其擔保として來る一月三日正午迄に椅子山、小案子山、大案子山及其東南一帶の高地上にある堡壘、砲臺の守備を撤し日本軍に交附すべし

第四條 露國陸海軍に於て本規約調印の當時に現存せる第二條の諸物件を破壊し又は其他の方法に於て現狀を變更すと認むるときは談判を廢止し日本軍は自由の行動を取るべし

第五條 在旅順口露國陸海軍官憲は旅順要塞配備圖、地雷水雷、其他危險物の布設圖及び在旅順口陸海軍編成表、陸海軍將校官職等級氏名簿、文官々職氏名簿、軍隊艦船艇名簿及其乗組人員名簿、普通人民の男女人種職業員數表を調製し日本軍に交附すべし

第六條 兵器(各人の携帶兵器を含む)彈藥、軍用諸材料、官舎、官有諸物件、馬匹、艦船艇及其内部の諸物件(私有物を除く)は悉く之を現在の位置に整置すべし其受授の方法に關しては日露兩軍の委員に於て規定するものとす

第七條 日本軍は露軍の勇敢なる防禦を名譽とするに依り露國陸海軍將校及所屬官吏帶劔及び直接生活に必要な私有品の携帶を許す又前記將校、官吏及び義勇兵にして本戦役の終局に至るまで武器を取らず如何なる方法に於ても日本軍の利益に反對する行為を爲さざることを筆記

宣誓するものは本國に歸還することを承諾す陸海軍將校には各人に一名宛の從卒を隨行せしむることを許す此從卒は特に宣誓解放をなす

第八條 武裝を解除したる陸海軍下士卒及義勇兵は其製服を着用し携帶天幕及所要の私有物件を携へ所屬將校の指揮を以て日本軍の指示する集合地に至るへし但其詳細に關しては日本軍の委員に於て之を指示す

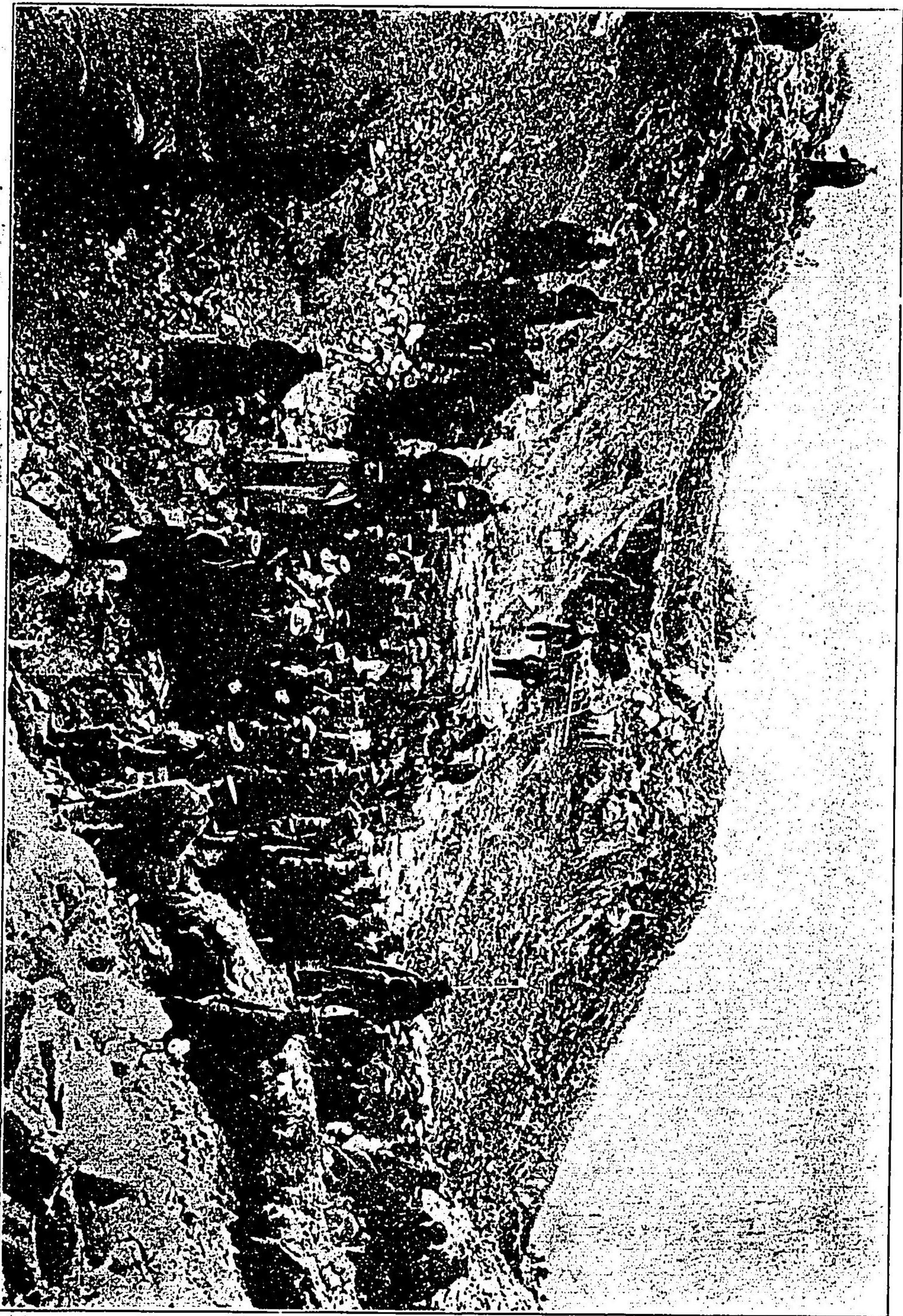
第九條 旅順口にある露國陸海軍の衛生部員及び經理部員は病傷者及び俘虜の救護給養の爲め日本軍に於て必要と認むる時期迄日本軍の衛生部員及經理部員指揮の下に殘留して引續き勤務に服せしむべし

第十條 普通人民の處置、市の行政會計事務及之に關する書類の引繼ぎ其他本規約執行に關する細則は本規約附録に於て規定す

右附録は本規約と同一の效力を有す

第十一條 本規約は日露兩軍に於て各一通を製し調印の時より直ちに效力を生ず

開城規約附録
第一條 本規約を實行する爲め日露兩軍に於て指定すべき委員如左
一、本規約第六條に關する委員、堡壘砲臺及び陸上に在る兵器彈藥等に關する委員、艦船艇等に關する委員、胸墻物件に關する委員、危險物除去に關する委員
二、本規約第八條に關する委員
三、本規約第九條に關する委員



泉光の受授差砲山龍二と校將伏陣の敵校將軍我りな泥實の一部一墓壘るたし墳塚の軍我りよ上堤餘は場屯

四、本規約第十條に關する委員

第二條 前條の諸員は一月三日正午白玉山の北麓旅順街道上市街の入口に集合し其擔任事項に著手するものとす

第三條 旅順要塞内に在る陸海軍人は其の編制表受領の上日本軍の指定する順序に依り將校及所屬官吏は帶劍、士官以下は一切の武器を携帶すること無く一月五日午前九時其最先頭を以て鴨嘴嘴東端に到着し本規約第八條に關する委員の指揮を受くべし但將校以下一日分の糧食を携帶するを要す

第四條 陸海軍に屬せざる露國官吏は各職分毎に一團と爲り前條に示せる諸隊に續行すべし但該官吏中義勇兵に加りたること無き者は宣誓を用ひずして解放す

第五條 各堡壘砲臺、諸建築物、諸倉庫、諸物件、所在地各艦船艇内には受授に必要な將校下士卒若くは之に相當する人員を殘置すべし該人員には日本軍に於て調製したる徽章を佩用せしむ

第六條 陸海軍々人、義勇兵及び官吏にして一月四日午前九時以後に於て尙ほ兵器を携帶し又は指示せられたる集合場に到ることを肯んせざるものは日本軍に於て適宜處分すべし

第七條 本規約第七條に示す將校及び所屬官吏の携行すべき私有物件は必要の場合に之を検査す其量目は概ね日本軍の將校及所屬官吏の爲に規定せられたる行李の數量に準ずるものとす

第八條 旅順に在る陸海軍用病院及び病院船は日本軍の委

員に於て臨檢したる後其定むる所の取扱法に従ふべし

第九條 普通人民は各々其堵に安んずべし其退去せんと欲する者は凡ての私有財産を携行するを得但陸海軍將校及官吏の家族にして退去せんと欲する者は日本軍に於いて爲し得る限り便宜を興ふべし

第十條 旅順要塞内に在住する普通人民にして日本軍に於いて其退去を必要と認めたる者は日本軍の指定する時期及通路に依り退去せしむ

第十一條 本規約第十條に關する露國委員は行政並會計に關する既往及現在の狀況を日本軍委員に告知し且之れに關する一切の圖書を交付すべし

第十二條 旅順港に在る日本軍の捕虜は一月三日午後三時に於て本規約第一條に示す日本軍委員に引渡すべし此規約調印を了りしを以て、本規約第三條の規定に従ひ三日月午後一時三十分之か擔保として椅子山大小案子山及東南一帶の高地に在る堡壘砲臺を受領し、翌四日より本規約第二條に規定したる諸物の受授を爲したり、

旅順の戦利物件

同月十日迄に堡壘、砲臺、艦船、兵器、其他諸物件の受領を終れり其重要諸物件の品目數量は大約左の如し
一、永久堡壘、砲臺 五十九個
二、兵器彈藥車輛等

火 砲

| | |
|--------|--------------------------|
| 中口口 | 四百四十九門 |
| 小口口 | 三百四十三門 |
| 合計 | 五百四十六門 |
| 水雷 | 八萬二千六百七十發 |
| 爆藥 | 六十個 |
| 火銃 | 千五百八十八個 |
| 小銃 | 三萬青羅 |
| 拳銃 | 三萬五千二百五十二挺 |
| 軍刀 | 五百七十九挺 |
| 小銃實彈 | 千八百九十一挺 |
| 彈藥車 | 二百二十六萬六千八百發 |
| 輜重車 | 二百九十 |
| 雜種車 | 六百〇六 |
| 乘馬具 | 六十五 |
| 鞍馬具 | 八十七 |
| 三、電燈 | 二千〇九十六 |
| 四、電信機 | 十四 |
| 電話機 | 十五 |
| 同光通信機 | 百三十四 |
| 五、土工器具 | 三 |
| 六、馬匹 | 千七百七十一 |
| 七、艦船艇 | 千九百二十頭 |
| 艦艇 | （セバストーゴリは全く水底に在るを以て之を除く） |
| 巡洋艦 | （セバストーゴリ以下四隻） |
| 砲艦、驅逐艦 | （セバストーゴリ以下二隻） |
| 汽船 | 十四隻 |
| 小蒸汽船 | 十隻 |
| 雜船 | 八隻 |
| | 十二隻 |

其他民有船
 以上は皆破壊若くは沈没せるもの
 右の外多少の修理を加へ使用し得る小蒸汽船三十五隻あり

捕虜受領

規約第一條の規定に依り我軍に受領せし捕虜の總數左の如し

| | |
|-------------------------|---------------------------|
| 五日受領の分 | 六日受領の分 |
| 狙撃步兵第五聯隊將校三十六、下士卒千五百四十七 | 狙撃步兵第二十五聯隊將校四十二、下士卒千四百三十二 |
| 同第十三聯隊將校三十八、下士卒六百六十五 | 同第二十七聯隊將校五十八、下士卒二千七百七十八 |
| 同第十四聯隊將校三十二、下士卒八百八十二 | 同第二十八聯隊將校五十二、下士卒千五百五十五 |
| 同第十五聯隊將校五十、下士卒三百五十三 | 同第七補充大隊將校十四、下士卒二百八十二 |
| 同第十六聯隊將校三十、下士卒千〇〇四 | 第三補充大隊將校十二、下士卒三百八十八 |
| 合計將校百八十六、下士卒五千四百五十 | 隊本部將校二、下士卒六十六 |
| 内宣習せしもの將校八十六名 | 第三師團第十一第十二混成聯隊將校四、下士卒百九十五 |
| | 砲兵第四旅團將校二十六、下士卒九百一 |
| | 要塞砲兵將校二、下士卒百十三 |
| | 關東要塞砲兵將校六十八、下士卒二千七百八十三 |
| | 憲兵將校二、下士卒二十四 |
| | 合計將校三百二十二、下士卒一萬二千二百七 |
| | 内宣習せしもの將校百五十一 |
| | 七日受領の分 |
| 將校、同相當官 | 下士卒 |
| スラツセル司令部 | 九 |
| 關東州長官司令部 | 六 |
| 工兵中隊 | 一 |
| 電信隊 | 四 |
| | 二六九 |
| | 六〇 |

| | | |
|-------------|-----|--------|
| 鐵道隊 | 一 | 一五五 |
| 騎兵 | 四 | 一七七 |
| レトヅギザン | 二二 | 四四六 |
| ホヘーダ | 一一 | 五二〇 |
| バルラーダ | 一一 | 二〇八 |
| ハレスウエート | 一五 | 六〇七 |
| ホルター | 一六 | 三一一 |
| セバストーゴリ | 三一 | 五〇七 |
| パヤン | 一五 | 二五九 |
| ホーブル | 一一 | 九九 |
| ストロデホイ | 四 | 五二 |
| ナトワジヌイ | 六 | 一二四 |
| ギリナーク | 五 | 七二 |
| アムール | 七 | 一七三 |
| 海軍防禦司令部 | 三 | 三 |
| 港務局 | 六〇 | 二九 |
| 海兵團 | 五九 | 二、五三一 |
| 水雷團 | 一〇 | 一四二 |
| 裁判官 | 三 | 三 |
| 野戰郵便電信局員 | 三三 | 三 |
| 合計 | 三六九 | 六、八一四 |
| 最初よりの者を合し總計 | | 八七八 |
| 將校、同相當官 | | 三三、四九一 |
| 下士卒 | | |

宣誓捕虜

一月八日迄に宣誓を終りし者は將校四百四十一、從卒二百二十九なり

將官の内フオーク、スミルノフ、ゴルバトンスキー（歩兵

旅團長）及海軍少將ツイルマンは俘虜となり我國に送られたり

優詔令旨兩軍司令官に賜ふ

一月六日第三軍司令官男爵乃木陸軍大將及聯合艦隊司令官東郷海軍大將に左の勅語令旨を賜はりたり

勅語

旅順は極東に於ける水陸の重鎮なり第三軍及聯合艦隊は協同戮力久しく寒暑を冒し苦難を凌ぎ勇戦奮闘克く其鐵壘を奪取し堅艦を殲滅敵をして遂に城を開き降を乞ふに至らしむ

朕深く爾將卒の克く其重任を全ふし偉大の功績を奏したるを嘉す

皇后陛下令旨

我第三軍并に聯合艦隊は水陸協戮旅順を重圍することと數閱月激戦幾百回堅を破り鋭を碎き辛酸壯烈防備無比の天險を冒し頑硬不屈の勁敵を剿し遂に彼をして城を開き降を乞ふに至らしめたる趣皇后陛下の懿聞に達し我將校下士卒の忠誠義勇克く偉大の功

勳を奏したるを深く御感賞あらせらる
東宮殿下令旨

封鎖數月に亘り萬難を排して能く其任務を遂行し攻圍軍と協力して遂に旅順方面敵艦隊を全滅したる聯合艦隊の偉大なる奏效を嘆尚す

一 乃木大將降將を慰問す

開城規約成りし後、降將ステッセル將軍は一度ひ乃木大將に會見したしとの意を通し來りしを以て、大將は一月四日川上書記官等をして有合せの三鞭酒葡萄酒生鶏を携へしめ、ステッセル將軍を黄金山下の邸に慰問せしむ、ステッセル將軍ハ大に悦び直ちに引見し、先づ乃木大將を嘆賞して將軍の如き忠勇の巨人と戦ひしは予の甚た光榮とする所、已に下僚を以て請ひたる如く願くは一度大將に會見したしと云ふ、因て川上書記官は來意を述へ大將より慰問の品を贈りたる後兩人の間左の談話を爲したり

『乃木將軍は閣下及び御家族の安否を氣遣はれ余をして慰問せしめらる、御近況如何』
『余は唯夫妻此處にあるのみ、一男子あれども彼は近衛士官として本國に在り』
『乃木將軍は掛換へなき二人の嗣子たる士官を旅順の役に失はれたり』

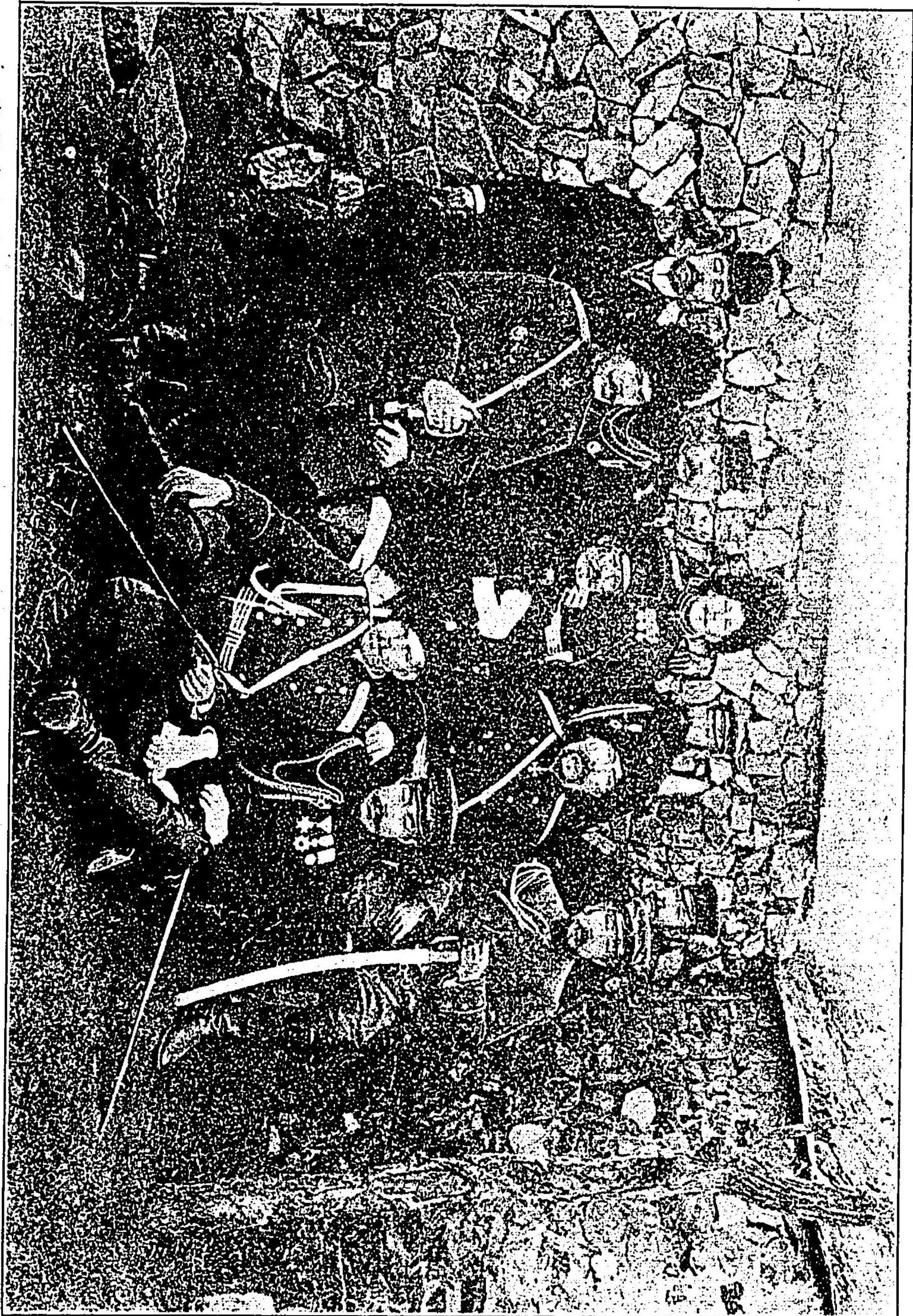
『噫、然るか、斯く一家を擧げて國家の犠牲に供すればこそ日本軍は勇悍猛烈なるべけれ余將軍の贈物に接す豈答禮なかるべけんや余の乗馬二頭あり一は埃國産、他の一は亞刺比亞産にして共に積年愛養せる所名馬たりと云ふを憚からず余之れを將軍に獻せん願はくは君之れを將軍に傳へよ』

ステッセル將軍夫人亦た席に在り打解けて談話を交ゆ夫人『貴下、我軍にして最強最勇の日本軍を防ぎて今日の悲惨なる機に及びしは實に我が良人の力なり』
『余が妻の力亦た與かりて大なり』
と夫妻相感稱す

夫人『乃木將軍は二愛兒を失へりとや、眞に哀悼に堪へず君に願ふ此方へ來れ』
と川上書記官を伴ひステッセル將軍と共に次の二三室の扉を開けば中に頗是なく嬉戲せる二名の男兒と四名の女兒とあり夫人は指さしつ、

夫人『彼等の父は皆我が良人の愛せる好士官等の孤兒なり我は彼等を不惑に思ひ斯くは我が手に育て居れり』
『余の妻は籠城中看護婦となり裁縫師となり嫁母となり洗濯屋となりて有らゆる困難を経たり』
と述へ人をして同情に堪へざらしめたり川上書記官は乃木將軍の命に依り『閣下乃木將軍に會見の意ありと聞く將軍又之れを欲せり閣下にして之れを望まば五日午前十一時水師營に相會せん』と傳へしにステッセル將軍は非常に喜び『必ず會見を乞はん將軍に之れを傳へよ』と答へしかば

旅 順 攻 略 史 乃 木 大 將



一月五ニ乃木大將軍ステッセル將軍と會見し午後後庭前に於て紀念の爲り撮影したるものなり

官記書上川 謀參尉大原安 務勤謀參尉中コンエチルマ 官副尉大平松 佐少逸渡
長謀參スーレ 軍將木乃 軍將ルセツクス 長謀參知地伊
官副尉中エクスルエチエニ 謀參田野津

川上書記官の一行は辭して我が軍司令部に歸りたり

兩將軍の會見

(其光景)

降將ステツセル將軍の希望に依り、乃木大將は一月五日午前十一時四十分水師營に於て會見したり、此會見には兩將軍幕僚の外參加したる者なし、當時兩將軍談話の概要は左の如し

乃木大將曰く 今日迄は互に本國の爲めに敵對行爲を執りしも今や戰鬪行爲休止と爲り閣下と會見するは光榮の至りなり

ステツセル將軍曰く 仰せの通り余も祖國の爲めに盡し得る限りを盡して戰鬪行爲を休むるの時機に際し閣下と會見するの光榮を得たるは満足とする所なり

乃木大將曰く 我大元帥陛下は特に聖旨を傳へられ閣下を待つに武士としての面目と名譽を完ふせしめよとのこと閣下の本國に歸還せらるゝ場合には小官の爲し得る限りを盡して便宜を與へんと欲す

ステツセル將軍曰く 厚意謝するに辭なし我皇陛下下よりも優渥なる寵報を賜りて宣誓に關する勅許を得たり又曰く 予の乗用せし馬あり今閣下に呈するの光榮を得べきか

乃木大將曰く 芳志謝するに辭なし併しながら我國の規定に依り之を私人として受けること能はず今授受に關係しつゝある我軍の委員に交付せられなば余は充分に愛護すべし余の家も古き武人にて馬を愛すること久し今回北池子崖にて余も一頭の愛馬を亡び實に愛情に堪へず、閣

下も愛馬と離別せらるゝの衷情を察して予は轉た同情の感に堪へざるなり

ステツセル將軍曰く 聞く所に依れば閣下は二人の令息を此戰鬪に於て失はれたる由深痛なる哀悼の意を表せんと欲す予も一人の息子を近衛に服役せしめ居れり轉た同情の至りに堪へず

乃木大將曰く 幸ひ武士の家に生れたる甲斐に能き死所を得て満足に堪へず即ち長男は南山に於て次は二〇三高地に於て皆共に如何なる犠牲を供するも辭せざる所の緊要なる晴れの戰場に於て戰死せしは窃かに満足とする所なり

ステツセル將軍曰く 斯の如き御考を以て戰場に臨まるゝ閣下の御決心は武勇絶倫如何なる辭を以て尊敬を拂ふべきを知らず一身を以てするのみならず令息迄を國家の犠牲に捧ぐる御決心は神と申上ぐるより外は言ひようなし我々凡人の遠く及ばざる所なり云々

やがて午餐の準備整ひたれば兩將軍其他の幕僚も卓に着きしが食卓上の談話は續て兩將軍の獨占にて日本の武士道談に花を咲かせたりと云ふ

庭前の撮影

午餐は果てぬ兩帥并に其幕僚は庭前に出で乃木大將とステツセル將軍とは相對して紀念の撮影を爲せり
撮影終り兩將軍は今や相別れんとしてステツセル將軍は馬を呼び兩軍の幕僚環視の裡にて馬を驅りて陣を作し馬も

久しく走らざれば思ふ儘に御し難しと獨り啣ちつゝ、暗に鬱勃の意氣を乘馬に向つて吐露せし者の如くなりし而して此愛馬を乃木大將の手に寄する能はざるを深く憾とせしかば乃木大將も將軍の心事を思ひやり然らばとて其馬具を無心に及びたるにステツセル將軍は旅順に精良なる英國製の馬具一式備はり居れば之を呈せんと云ひしに乃木大將は否々予は露國の實用的戰時用のものを欲す願くは閣下の紀念として之を申受けんとて將軍常用のものを請ひ受けたりと

兩將別る

午後三時二十分ステツセル將軍は會見所を辭して旅順口に還れり發するに臨み乃木大將曰く旅順の御住居は不自由ならんか尙ほ暫らく従前の生活を繼續せられたしとステツセル將軍は我津野田參謀の先導にてレーイス參謀長と相並んで行く此時内外觀戰者は勿論我兵卒に至る迄舉手注目姿勢を執れり

乃木大將も亦續て松樹山砲臺に向つて去れり

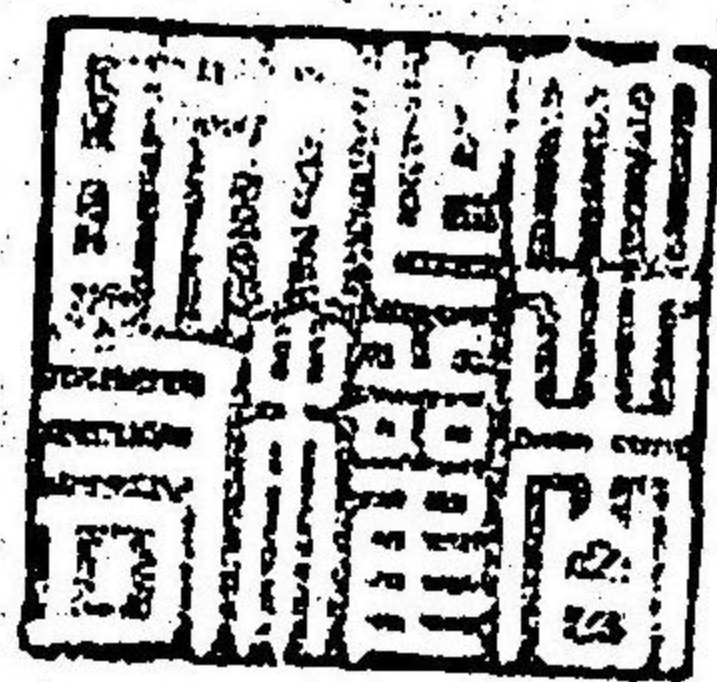
旅順入城式

開城規約に記したる砲臺、堡壘、捕虜初め旅順に於ける一切の物件悉く我攻圍軍に受領したるを以て、一月十三日午前十時より入城式を舉行したり、之より先き午前六時噺院たる集合喇叭の聲は攻圍軍各師團の陣地に起り、入城式に參列する各隊は整々として舊市街に向ふ市街の入口に於て各隊は隊伍を整へたり即ち左の如し

第一軍樂隊、次に乃木司令官伊知地軍參謀長以下軍幕僚高等文官通譯官、次に各師團長、所屬聯隊、旅團長、砲兵、工兵、衛生隊、次に新銳縱隊次に中央縱隊左翼縱隊、各指揮官等以下之に倣ふ、各隊皆な進軍喇叭を吹奏し軍容肅々又堂々として、舊市街を通過し新市街に進入し、中央の病院と公園との廣地に停止して分列式を行ひたり入城式は茲に結了したり當日の入城式には全軍參加すべき筈なるも、之を集中すべき廣地なきを以て已むなく各一個聯隊より一中隊を總代として參加せしめたりとぞ、市街は毎戸日章旗を掲げ、支那人は日本國旗と赤十字旗に日本國民と大書したる大旗を樹て沿道に群集歡迎したり、夫れ旅順口は露國が東洋方面に向て臍慾を逞ふる策源地と定めたる所彼が此天嶮の半島を占領してより茲に七閱年此間彼は、此天嶮に加工して堅城を築き軍港を設け十萬の壯壯を集中し二十餘萬噸の艦艦を遊弋して百世難攻不拔と持みし所、今や忠勇絶倫なる我日本軍の爲め其海軍は殘滅せられ其堅城は攻略せられ、彼が東洋に對する百年の大計は茲に全く水泡に歸し終りぬ是れ天也命也、

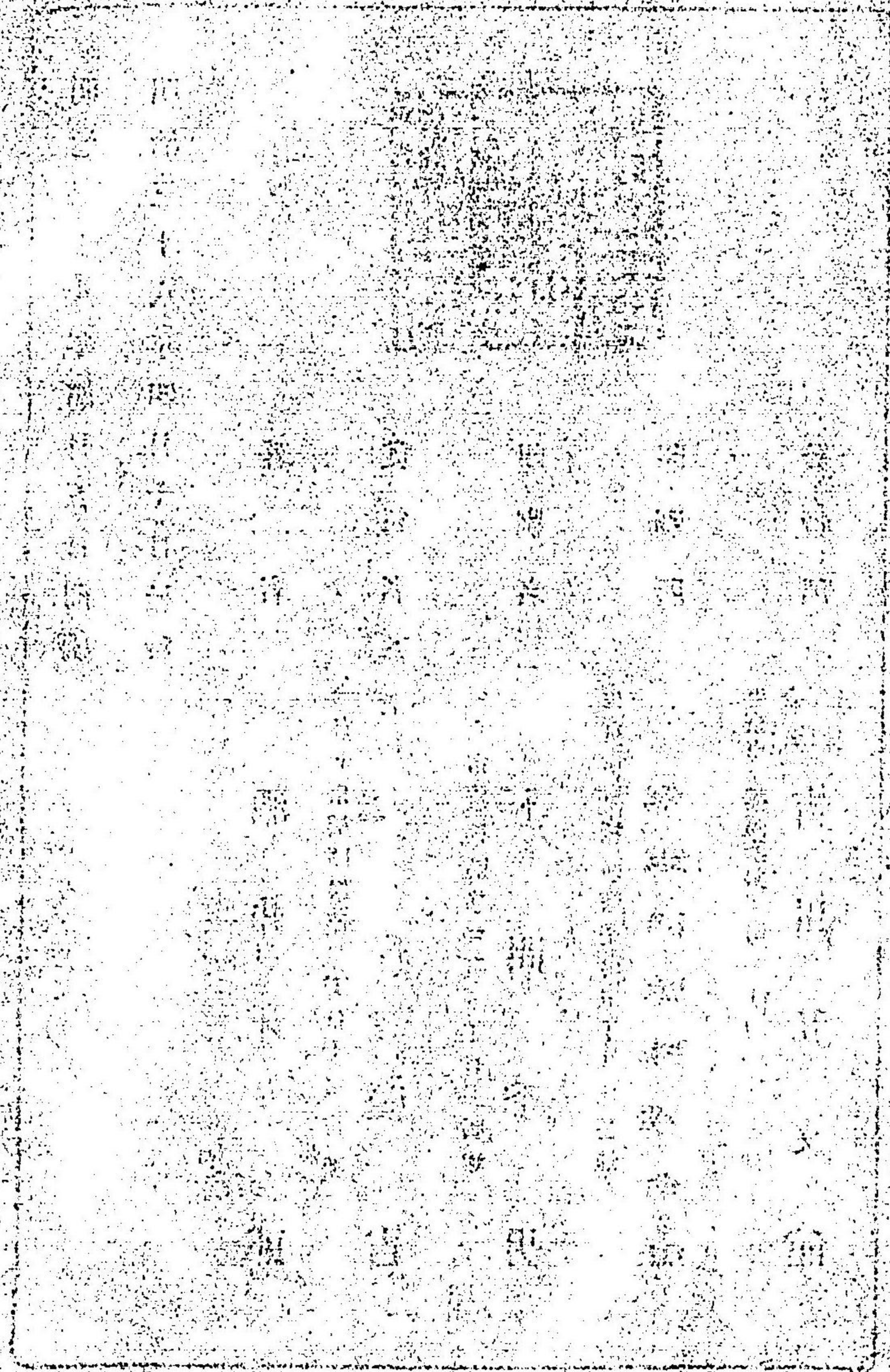
旅順攻略戰史終

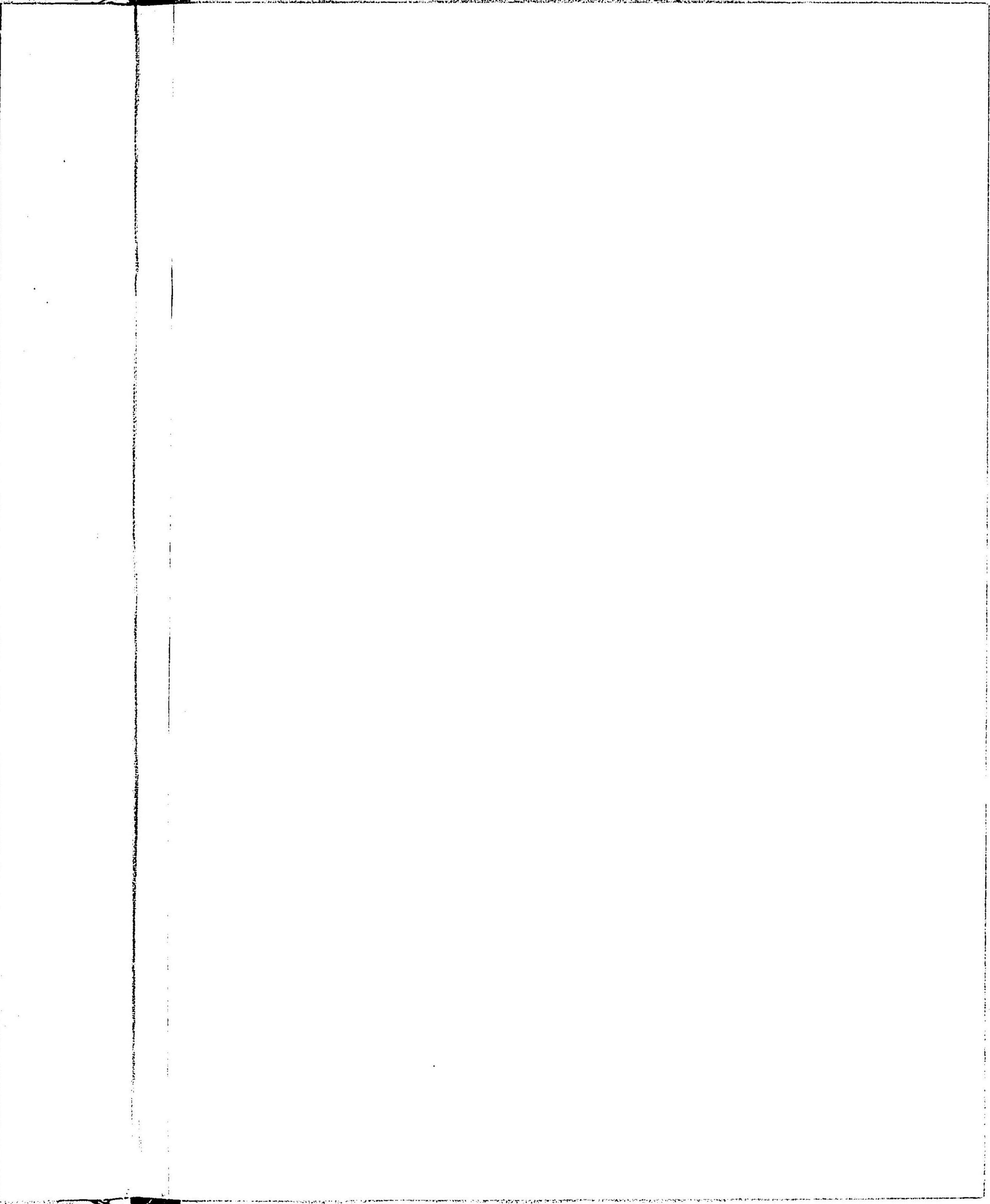
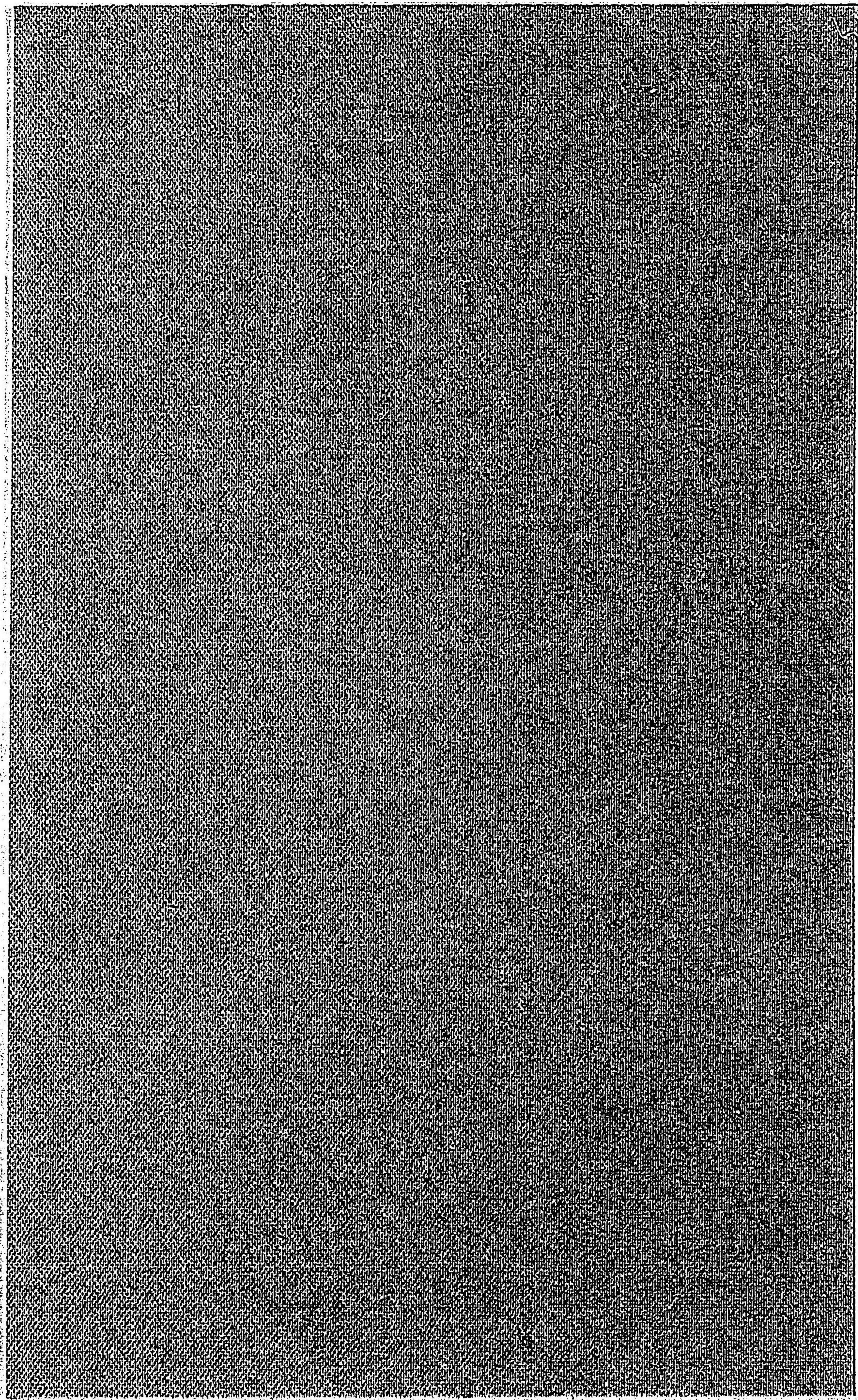
明治三十八年四月五日印刷
明治三十八年四月十日發行

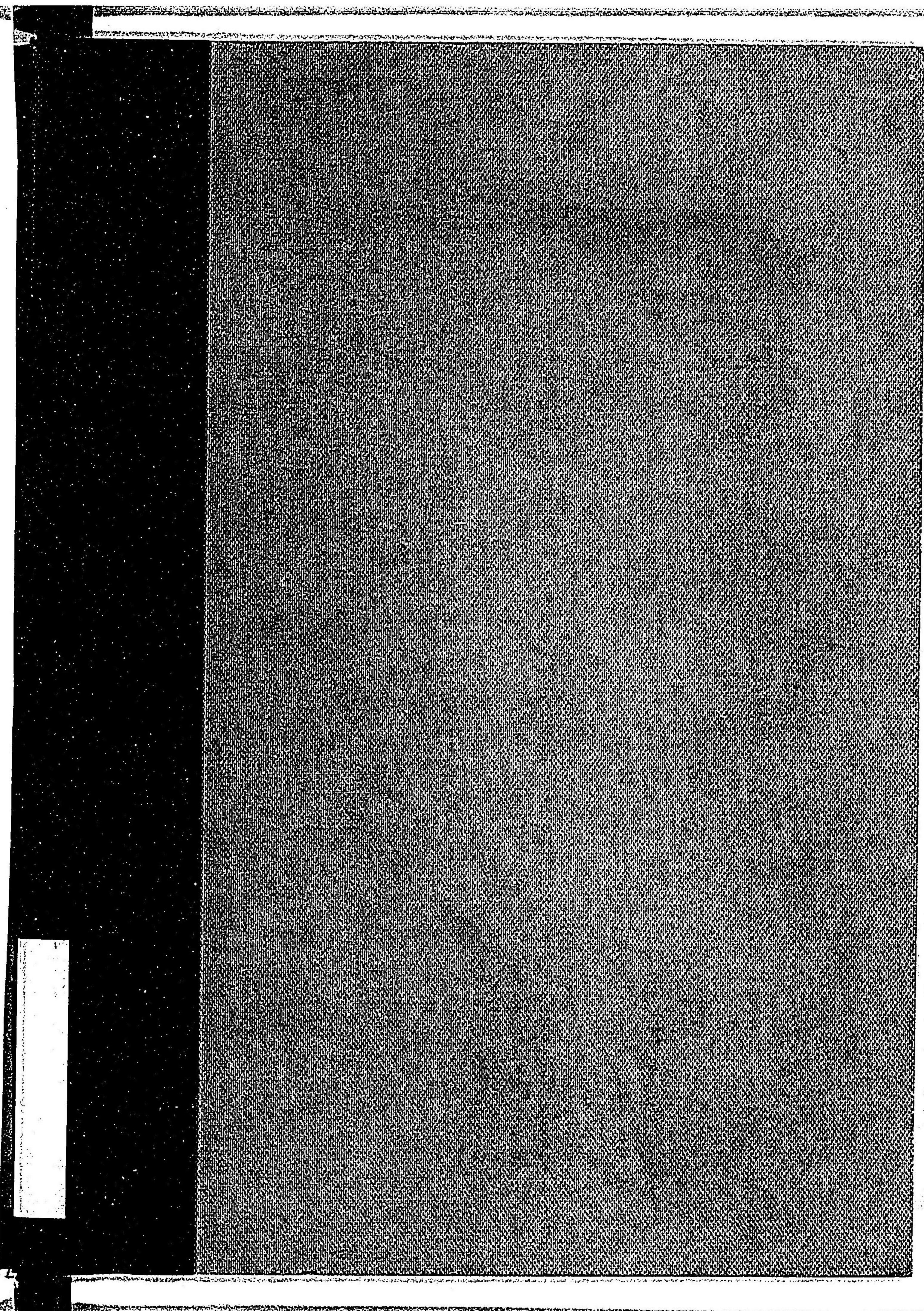


著 者 酒 井 才 一 郎
發 行 者 萬 歲 鐘 大 野 慶 吉
東京市京橋區銀座二丁目十五番地
印 刷 者 本 間 季 男
東京市京橋區新榮町五丁目三番地
印 刷 所 東 京 活 版 株 式 會 社
東京市京橋區南馬場一丁目十二番地
發 行 所 吉 川 弘 文 館
合 資 會 社

90-0P







Small white rectangular label on the left edge, containing illegible text.

83
361

旅順攻略戦史

国立国会図書館

002971-000-1

83-361

旅順攻略戦史

酒井 才二郎/編

M38

ACB-6565



